

堀内 勝*

Masaru HORIUCHI *



今夜は何夜月 「一か月」の時を刻む

アラブの伝統時制(3)

Nights of a Month based on the Moon and its Manzils

A Traditional Daily Life of the Bedouin Cultures

はじめに

時制は日々の大雑把な日常生活時間の領域と、精密さを要する公的・歴史時間のように科学時間の領域に分かれよう。後者の緻密で長期的の-spanに立つ暦学や天文学などの専門書や専門機器を用いる領域は筆者の研究分野に余るのでここでは扱わない。本稿では生活に密着した民族・民俗学の領域を、空を仰ぎ見るアラブの内側からの、民衆次元のイーミックな領域を主として扱う。この視点に立って「アラブ基層文化の追究」の一環として「時制」を扱う。表題を(3)としたのは、筆者には既に「時制」を扱ったものとして(1)「一日の「日時」 時を刻む アラブの「時制」の考察」、(2)「アラブ遊牧民のカレンダー 星の歳時記」の論考があるからである。(1)では時の概念と一日の分割について論じた。(2)では十二か月を星の歳時記である黄道十二宮と二十八宿を目安に俚謡を含めて論じた。本稿も(2)と同じ視点に立って「何夜月」の一か月内の時制を扱う。二十八宿にはアラブ遊牧民の古謡・俚謡があったように、一か月のそれぞれの「何夜月」にもわらべ歌とも俚謡とも採れる言い伝えがあるのは驚きであり、また流石でもあり、それを異文化の我々に紹介できるのは筆者にとって僥倖といったところである。

- 1 一か月の「月」、天体の月 qamar と時間の月 shahr
- 2 一か月の中の時制・節目の区切り方
- 2-1 サラース(三日・三夜ごと)の区切りについて
- 2-2 今夜は何夜月、日々の月概括
- 3 サラース(三夜ごと)、一夜ごとの具体相
- 3-1 「第一サラース」第一〜三夜月
ヒラール Hilaal(三日月)、グラル Ghurar(微月)、ズフル Zuhr(華月)、
バラウ Baraa'(新生月)、アドファク Adfaq(曲月)、ハーキン Haaqin(臥月)
- 3-1-1 「一夜月」 hilaal、ibn laylah
- 3-1-2 「二夜月」 ibn laylatayn
- 3-1-3 「三夜月」 ibn thalaath
- 3-2 「第二サラース」第四〜六夜月
ヌファル Nufal(余月)、サマル Samar(閑談月)、カマル Qamar(月)、シュフブ Shuhb(銀月)
- 3-2-1 「四夜月」 ibn arba"

*中部大学名誉教授(元・国際文化学科)

- 3-2-2 「五夜月」 ibn khams
- 3-2-3 「六夜月」 ibn sitt
- 3-3 「第三サラーズ」 第七～九夜月
トゥサウ Tusa" (九夜月)、アフラーウ "Afraa' (灰月) プフル Buhr (輝月)
- 3-3-1 「七夜月」 ibn sab"
- 3-3-2 「八夜月」 ibn thamaan
- 3-3-3 「九夜月」 Ibn tis"
- 3-4 「第四サラーズ」 第十～十二夜月
ウシャル "Ushar (十夜月)、ドゥラル Durar (真珠月)
- 3-4-1 「十夜月」 ibn "ashr
- 3-4-2 「十一夜月」 ibn ihdaa "ashrah
- 3-4-3 「十二夜月」 ibn ithnatay "ashrah
- 3-5 「第五サラーズ」 第十三～十五夜月
カマル Qamar (月)、バドウル Badr (満月)、ビード Biyd (明月)
- 3-5-1 「十三夜月」 ibn thalaatha "ashrah
- 3-5-2 「十四夜月」 ibn arba"a "ashrah
- 3-5-3 「十五夜月」 ibn khamisa "ashrah
- 3-6 「第六サラーズ」 第十六～十八夜月
ドゥラウ Dura" (夜半月)、ヌカル Nuqal (減月)
- 3-6-1 「十六夜月」 Ibn sitta "ashrah
- 3-6-2 「十七夜月」 Ibn sab" a "ashrah
- 3-6-3 「十八夜月」 Ibn thamaaniya "ashrah
- 3-7 「第七サラーズ」 第十九～二十一夜月
ズラム Zulam (暗月)、ブハム Buham (闇月)
- 3-7-1 「十九夜月」 Ibn tis" a "ashrah
- 3-7-2 「二十日夜月」 Ibn "ishriin
- 3-7-3 「二十一夜月」 Ibn ihdaa wa- "ishriin
- 3-8 「第八サラーズ」 第二十二～二十四夜月
ハナーデイス Hanaadis (出の遅き月)、サーフール Saahuur (寝ずの番月)
- 3-8-1 「二十二夜月」 Ibn ithnatayn wa- "ishriin
- 3-8-2 「二十三夜月」 Ibn thalaath wa- "ishriin
- 3-8-3 「二十四夜月」 Ibn arba" wa- "ishriin
- 3-9 「第九サラーズ」 第二十五～二十七夜月
ヌハス Nuhas (悩み月)、ダアーディー Da' aadii (急かれ月)
- 3-9-1 「二十五夜月」 Ibn khams wa- "ishriin
- 3-9-2 「二十六夜月」 Ibn sittu wa- "ishriin
- 3-9-3 「二十七夜月」 Ibn sab" wa- "ishriin
- 3-10 「第十サラーズ」 第二十八～三十夜月
ミハーク Mihaaq (隠れ月)
- 3-10-1 「二十八夜月」 ibn thamaani wa- "ishriin
- 3-10-2 「二十九夜月」 ibn tis" wa- "ishriin
- 3-10-3 「三十夜月」 ibn thalaathiin
- 4 雨 一か月内の雨

1 一か月の「月」、天体の月 qamar と時間の月 shahr

本稿で多くを引用する Subh al-A"shaa (11頁参照)の記述「一か月とは新月の出現を確認した時から始まり、次の新月の出を確認するまでの時空間を言う」(II 359)。陰暦ではいずこもこうした一か月の時制を持つことであろう。一か月の時制は天体の月に依存している程に、後者の比重が大きい。

わが国では天体の「月」も、一か月の時の「月」も、同じ「月」で表される。どちらの方を言及しているのか、口頭や書面では文脈で判断するか、曖昧な場合わざわざ説明を加えなければならぬ。英語では前者は Moon、後者はその変化形 Month で差異化している。アラブ世界では全く別な語で表現される。天体の「月」はカマル qamar、そして一か月の「月」はシャフル shahr で表される。両者の語の由来は後に述べよう。

暑く乾燥した世界では、昼の太陽の暑熱を避け、夜間の涼しさを呼ぶ月星に生活の比重がかかっている。雲にも雨にも煩わされること少なく、夜の天体の占めるアラブ・遊牧民的日常世界は意外に大きくて深い。アラブの伝統的慣行では一か月の中で「今日は何日？」と尋ねるより、「今夜は何夜月？」と尋ねる方が普通であった。と言うのもわが国の「月」が両義の概念であると同様、天体の月の形状が、月面の満ち欠けが、いずこの文化圏よりも一か月(二十九～三十日)分割の指標となっていたからである。

黄道上の星や星座たちは、一年を通しての黄道十二宮、月の二十八宿として十二か月の「月齢」即ち「月読み」を提供していた。太陽のお成り道・黄道に沿っての星座が十二の宮(burj)となって一年の各月を表していた。同じく月のお成り道・白道(ほぼ同じ軌道であるが)に沿っての星や星座も、一か月より細かい、それを2⅓、即ち十三日を一区切りとして二十八宿(manaazil al-qamar)を形成して年間の時制となっていた。月の循環は一年の指標、即ち十二か月の十三日ごとの指標となっていただけではない。毎夜の月の位相と刻限とに相関を持ち、「月齢」だけでなく「日齢・日にち」の確認の意味合いも持ち合わせていた。その満ち欠けから一か月内の日取りの目安となっていた。

もう少し詳しく述べよう。天体の月は毎日その位相を変え、十二宮をさらに二十八に分割した星ないし星座を毎夜の宿(manzil)として、一日ごとに宿を順次換えて移行してゆく。このように一か月の日にちの指標としてマンジル「月の宿」としても機能して、毎夜の月の位相と相関を持ち、「日齢」「日にち」として機能していたのである。従って夜の天体・月は黄道の星や星座たちと共に、昼の天体・太陽では区切りが明瞭とはならない一年を通しての黄道十二宮として「十二か月」の「月読み」を提供していただけではなく、さらに月の二十八宿は一か月内の「日読み=暦」の指標となっていた。それ故「今日は何日」、というより「今日は(今夜は)何夜月」と言った方がアラブ世界の実相を反映していたものであった。本稿で扱うのは一か月の中の時制分割であるので、一か月単位となる太陽よりも、そのさらに細かく分割した指標となれる月と星が頼りとされる。何日より何夜月の時制が関与する。以下で扱う「何夜月」はカレンダーに依拠しない民俗事象としての「日読み」「暦」を提供していた。

それ故「今日は何日」、というより「今日は(今夜は)何夜月」と言った方がアラブ世界の実相を表していたものであった。即ち「月面・月相」を読み取ると同時に、十二宮を細分した月の二十八宿(manaazil al-qamar)をも読み取って、何夜月かの確認を行っていたのである。十二宮の

方は一か月を超えた「月」の時制の、その月全体の特徴の対象となっていた。が、その分割された二十八宿の方は、一宿を形作る星や星々が十二宮の下位単位として一年の周期の目安となっていたと同時に、一か月の夜ごとの「何夜月」の「月の宿」をも示していた。と言うのも一か月の二十八日は順次月がその宿に留まり、昼の間に次の宿に移行すると考えられたからである。それ故にこそ二十八宿のそれぞれは「月の宿」(manzil al-qamar)と言われるわけである。即ち太陽は黄道十二宮のいずれかに順次一か月間属する。十二宮のいずれかの宮 (burj $30/360$ の塔) の中であって、ほぼ一度ずつ移動して次の宮 (ブルジュ) に入っていくのであるが、日ごと単位では細かすぎて一度では読み取ることが出来ない。その点、月は移動が速く一日に12~13度を移動するので、容易に目安となる。月は夜空の天体の中では最も早く動く。アラブにも「その変化において月よりも早い」Chennery II 90、234と言われるように、刻々その位置を変える。夜毎その出没の刻限と形相を変える月は時制で言えば、時間の、日の、月の刻みを人間生活に知らせているのである。十二宮が細分された「月の宿」(manzil)は月が一か月の毎日のそれぞれの宿を提供することになる。その一宮(ブルジュ)のさらに $3/4$ と細分化した一宿 ($13/360$) を始点として順次夜ごとに宿を移行してゆくからである。なお月の二十八宿 (manaazil al-qamar) 概念では、二十八夜までであり、二十九夜(および三十夜目)は全く月面・月相が姿を見せないで二十八宿の埒外に置かれている。太陽の中に入って姿を見せないで新月出現までの「太陽の宿」とされているとも見られる。

イスラム暦は一か月が三十日か二十九日かで成り立つ。普通はそれが交互に来るわけであるが、三十日で一か月が成り立つ場合、完全に日数を満たすところから「完全月」と言う意味で、シャフル・ターム shahr taamm と言う。わが国の「大の月」に当たろう。そして二十九日で一か月が終わる月は「欠け月、不全月」の意味でシャフル・ナーキス shahr naaqis と言われている。わが国の「小の月」ということになろう。またひと月として、「大の月」と「小の月」とが交互に続く。わが国のひと月置きのことを「月交ぜ」と言う概念があるが、それと同じで基本的には同じ日数の月が続かないので、アラブの方では十二か月は、個々に独立したお互いの「分離月、取り除け月、見捨て月」の意味でムファールカ mufaarakah なる用語でも呼ばれている。

月の二十八宿 (manaazil al-qamar) の一か月の「宿」について分かり易く「春分の日」を日月の始点とする場合を例に採ってみよう。以下もこの視点に立つ。三月二十一日は伝統的には太陽は十二宮のうち第一宮牡羊座の始点にあるとされた(現在は地軸のずれで魚座に移行している)。四月星座の牡羊座に太陽がそのブルジュ (塔=宮) を占める。日の出とともに天の赤道上の分点を進み昼夜の等しい時間を計って西に没する。月もまた太陽と同じブルジュ (塔=宮) の中にあると想定する。入り日の陽光のため見えないのであるが、それを十三日で細分した宿 (manzil) のなかに安らいでいて、太陽に僅かに遅れて周回する。それが牡羊座の宮を細分した第一宿シャラターン al-Sharātān (牡羊の二本印=角) である。日没後、月はこのシャラターンを宿として、宵の西空に僅かにその姿を見せる。三日月とは言えない細い纖月がシャラターン宿に安らぐわけである。二日月は牡羊座の第二宿 ($26/360$ 内) ブタイン (al-Buṭayn 牡羊の小腹) に移動し、太陽とは少し距離を置いて遅れて闇が増す宵となる頃西に没してゆく。そのため二日月辺りからは地上において見やすくなる。こうして月はそれ以降、次第にその姿を顕し、十五夜を境にその姿を徐々に隠してゆく。アラブ社会では、月が覆っていた外套を次第に脱いで行き、銀白色の美顔ないし素肌を見せてゆき、後半月は隠してゆくと考えられている。日ごとに「何夜月」と目安にされるのは、月の出の刻限及

び月の表面・その相とこの月の二十八宿の星取りの位相である。

本稿では一か月の分割時制を一日ごとに何夜月として述べてゆく。冒頭にアラブ世界での天体の「月」はカマル qamar、そして一か月の「月」はシャフル shahr で表される、と述べた。この両者の語の由来について述べておく。天体の月カマル qamar については、その意味やそれに纏わる文化的事項は「qamar (月)の表象」として拙稿「夜」そのアラブ的表象(後-1)、『アッサラーム』第23号(1981年9月)の第二節で触れておいたので参照されたい。そこでは言及していない事項についてここで少し述べておこう。

アラブ地域には古代オリエントの時代から天体信仰が存在し、その中でも「三神信仰」が大きな比重を占める。即ち父を月とし、母を太陽と、そして星の代表である金星をその子とした「三神信仰」思想があった。なかんずく月神は天体の月、一か月、毎夜の月と、さらに他の星辰とが重層して、実生活とも精神・信仰ともに深く関与していた。バビロニアでは月神シンが父で、太陽神シャマシュが母、金星神イシュタルとはその子供としている。月を男性とし、太陽を女性とするのは、セム族のセム(アフロ・アジア)語に共通する概念である。言語やジェンダーにおいても子孫のアラブ族のアラビア語はそれを継承している。以下の「何夜月」のそれぞれも「Ibn〜」(何夜の息子)として叙されている。半島北西部にあるテマ(現タイマー)はバビロニア文化の最南端にあつて、都市神が月神シンであったことは知られている。シナイ半島の地名も月神シンから由来している説もある。

アラブ遊牧民の間でも「月」をトーテムとも関連して部族名や己の名前ともしていた。「月」の総称カマルを称する部族もあった。カマル族 Banuu al-Qamar がそれで、カフターン系イエメンアラブの雄族であった。近代ではオマーンのアフダル山を領するリヤーム族 Banuu Riyaam やハディール族などがこのカマル族の末裔とされている。「満月」バドルを部族名としたのはズブヤーン族の支族、バドル族 Banuu al-Badr であった。「三日月」を部族名としたのは半島西岸から北アフリカに移動したヒラール族 Banuu al-Hilaal であった。

一か月シャフル shahr の語義について。さて、それでは後者の「一か月」の時制を意味する基本語シャフル shahr について、その語義や文化的背景などについて触れておく。

一か月の月の動きについて、「月始め」、「月立ち」即ち「朔日」はイジティマーウ ijtima" (会合)とかイッティサール ittisaal (接合、接続)とか言われる。一方十五夜の満月・望はイスティクパール istiqbaal (向かい合い、相対)とか言われる。この意味合いを見ても分かる通り、これらの名称は月だけが対象ではなく、月の位相と太陽との相関が絶えず意識されての名称なのである。

一か月の時制の「月」シャフル shahr とは、その語義は「月」の縁語から生じている。おなじみ同族語シャヒール shahiir とかマシュフル mashhuur とかの「有名な」と同じ語根である。シャフル shahr は、元来はシュフラ shuhrah と言って、「明るみに出す、公にする、暴き出す」ことである。月本体をどれ程〈明るみに出す〉か、その月相を言っている。また〈月光〉がおおよそ照らし出すところ、何も残らず闇の世界を〈明るみに出す〉ことにも由来する。姉妹語のシリア語でも一か月の「月」はサフル sahr と言われていたことが知られる。「月」の複数の「月ゞ」の語は二つあり、少数複数はアシュフル ashhur と多数複数はシュフル shuhuur と、これも本来ならば厳然と使い分けられていた。

シャフル shahr が「月」、「一か月」として、時制の基本語となる中で、この語に基づいて、派生語が作られてゆく。シャフル shahr を動詞化した語がシャハラ shahara であり、「〈一か月〉が経過する」

となる。生後〈一か月〉経った赤子、母親などが〈動作主〉に用いられる。牧畜圏なので当然のこととして家畜や動物の個体にも等しく用いられる。「生後〈一か月〉経った子・仔」のことは、ムシュヒル mishhir との月齢単位用語となっている。「〈一か月〉に払われる費用や金、給料、年金」などはムシャーハラ mushaaharah と言っており、それを支払う行為はシャーハラ shaahara で言い表す。なおシャーハラ shaahara には「〈月決め〉で行う、雇う、契約する」の意味も派生する。

シャフル shahr を形容詞化したアシュハル ashhar とは「月(一か月)に相応しい、月のような、もっとも月らしい」、さらには「もっとも名の知れた、有名な」月と派生している。十二か月の中でも、年祭や私的な場合でも一か月全体ではなく、その日が一か月中の何日目であるのかを特に意識させられる、そういう一か月を言っている。公的ではなく、私的な誕生日の伴う場合、婚約・結婚式などのハレの場合なども一日一日が意識させられる。こうした場合特に「月」を意識する月を言っている。月面も指す場合があるが、多くは時制を指して用いられる。それならばアシュハル「最も月らしい月」それは何月なのであろうか。ムスリム一般大衆には生活自体がその月が特別体制に入るラマダーン(断食月)を指していよう。しかし宗教においては「最も月らしい月」とは、ズー・ハッジ(Dhuu al-Hajj)を指している。即ちハッジ(巡礼月、巡礼時期)を指しているのだ。

また一か月が「新月」を単位として月々の尺度ともされた。その一例を文学作品から引いてみよう：

奴隷商人達は私の注文に合う者を探すべく俄かに動き出し飛び出していった。一刻も早く注文のものを確保せんと躍起になっていた。しかしそれから何回目の新月が巡ってきたろうか、月の満ちては欠ける日々が繰り返されても、彼らは約束の一つももたらせてはくれなかったし、雷鳴はあれど降雨がもたらされることは無かった。奴隷商人達が私との約束を忘れたか、忘れた振りをしているのを見て、つくづく納得したものである、請け負った仕事を完璧にこなす人間などいないものだ、痒い所を搔くことが出来るのは自分の爪だけなのだ。

(Har. 第34話 拙訳平凡社版Ⅲ8)

ここでは「新月」ヒラールが、時制の「一か月」であるシャフル shahr の代わりとして用いられている。いわば換喩であって、新月という一か月の部分が全体を表している、そういう形で喩えられていることになる。盈虚即ち月が満ちてゆく盈から減じて行く虚。アラブ世界では、その虚に向かうのを「減少する」という。〈月〉主体の「減少する」ことをナカサ naqasa と言い表わす。ナカサとは、本来完全であるもの、満杯であるものがくずれる、欠ける、流出・減少することを言う。それも大きくずれるというのではなく、その完べきさがいくらか損じてゆくこと、崩されてゆくことを指して言う。あるいは抽象的には一か月の後半は「虚」、即ち満月が欠けてゆき、光明が減じてゆくので、勢いが衰える。月の後半を「黒月」という東アジアの習慣とも共通しよう。イスラム期以降、ペドウィンの間でも月信仰に代わって、さらにそれをも凌駕して唯一神が位置付けられる。月は神によって人間や他の被造物に対して一日や一か月や歳月を知らせ、光明となるものとして位置づけられる(例えば『コーラン』第10章5節を参照)。神が創造したものとして理解されて、月信仰は変形されて続けられた。神の創造物 khalq の一つとして「月」が位置づけられる。

なお月見において、月に雲がかかったりして量が見える時がある。この「量」のことであるが、普通には仏像などの後背や後光などと同じハーラ haalah (pl. haalaat 「畏敬・恐れさせるもの」と言うのであるが、太陽にかかる量がタファアーワ tafaawah (浮いたもの)と言うのに対して、「月にかかる量」のことをダーラ daarah (丸いもの)と、異なった語を用いているのにも興味が惹かれる。

そして「月に暈がかかる」ことはタフジール tahjiir と言い、暈が囲みとなって月本体にハジュール (hajr 接近禁止) となることを言っている。

また「雲の重なる襞」、「雲間」と以下の俚謡の中で謳われているが、アラブには「木洩れ月」 iftaaq なる用語もあり、興味深い。一年中晴れの暑く乾燥したアラブ世界であっても、冬季は曇りがちであったり、降雨があったりする。雲がかかっていると、夜旅や夜間放牧、夜の作業には、月も星も頼りにならず難儀となる。しかも周囲が闇に近い状態で、足元もおぼつかない。ラクダの奥まった井戸底のような眼は、こうした闇の中、大きな黒目を最大限開けて、光を集め夜行性の特技を生かした行動をとる。こうした暗さ中에서도行動をとれるラクダは、騎乗する人間に安心感を与え、任しきっていられる。

覚束ない闇夜の中、雲間から月や星が現れることも多い。木漏れ日、ならぬ「木漏れ月」であって、どれほど難儀する人間の助けとなることか。おのれの辿る道や方角ではなくとも、闇からの困惑度が減じようし、木漏れ月の当たる場所・地点の確認によってその位置を確かめられる。しかも雲間は絶えず動いており、その移動でも様々な手掛かりを得ることができる。おのれの周囲に月明かりが到来したら、一行の、道連れや荷物、ラクダ達の大凡の状態を把握できるし、進むべき道の道程の確認も出来る。木漏れ日は昼の強烈な日差しを出来るだけ避けるのに対して、木漏れ月は夜間の優しく温和な月光を提供することになる。

さてこのような安堵感を与える「木洩れ月」にも特称をアラブは持っている。マスウーディーを参照すれば(Mas, II 196)、アラブはイフターク iftaaq という用語を持っている。イフタークとは「分離する、破る」の語根動詞ファタカ fataqa から派生したアフタカ aftaqa「雲間を分け、破り、月光が顔を出す」動詞の動名詞形なのである。厚い雲や黒雲が覆う中で、薄くなってやがて切れ間 (fatq, farjah) を出し、地上に光を届ける。月がわざわざ雲の層を分けて、その光を地上に降り注いでくれる、そう理解する。その恩恵に浴する人にとっては、天空に抱く慈恩を昇華させざるを得ない一時となる。これがインフィターク infitaaq「月によって雲が分離される」の語として、生かされている。雲の隙間、雲間はやはり派生形のファトク fatq で表され、それが複数あるとフトウク futuuq と言われる。

2 一か月の中の時制・節目の区切り方

一か月を構成する日々はそれぞれ数詞の序数で表されるのが普通である。数字で表さない場合、個々の命名に頼らなければならない。実際一か月の各日の命名をしている文化もあるようだ。ビールーニー著『占星術教程の書』(山本啓二他訳)の中の「暦日の日に名前があるか」の項目には、「インド人には日の名前があり、それを管理する者は、彼らにとっての天使であるダイヴァに属している。同じくソグドやフワーリズムなどの人々にもあるが、それらはよく知られてはいない。〈口伝ではなく〉書写することによってその衰退が早まったのである。地上の人々の間では、曜日が有名である。それについては彼らの間では違いが無いが、ペルシャ人はそれを用いずに暦日の日に名前を使っている。彼らはそれを神と天使の名前だと信じている。この表にそれらを書いておいた。(以下「ペルシャ人の各月の日の名前」として表が作成されており、一日はホルモズから三十日はアニーラーン、それに「盗まれた日の名前」として五日までの名称が付加されている。)アラビア語の研究者たちは砂漠の民を追い求め、彼らが容易に覚えることができなかった三十日の名前を集めた

図表1 アラブの一か月(今夜は何夜月)時制(分割概念)

黄道十二宮の牡羊座 二十八宿(月の御成道)第一宿のシャラタンから朔日が始まる場合。(二十八宿中の最後の漢字一字の名称は宿曜道の名称)

二分	三分	四分	十分 三夜ごと	何夜	十二宮	2 $\frac{1}{3}$ 宿	月の宿(二十八宿)
前半月・白月 Rajal, al-Layali al-Biyd	上旬 Hilaal	第一週 第一スブウ	第一サラース 一〜三夜 Ghurar Zuhr	第一夜 Ibn Laylah 第二夜 Ibn Laylataynn 第三夜 Ibn Thalaath	牡羊座 牡牛座	第一宮	al-Sharataan 牡羊の二つ印 婁 al-Butayn 牡羊の小腹 胃 al-Thurayyaa 富裕者 昂
			第二サラース 四〜六夜 Nufal Samar	第四夜 Ibn Arba" 第五夜 Ibn Khams 第六夜 Ibn Sitt	牡牛・オリオン座 双子座	第二宮	al-Dabaraan 後追う者 畢 al-Haq"ah 馬の白微 觜 al-Han"ah ラクダの烙印 参
			第三サラース 七〜九夜 Tusa' "Afraa' Buhr	第七夜 Ibn Sab" 第八夜 Ibn Thamaan 第九夜 Ibn Tis"	蟹座	第三宮	al-Dhiraa" 獅子の前肢 井 al-Nathrah 獅子の鼻 鬼 al-Tarf 獅子の目 柳
		第二週 第二スブウ	第四サラース 十〜十二夜 "Ushar Durar	第十夜 Ibn "Ashr 第十一夜 Ibn Ihdaa "Ashrah 第十二夜 Ibn Ithnatay" Ashrah	獅子座	第四宮	al-Jabhah 獅子の額 星 al-Zubrah 獅子の鬣 張 al-Sarfah 獅子の心臓・尾 翼
			第五サラース 十三〜十五夜月 Qamar Badr Biyd	第十三夜 Ibn Thalaatha "Ashrah 第十四夜 Ibn Arba"a "Ashrah 第十五夜 Ibn Khamsa "Ashrah	乙女座	第五宮	al-Awwaa' 吠え立てる者 軫 al-Simaak 乙女の掌 角 al-Ghafr 乙女の裾隠れ足 亢
						第六宮	
	中旬 Qamar	第三週 第三スブウ	第六サラース 十六〜十八夜月 Dura" Nuqal	第十六夜 Ibn Sitta "Ashrah 第十七夜 Ibn Sab"a "Ashrah 第十八夜 Ibn Thamaaniya "Ashrah	天秤座 蠍座	第七宮	al-Zubaanaa 蠍の鉋 氏 al-Iklil 蠍の頭 房 al-Qalb 蠍の心臓 心
			第七サラース 十九〜二十一夜月 Zulam Buham	第十九夜 Ibn Tis"a "Ashrah 第二十夜 Ibn "Ishriin 第二十一夜 Ibn Ihdaa wa-"Ishriin	射手座	第八宮	al-Shawl 蠍の針 尾 al-Naa'aa'im 駝鳥たち 箕 al-Baldah 空地地囲い 斗
			第八サラース 二十二〜二十四夜月 Hanaadis Saahuur	第二十二夜 Ibn Ithnatayn wa-"Ishriin 第二十三夜 Ibn Thalaath wa-"Ishriin 第二十四夜 Ibn Arba" wa-"Ishriin	山羊座 水瓶座	第九宮	al-Sa'd al-Dhaabih 屠殺者の幸運 牛 al-Sa'd al-Bula" 大飲みの幸運 女 al-Sa'd al-Su"uud 幸福者の幸運 虚
		第四週 第四スブウ	第九サラース 二十五〜二十七夜月 Nuhas Da'aadii	第二十五夜 Ibn Khams wa-"Ishriin 第二十六夜 Ibn Sitt wa-"Ishriin 第二十七夜 Ibn Sab" wa-"Ishriin	魚座・ペガサス座	第十宮	al-Sa'd al-Akhbiyyah 天幕の幸運 危 al-Fargh al-Muqaddam 水袋の前口 室 al-Fargh al-Mu'akkhar 水袋の後口 壁
			第十サラース 二十八〜三十夜月 Mihaaq	第二十八夜 Ibn Thamaani wa-"Ishriin 第二十九夜 Ibn Tis" wa-"Ishriin 第三十夜 Ibn Thalaathiin	魚座	第十一宮	Batn al-Huut 魚の腹 奎
						第十二宮	
後半月・黒月 Quraḥ, al-Layali al-Suud	下旬 Qumayr	第一週 第一スブウ	第一サラース 一〜三夜 Ghurar Zuhr	第一夜 Ibn Laylah 第二夜 Ibn Laylataynn 第三夜 Ibn Thalaath	牡羊座 牡牛座	第一宮	al-Sharataan 牡羊の二つ印 婁 al-Butayn 牡羊の小腹 胃 al-Thurayyaa 富裕者 昂
			第二サラース 四〜六夜 Nufal Samar	第四夜 Ibn Arba" 第五夜 Ibn Khams 第六夜 Ibn Sitt	牡牛・オリオン座 双子座	第二宮	al-Dabaraan 後追う者 畢 al-Haq"ah 馬の白微 觜 al-Han"ah ラクダの烙印 参
			第三サラース 七〜九夜 Tusa' "Afraa' Buhr	第七夜 Ibn Sab" 第八夜 Ibn Thamaan 第九夜 Ibn Tis"	蟹座	第三宮	al-Dhiraa" 獅子の前肢 井 al-Nathrah 獅子の鼻 鬼 al-Tarf 獅子の目 柳
		第二週 第二スブウ	第四サラース 十〜十二夜 "Ushar Durar	第十夜 Ibn "Ashr 第十一夜 Ibn Ihdaa "Ashrah 第十二夜 Ibn Ithnatay" Ashrah	獅子座	第四宮	al-Jabhah 獅子の額 星 al-Zubrah 獅子の鬣 張 al-Sarfah 獅子の心臓・尾 翼
			第五サラース 十三〜十五夜月 Qamar Badr Biyd	第十三夜 Ibn Thalaatha "Ashrah 第十四夜 Ibn Arba"a "Ashrah 第十五夜 Ibn Khamsa "Ashrah	乙女座	第五宮	al-Awwaa' 吠え立てる者 軫 al-Simaak 乙女の掌 角 al-Ghafr 乙女の裾隠れ足 亢
						第六宮	
	中旬 Qamar	第三週 第三スブウ	第六サラース 十六〜十八夜月 Dura" Nuqal	第十六夜 Ibn Sitta "Ashrah 第十七夜 Ibn Sab"a "Ashrah 第十八夜 Ibn Thamaaniya "Ashrah	天秤座 蠍座	第七宮	al-Zubaanaa 蠍の鉋 氏 al-Iklil 蠍の頭 房 al-Qalb 蠍の心臓 心
			第七サラース 十九〜二十一夜月 Zulam Buham	第十九夜 Ibn Tis"a "Ashrah 第二十夜 Ibn "Ishriin 第二十一夜 Ibn Ihdaa wa-"Ishriin	射手座	第八宮	al-Shawl 蠍の針 尾 al-Naa'aa'im 駝鳥たち 箕 al-Baldah 空地地囲い 斗
			第八サラース 二十二〜二十四夜月 Hanaadis Saahuur	第二十二夜 Ibn Ithnatayn wa-"Ishriin 第二十三夜 Ibn Thalaath wa-"Ishriin 第二十四夜 Ibn Arba" wa-"Ishriin	山羊座 水瓶座	第九宮	al-Sa'd al-Dhaabih 屠殺者の幸運 牛 al-Sa'd al-Bula" 大飲みの幸運 女 al-Sa'd al-Su"uud 幸福者の幸運 虚
		第四週 第四スブウ	第九サラース 二十五〜二十七夜月 Nuhas Da'aadii	第二十五夜 Ibn Khams wa-"Ishriin 第二十六夜 Ibn Sitt wa-"Ishriin 第二十七夜 Ibn Sab" wa-"Ishriin	魚座・ペガサス座	第十宮	al-Sa'd al-Akhbiyyah 天幕の幸運 危 al-Fargh al-Muqaddam 水袋の前口 室 al-Fargh al-Mu'akkhar 水袋の後口 壁
			第十サラース 二十八〜三十夜月 Mihaaq	第二十八夜 Ibn Thamaani wa-"Ishriin 第二十九夜 Ibn Tis" wa-"Ishriin 第三十夜 Ibn Thalaathiin	魚座	第十一宮	Batn al-Huut 魚の腹 奎
						第十二宮	

が、それらは明らかに不自然さや無関心さがうかがえる」とある（「イスラーム世界研究」V 1-2号330～31）。それによれば、インド人、ソグド人、フワーリズム人、ペルシャ人は一か月の各日に名称があったことになり、アラブもまたそうであったが、「アラビア語の研究者たちは砂漠の民を追い求め、彼らが容易に覚えることができなかった三十日の名前を集めたが、それらは明らかに不自然さや無関心さがうかがえる」とある。ビールーニーの記述は、筆者がこれから述べる内容とも異なるようだ。というのも管見ではこうした事例は見つかっていないからである。本稿で記すように、各日には数字が用いられており、個々の日に名称があるわけではない。アラブ遊牧民の特色は月の出没時及び月相の満ち欠けに基づいたサラース（三日ごと）の独特の名称を持っていたことであり、それを一か月の中の時の指針としていたことである。ビールーニーはこの三日ごと、三夜ごとの単位であるサラースのことを述べているのであろうか。

アラブ社会は一か月の中の時制・区切り方をいくつか持っている。以下作成した図表1を参照。一か月を細かくは1) 毎日・月の相と位置とその月の宿（月の二十八宿）のもう一つの働きを見立てて区切る、2) 大雑把に三日ごとに区切るサラース、3) 七日ごと、週ごとに区切るスプウ、4) 十日ごとの旬で区切る、5) 一か月を十三日周期、即ちその月のブルジュ（宮）を $\frac{1}{3}$ として $\frac{2}{3}$ に区切って連続する本来のマンジル（月の二十八宿）。6) 一か月を二分し前半月と後半月と区切る。ここでは3)と5)とは「一か月」を越えて連続してゆく時制なので、大きくは扱わない。3)のスプウ「週ごとに区切る」のは、古代オリエントの伝統であり、アラブも古くから踏襲している時制である。しかし「一か月」を超えて連続してゆく時制であることと、さらに時制に関しても日月火水木金土の七惑星との呪術的関与までも含めた民族概念が強く反映されており、述べること多く本稿では扱わず別稿としたい。（週日の中、伝統的には水曜、土曜日が、そして一か月の中、四、十四、二十四の数字四のつく日が凶日 al-ayyaam al-nahsaat であったことはここで申し添えておきたい Mas. II 191）

大きな区切りから述べてゆこう。もっとも大まかには一か月を二分する6)であるが、前半月と後半月とに分けられよう。新月から満月に至るまで、即ち朔日^{ついでたち}から満月の十五日に至るまでの半月間、およびそれ以降の十六日から月末までの後半である。満月までに至る「前半月」のことであるが、これらを総称して我が国では「上弦の月」と称することがある。「上弦の月」は、厳密には七日夜（ないしは八日夜）の半月のことをいうのであるが、上弦とは月が東に昇ってから夜半まで、月自体の外側の弓自体が月を、そしてその弓に張られる弦は見ることはできないが、あるとすれば上にあることに由来して名付けられたものである。そうだとすれば、この命名は第八・九夜目以降の月の形に厳密にはそぐわない。上弦月とは「弓の弦が上にある」形であるわけだから、「弓弦」の形として合致するのはせいぜい「七日月」までのことであろう。「陰暦で七日頃の月」と限定している辞書もある。しかし上弦月とは一般に月の上部ないし東側が欠けていることを指し、「十四夜月」までを指して云われる。その不合理に疑問を感じない一端には、上弦の「上」は「上向く」、即ちこれから「盛時に向かう」意識が反映されているからでもあろう。

他にも「前半月」を意味する語に「白月」がある。「びやくがく」とも「はくげつ」とも読まれるが、日をおって月の輝かしさ、即ち月本体や月光の白さ・輝かしさの部分が勢いを増してゆくことが反映されているためであろう。この「白月」という概念及び成語自体、インドから中国、日本に至るまで存在する。インドでは古代から暦法の中に組み込まれており、例えば子供が誕生し、第三回目

の白月の三日目の夜、月に対して父親が赤子を見せて対面させる慣行があることは知られているが、こうした風は、赤児の通過儀礼として白月を介して「生者への合体」、「社会への合体」に次いで「宇宙への合体」儀礼の象徴化として理解されていると聞く。矢張り満月に至るまでの勢いのある夜々であるからであろう。

アラブの一か月のもう一つの二分法は三十日を構成している円環を半円に分けるもので、ラジャル(rajal 前半十五日)とクラフ(qurah 十六日から二十九ないし三十日)に分ける。一か月に十五日ずつに二分し、前半月ラジャルと後半月クラフと区切る時制である。イブン・クタイバによれば月の出や月光、星明りや曇り空との関係で、夜半前は明るく夜半過ぎは暗い夜、これをラジャル(rajal)と言っている。反対に夜半前は暗く夜半過ぎは明るい夜、これをクラフ(qurah)との用語で使い分けている(Qut.181)。一か月の前半月ラジャルは宵から月があり、光度も日を追って強くなってゆくため明るく「白月」に当たり、後半月クラフは月の出が遅く、光度も減少してゆく「黒月」となるわけである。そしてこうした時制も含めた自然現象も、家畜認識眼を当てはめており、アラブの認識体系や思考方式が遊牧文化と深く関わっていることを教えている。いずれも〈体毛色〉から採られた縁語であり、即ちクラフとは羊やヤギなどに多い頭部ないし上半身が黒などの色毛の個体であって、胴体ないし下半身が白毛を言い表す用語なのである。一方ラジャルとは下半身、先端の四肢(rijl pl. arjul)の黒毛の個体を指す用語である。(また双子座の日没後の出現(matla")は冬の時期に向かう最初であるが、その折の雨もラジャルと言っている。)これからの時制を表す用語の中にも家畜の肌色の用語が相補的に、また流用化が観られることを申し添えておこう。

一か月に三分する「十日間」を分節する時制もアラブは持っている。いわゆる「旬」である。これも月の満ち欠け、月相から由来している。新月から十日までの「上旬」はまだ月の形が弓なりで湾曲が強調され、丸くは無い。この「一〜十日」までを「三日月」を代表させてヒラール hilaal と称している。次の「十一〜二十日」までの「中旬」は、月相が丸みを保っており、夜間の大部分を支配しているとしてカマル qamar と称している。「月」の総称を特化させた用い方である。そして月末に向かう「二十一〜三十日」までの「下旬」は、クマイル qumayr の用語を当てている。このクマイルはカマルの指小辞であるから「小さな月、小月」の意味である。カマルが小さくなり輝きを失うことを指小辞クマイルで意味を持たせたものであろう。ウマイヤ朝政治家で詩人でも名を成したウマル・イブン・ラビーアはクマイルと関連させて、二十五夜月のことを次のように叙している：

「クマイルね、二十五夜月が出たのだわ！」

月に向かって二人の娘立ち上がってそう囁いた

wa-qumayru badaa ibnu khamisi wa-"ishriini

la-hu qaalati l-fataayaanu qawmaa

(Mas. II 195他)

一か月に四分(rub")する時制は週(Usbuu")であるが、アラブには月相に基づいた時制もある。新月・上弦・満月・下弦を目安にした四分法であるが、これは同時に天体の月が一か月の周期を順次に各宿を回る「月の宿」二十八宿(manaajil)を七宿ずつ四分するもので、Qal (p.363)はこの時制法をスブウ・ダウル Sub" d-Dawr (円周=二十八宿の一回転、の1/4周期 七分)と呼んでいる。一〜七日月が第一スブウ、八日月〜十四日月までが第二スブウ、十五日月〜二十二日までが第三スブウ、二十三日〜三十日までが第四スブウということになる。スブウの複数はアスバーウ asbaa"

と言う。アラブでは「週」はウスブーウ *usbuu* の用語として親しまれているが、同じ「七」 *sab'ah* の派生形であり、相関していることは明白である。以降で例示する図表2～5は、一か月天球図をスブウごとに分割例示したものである。

一か月を十分する、即ち三夜ごとの時制はサラース (*thalaath*) と称される。この特筆すべき時制については次節2-1で述べる。毎夜ごとのことは概説として2-2で述べる。

2-1 サラース (三日・三夜ごと) の区切りについて

一か月の個々の日はそれぞれ数詞で表されるのが容易であり、便利であろう。数字で表さない場合、前項で述べた如くインド人やペルシャ人がそうであったが、個々の命名に頼らなければならないわけだが、神や天使の名称を用いての固有名であったならば、それ自体で三十ほども時系列で覚えられるのであろうか。アラブの砂漠の民の場合、月や星の天体の運行と関連付けているので、想起も容易に区別できるし、覚えやすさも親しさも増した形で日常生活の指針となっていたことであろう。毎日は主にそれぞれの月の形、月面の様子、月の出や入りの刻限、天空のどの位置にあるかなどから、月の何日目かが判断できる。月の何日目かの判断には二種の言い方が知られている。一つは一夜月、二夜月…と続く毎夜の言い回し、他はもう少し大まかに「三夜ごと」にまとめて言い表すサラースの言い回し。両者はアラブ文化を十分特色付ける文化項目である。夜の月、そして星々、星座、惑星、これらの毎夜の巡りはアラブの気候風土とも相まって、生活の領域まで活性化していた。従って「今日は何日？」と言う代わりに「今夜は何夜月？」と尋ねたり尋ねられたりするのがごく普通であった。本稿でもそうした古謡ないし童歌を採り上げて説明している。月の位相を観ればすぐに分かり、具体的な一か月の日にちが明示できる。しかし月が出ていなかったり、前日までの月の運行がはっきり把握していなかったりする答え方、それが確かでない場合、大体このくらいと「三日ごと」に日にちを表す言い方で答える。この独特な「三夜ごと」の用語はキスム・サラース *Qism al-Thalaath* と言い、「三夜分割」と訳せよう。普通はサラースで通してしまう。

一夜ごとの、また三日・「三夜ごと」サラース *Qism al-Thalaath* のアラブ遊牧民の命名法及び毎夜の古謡とも童歌とも称すべき言い回し、それらを採集した資料で手許にあるものとしては、*al-Tha'alaibii* の *Fiqh al-Lughah* p.353, *al-Mas'uudii* の *Muruuj al-Dhahab* の 第2巻 pp.193～195、*al-Qalqashandii* の *Subh al-A'shaa* 第2巻 pp.360～62、*al-Suyu'utii* の *al-Muzhir* 第2巻 pp.527～32、*Hammuur* の *Mawaasim al-Arab al-Kubraa* 第1巻 pp.499～511 などがあり、*Lisaan al-Arab* ほかにレクシコン類にも個々の用語として多々収集されている。

2-2 今夜は何夜月、日々の月概括

特筆すべきは今夜は何夜月、毎夜の言い回しが伝えられていることである。月齢に倣って日齢の言い回し「日齢謡」とも称しえよう。上の資料をもう少し詳しく述べると、マスウーディー *al-Mas'uudii* (956年没) 著『黄金の牧場』*Muruuj al-Dhahab* 第2巻 pp.193～195は陰暦月 (*Shuhuur qamariyyah*) の夜々の言い方として記されている。サアーリビー *al-Tha'aalibii* (1038年没) 著『言語の法則』*Fiqh al-Lughah* 353は語彙集の羅列である。十四～十五世紀エジプトのマムルーク朝の秘書官を務めたカルカシャンディー *al-Qalqashandii* (1418年没) は博物誌 (それは同時に書記や教養人のアダブ=素養書でもあったが) *Subh al-A'shaa* 『盲人の夜明け』の中で総括する体裁で、*Manaahij*

al-Fikr『思考の諸仕様の書』から第十一夜以降を引用して第2巻の359～363頁で記している。

十六世紀の博識家スューティー al-Suyuutii は著書 al-Muzhir『明証』の中で、「今夜は何夜月」に関して、それまで著作されて伝承されていたものを、集大成した形で紹介している。一つは第一夜から第十夜までを記している(同書 II I 527～28)。これは言語学者として著名な al-Farraa' (822年没) が著した「日々と夜々の書」Kitaab al-Ayyaam wa-l-Layaalii をまとめたものである。十一夜以降伝えられていない。恐らく接続後(十一は一と十)のような語形態となり、それに基づく修辭法を求められるので、長くもなり韻を踏みにくいために、覚えにくく民衆の記憶の伝承として、作詩するのがままならないことにも起因しよう。しかし別の学者が伝承を書き残しており、哲学・天文学者 al-Sijistaanii (985年頃没) の著した『夜と昼の書』 Kitaab al-Layl wal-Nahaar からの引用であり(同書 II 530～32)、こちらは言い回しを長くとり、al-Mas"uudii 同様「三十夜月」までを記している。サジュウ(押韻)が当てはまるように算段された「今夜は何夜月」の「日齡謡」である。「十一夜月」以降については、数詞自体が単独語でなくなり、連接語となる。そのため言い回し自体が長くなるため、文体が変わり、月に問う体裁となる。「～夜月に対してあなたは如何なの?」、月答えるに「～夜月は…」というふうである。ここでは「十一夜月」以降の俚謡照会において、その問いを省き、答のみを記す。サジュウの押韻と関与していないからである。本稿ではそれまでと同じ文体で通す工夫をした。また伝承者も異なり、シジスターニーはその著の中でアブー・ザイド以外の者の伝えるものとしている。これから述べる毎日の「今日は何夜月?」の方は、文脈が随分と異なろうが、わらべ歌的・俚謡的要素もあり、上述の資料に説明や解説があれば、もっと民族学的にも興味が惹かれるものと思われる。

ハンムール Hammuur は現代シリア(レバノン)の学者で、本書 Mawaasim は気象に関する考察を述べた二巻本であり、その天文と時制を述べた部分を参照とした。ここでは集大成したものと思われるスューティーのムズヒルを中心に述べてゆく。

サラース、即ち三夜ごとの分類で特徴的なのは、三夜ごとと十分割の時制用語の中で、月初め、満月および月末の日々には特別な呼ばれ方が多く存在することである。やはり一か月の中での主たる生活の節目が、そうした夜の天体の用語として民衆生活の中に滲みこんでいることが推察されよう。メインとなる以下の第3章では節を4節構成にして、サラース・三夜ごとの時制を先ず節全体として述べ、それから第1～3小節としてその一夜ごとについて記す配慮を行った。従って次の第3章は10節構成になる。日ごとの記述は各節の後半に3小節続く体裁で本稿を進めていく。一夜ごとの俚謡は、遊牧ベドウィンの基層世界から、アラブ全域に果てはスペイン・アンダルシアにまで行き着く。農事、商事、交易、祭事、地域ごとの歳時を付け加えながら、完全なる太陽暦として。季節とは合致しないイスラム暦とは別に。またユダヤ暦やキリスト教暦とも別に。

3 サラース(三夜ごと)、一夜ごとの具体相

3-1 「第一サラース」第一～三夜月

ヒラール Hilaal (三日月)、グラル Ghurar (微月)、ズフル Zuhr (華月)、

バラウ Baraa' (新生月)、アドファク Adfaq (曲月)、ハーキン Haaqin (臥月)

一か月のラジャル(白頭黒尻)前半月・白月はアラブの概念では五等分にして三夜ごとの日にちの指標としていた。その第一は新月から三日月までの「第一サラース(三夜月)」al-Thalaath al-



図表2 一か月天球図 第一スブウ（第一夜～第七夜とその宿）

図表2～5は全体図を四分したもので、全体図の方は拙稿「アラブ遊牧民のカレンダー、星の歳時記」図表3（35頁）に大きく載せてある。

原図はその当時のもので、春分点がずれているため、伝統的な牡羊座0度に戻してある。そして月のお宿もこの春分点から始まると設定。月の位相は外枠から二番目に分かり易く順に盈虚が描かれている。その内側が黄道十二宮図であって、太陽との「合」となる宮（burj）が一か月おきに変わり、また月の二十八宿はそれに準じて十三日ずつ移行する。また月の二十八宿は別の機能として一か月の中の二十八夜の日ごとの月のお宿（manzil）を提供している。本図はこの後者の方と示している。仮に三月の二十一日から始まるとする。その大外の図像が二十八宿の各宿の象徴図であり、その分析？は各夜毎の部分でしておいた。なお第十二宮図の内側は惑星の周期となっている。第一スブウには三ブルジュ（宮 牡羊座、牡牛座、双子座）セマンジル（最初の第一～第七宿）が描かれている。

Awwalである。月は太陽と同じ十二宮の中にあり（例を牡羊座から始まる基点として）、新月から次第にその宮（burj＝塔、砦）の東に移行する。「三日月」の三日月の頃には牡羊座の宮から東30度近くに移動してゆき、次の宮（例えば牡牛座）を「月の宿」とする。太陽が西に没して30度近くの東の夜空に在る月は明瞭にその姿が見える。

そして第一サラースである「一夜月～三夜月」に関しては用語が多くある。そしてそれらの語は、わが国でも「三日月」の呼称で一夜月～三夜月まで大まかに把握されているように、アラブ世界でもそうした概念把握もされており、そのサラース「三夜月」ごとの概念が一か月を通してなされているところに特色があろう。アラブ世界ではサラース「三夜月」が一か月を「十分割」用語として存在している。その特徴を今回取り上げるわけである。アラブでは月初めのサラース「一夜月～三夜月」であるだけに、いくつかの時制用語の存在がある。こうした朔の三夜月は六種の用語がある。ヒラール（Hilaal 初、始まり、三日月）、これは代表語になっている。より第一サラース「一夜月～三夜月」として意識されるのがグラル（Ghurur 白徴→馬の額の白徴→物・動きの始め→月の最初→徴月 awwal al-shahr）である。後述するようにグラルは語形態そのものが時制の用語の形なのであるから。他にズフル（Zuhr 華々しき→華月）、バラウ（Baraa' 新生月）、アドファク（Adfaq 曲月）、ハーキン（Haaqin 横臥月・臥月）である。これらの説明については、既に前稿「第4節 Hilaal（三日月）の表象」として拙稿「夜」そのアラブ的表象（後-2）」、『アッサラーム』第24号（1981年12月）で言及しているので、詳しくはそちらを参照して頂きたい。ズフルは第三サラース（七～九夜月）あるいは第四サラース（十～十二夜月）の名称とする説もあり、後者の方が意味的にもふさわしく思える。

本稿の「第一サラース」の記述においては、前稿では言及してはいなかった内容について、以下の3-1-2以降個々の「一夜月」、「二夜月」、「三夜月」など「日読み」と言うより「夜読み」指標、その他については言及して補っておく。「三日月」のことについては、前稿とのダブリがあるので、その部分は省く。「第二サラース(四～六夜月)」ヌファル(nufal)以降は整理しておいたので、それに続くものとして読み進めて頂きたい。

ここでは新月、月見について補っておこう。それにしても新月あるいは三日月はアラブの民俗概念として、多様な展開を見せている。前稿以降に新たに加わった新情報も多い。それらの中から、多少長くはなるがいくつかの資料と分析とを行って補っておく。

先ず月見の慣習についてである。アラブは「新月の観賞」ijtilaa' al-hilaal も行った。「新月の観賞」の風習、これに関しても前稿の第4節「Hilaal(三日月)の表象」として扱っている。「新月の観賞」とは、繰り返すことになるが、陰暦世界ならではの「月重視」の慣行の一つであろう。前の月が隠れて終わり、新たな月がいつ始まるかは、新月次第である。月末であるひと月の二十八日目から人々の関心は夜の月に向けられ、特に二十八、二十九日目の夜間の西空にはその関心が更に強まる。その日の西の宵闇に新月が見えたならば、その夜から新たな月の始まりと見なされ、前月はその時点までとされるわけである。特にラマダーン月の始めと終わりは絶食と絶飲とが係る重大関心事であることは今でも変わらない。こうした現実的要請に基づく場合だけでなく、新月の出現時には、付近の見晴らしの効く丘や広い野原や砂漠の中に出かけてゆき、行楽気分新月を観賞する慣行は太古の時代から近世の初めまでアラブ・イスラム世界の人々の楽しみの一つであった。新月を迎えるのは目出度きもの、喜ばしいものであった。

「新月見」の慣行を資料からあたってみよう：

事例1：

アッラーはムハンマドに限りない栄誉を与えられ、
彼の魂を平安の館(=天国)に導き給う。
彼の高貴なる家族と一家に慈悲垂れんことを、
蜃気楼が輝く限り、ダチョウが軽快に走る限り、
新月が到来する限り、「新月到来」の叫びが聞こえる限り！

(Har.『マカーマート』第29話 拙訳平凡社版Ⅱ340)

「新月到来」の原語はイフラール ihlaal。新月 hilaal から派生しており、「新月が昇る、顕われる」動詞 ahlala の動名詞形である。新月の月見台で目の良い者が発見して、それを法学者が視認して「新月」が知らされる。そして町では高台やモスクのミナレ等から太鼓や大声で告知される。近代になってから、高台で大砲が打たれた。まさにわが国の「半ドン」のドーンと言う様に。

事例2：

汝に好む者ありとせも	来る日も来る日も訪うなかれ
ひと月に一日がよからまし	それを越えては避けるべし！
新月の観賞に例とれば	そはひと月にひと日のみ
それを過ぎれば皆人の	観賞の目や向くことある

(Har. 第15話 拙訳平凡社版Ⅱ21～22)

アラブ世界では、「新月の観賞」とは「月一度」の慣行であった、と同時に「月一」の諸行動・

習慣でもあったことが分かって、「月に一度」の風習はそれぞれの文化領域にあり、アラブでは「月の名残り」"aqbah al-qamar"とも言っていた。「名残り」の原語 "aqbah" は「後に従う」ことで、「月の、月の一周期の後に従う、定期行に従う」ことである。上の引用句でも分かるように丁度「友との会合」も「去る者日々に疎かし」〈月に一度〉が長く付き合える理想の周期「月の名残り」であったのだ。言い回しに「彼はそのことを月に一度しか行わない」maa yaf "alu dhaalika illaa "aqbah al-qamar"がある。「月に一度の会合、例会を月に一度行うこと」を特にジダード jidaad（お互いに新たに作る、更新すること）とも言っている。

さて、次の事例は「新月」が「初物、目出度きもの、喜ばしいもの」として描かれている：

事例3：

汝が契りしこと結ばざるはなく、汝が（浅き）思慮の^な矯正さざるはなし
 汝が新月は輝きを増し、汝が仁慈ますます厚し
 安寧は汝を富ましめ、敵は汝を讃う
 汝が剣は（仇なす者を）^{ほろ}壊滅ぼし、汝が地位は^{かた}確固くなるべし
 汝が許を出入りする者実入り多く、汝を頌える者勝利者となるは必定
 汝が救いの手は広きに及び、汝が天空は慈雨をもたらす
 汝が（資力の）乳は満ちあふれ、（人の頼みを）汝が拒むは稀なり。

（Har. 第6話 拙訳平凡社版 I 206）

ここでは「新月」とは人徳や思い遣りの顕われを言っている。なお六行目「汝が天空は慈雨をもたらす」の「慈雨」とは「慈善」を意味しており、その原語ガイス ghayth が広範囲（10～20km 辺り）に渡って、大量に降り、生物を生長させるに足る「雨」のことを言っており、この原義から「雨によって生長した草」を、また「雨をもたらす雲」をも意味するようになった。さらに蜜蜂は「ガイスの蠅」dhudaab ghayth と呼ばれるが、これは蜂がガイス（降雨）の結果開花した花類の間を蠅のように飛び回ることによって由来している。また最終行「汝が（資力の）乳は満ちあふれ」とは、「乳」の原語がラクダの乳房に蓄えられる「大量の乳」の意味であって、人間の飲料に供せられるところから、転じて「財物」「資力」の意味に用いられる。我が国では考えられない牧民概念が発露されていよう。

しかし、新月は喜んで迎え入れられない場合もある。アラブの言い回しに：

事例4：

新月（ヒラール）歓迎されざるもの	al-hilaalu laa marhaban
負債を返済する人にとりては	bi-muhilli d-dayni
また満期の迫りし人にとりても	muqarribi l-ajli

（Lisaan XI 167）

この事例で分かることは、一か月の貸し借りの決算や勘定は月が改まる頃までには行わなければならない習慣がアラブにも存在したことである。この意味では新月、即ち月初めは、わが国の月末観と同様であって面白い対照となろう。年末・歳末の風景が比定されて思い浮かぶ。

また新月の細さ、湾曲の様は以下のように謳われる：

事例5：

おお旅にある ^{なかま} 同朋よ	我が長旅の何時果つるも知らず
---------------------------	----------------

身体既に痩せて曲がり
 あたかも新月が地平線上に
 厚かましくも汝が庭園を

顔色蒼白くして優れず。
 その朧な姿見せる如くに
 目指し来たりしぞ我なる。

(Har. 第5話 平凡社版 I 171-72)

新月がここでは人間の痩せて曲がる身体縁語として用いられている。上のサラスでの用語 Adfaq (腰曲がり月→曲月) や Haaqin (横臥月→臥月) と通ずるものである。前行での長旅に疲れ果てた旅人の形容を受けて、新月を「身体の痩せたもの、曲ったもの、」と掛け合わせている。

最後の事例6はわが国の「弓張り月」に相当する「新月」観である。これも先の稿で述べたことであるが、新月=三日月となり我が国同様、それは「弓張り」のイメージである。弓張り月について、三日月(=弓張り)から放たれる矢を叙した印象的な断章があるので、長めの引用になるが、ここで紹介しておきたい。十二世紀アンダルシア・アラブの文人サラクスティー al-Saraqusuti (1143年没)は、東方のアラブのマカーマ文学の興隆に刺激され、自身『al-Maqāmāt al-Luzūmīyat』の作品を残している。その第31話「星のマカーマ」では盛り上がりを見せ場で、主人公が夜空に展開する星座群を見事に描いて謳っている。そこでは新月ヒラルを弓の射手と見立てて、その弓張りの矢の矛先を勇者と見做される星々に向ける。恐らく矢は流星となって放たれるのであろう。矢の向けられた星々、巨星や星座たちはすべて擬人化されて叙される。

事例6:

- 1 思い当たるは三日月ぞ 腕輪の如丸く 足輪の如湾曲りおり
- 2 その出現 星たちはただただ驚愕ろき 這う這うの体で逃げ失せる
 そのさま 暁の到来に驚愕ろかされしオリックスの群れに似て
- 3 あれらの星たちを非難ずるなかれ 弓(三日月)は矢放つものなれば
 当たれば破滅と滅亡とを運命とする鏃持つ切っ先鋭き矢をば
- 4 いかな星なれども例え絶頂期の勇星といえども萎え凋むこと必定
 放たれる矢当たりはせぬかと戦々恐々の態故に
- 5 三日月の出現はあのガフル星(乙女座の裾の三つ星)すら懼れ戦く
 両シマーク(スピカとアルクトゥルス)の稀星にしても然り
 然しものサウル(牡牛座)は恐れ入って、ただうめき声上げるのみ
- 6 月の正鵠を射た矢はバフラーム(火星)を貫き通したり
 去れば後者は己の暗く流れ出づる血で血達磨にぞなりぬ
- 7 月はまたムムスク・イナーン(馭者座 カペラ)に向け放ちたり
 全開の花の如き輝く流星からなる矢をつがえて
- 8 スラッヤー(スバル)はどうかと見ればただ恐縮するのみ
 近接した位置に偶に座したが故に睨みきかされるのではと

al-Saraqusuti 著『al-Maqamat al-Luzumiyat』

(Eng.tr.by Monrou 第31話「星のマカーマ」より拙訳)

3-1-1 「一夜月」 hilaal, ibn laylah

新月や朔月としても知られる「一夜月」。その夜の「月の宿 (manzil)」は何処か。月はこの夜、

太陽の宮 (burj) である黄道十二宮の一つ (例えば第一宮牡羊座 以下伝統観に沿って春分点から始まると設定) に同じく宿る。十二宮を分割した月の宿二十八宿の一つ (牡羊座ならば第一宿アル・シャラターン al-Sharaṭān 「牡羊の二つ印」) がその「月の宿」(manzil) である。太陽に近いと、それが西没してもその黄昏時に西空に僅かに細い月面を見せるだけである。アラブの俗信では、太陽と月はお互い嫉妬し合っており、月が太陽に近づくとヴェールで顔を覆うとされ、「一夜月」は太陽から東の黄昏空に10度前後離れるため、わずかにそのヴェールから顔を覗かせる、と看立てている。

図表2の第一スブウの1/4天球図では第一〜七宿のうち、第一宿として真上に描かれている。第一宿は月の丸顔の輪郭に黒いヴェールで覆っており、向って左がわずかに明るい月光、新月としての顔を見せている。その下の牡羊座の宮全体1/4の中に在って、その宮の1/4から3/4を占める。第一宿は「羊の二つ印=二本角」が月のお宿となる。本来の星座図では羊が後ろ向きに横たわるその頭部から上半身に伸びるβγの二つ星またはα星を加えた三つ星が目印の星取りになる。本図ではそれとは異なり前方を向いた立ち姿となっている。図の円の外が各宿の象徴図である。羊の角に見立てられる王冠をかぶり風格がある人物が端坐している様子である。いかにも起点となる主要性・重要性を示している。

アラブ世界では、al-Sijistaanii (以下 Sij と略す) の著した『夜と昼の書』の歳時記によれば、「一夜月」はヒラールとされている。ヒラールは「三日月」で知られるように、普通には前節で述べた如く「一夜月〜三夜月」のことを指すが、以下ではより限定された「一夜月」とされて以下のような俚謡を記している：

- | | |
|----------------------|-------------------------------|
| ① ヒラール それは月初めの一夜の月 | al-hilaalu li-awwali laylah |
| ② 子羊たちに乳を吸わせて | riḍaa" u sukhaylah |
| ③ 砂丘に出てみんなで手足を伸ばしましょ | yahullu ahulu-haa bi-rumaylah |

(文末脚韻のサジュウ語は -laa で統一された押韻)

夕方になって女・子供の仕事、乳搾りと仔らへの授乳。それらを済ましたら、西の空が一望できる砂丘に行って、座ったり、寝転ぶ。新月の宵の楽しみは、何といっても新月鑑賞。そして太陽が没した方向に目が注がれる。一番星、二番星が見えるころになると、急に闇夜が増す。空を見上げる者は今か今かと待ちわびている。やがて西の空に低く、糸を引いたようなわが国でいう「纖月」が見えて来る。イフラール Ihlaal 「新月出現」！とお互いに叫び合って喜ぶ。その歓喜と賑わいは子供たちには一入^{ひとしお}である。親が新月を確認しあっている間に。砂原や砂丘で賑やかにはしゃぎまわれるのだ。

①「ヒラール それは月初めの一夜の月」については、さまざまに地域差や時代差が反映されている。Al-Qalqashandii (以下 Qal と略す) ではヒラールの代わりに月の代表語カマルを当て、al-Qamaru ibn laylah として序数を入れずに基数で記している。また「一夜月」の原語 ibn laylah は「一夜の息子」が直義で、月は男性形であるから、ibn (息子) となる。(感覚的には〈女性〉とされる方が多い)「二夜月」以降も数詞の前に ibn (息子) を付して「月」を具象させている。Sij の方でも「二夜月」以降は同じ ibn を用いて「息子」を「月」の代名詞としている。al-Mas"uudii (以下 Mas と略す) の方では ibn を用いずに、直接数字に呼びかける体裁をとっている。

②「子羊たちに乳を吸わせて」の原語は Mas、al-Farraa' (以下 Far と略す) および Qal の方では、

radāa" u としているので、「子羊たちが乳を吸い」となる。「子羊たち」の原語 *sukhaylah* は羊の年齢別呼称の中、生まれたての、授乳期にある「アカンボ子羊」*sakhlah* の指小辞である。アラブの牧民観を映し出しているこの *sakhlah* および羊の年齢別呼称に関しては、拙稿「星と動物 獣帯(黄道十二宮)の牡羊・牡牛・双子」の第1章「羊と星について」第2節「地界の羊」の2「アカンボ期からコドモ期羊」、『アリーナ』第10号(2010年12月) pp.307~314を参照。

③「砂丘に出てみんなで手足を伸ばしましょ」の動詞を未完了 *yahullu* とせず、完了形の *halla* としている説もある。また「砂丘」の原語 *rumaylah* は *rumlah* の指小辞であって「小砂丘、小高い砂丘」の意味合いである。砂漠および砂丘の呼称も様々あり、砂漠の民アラブの概念を浮き出させている。なおマトウラウ(初句)で *laylaa* とせず、*laylah* とした言い回しの方は、以下の行では *-lah* で統一された押韻(*sukhaylah, rumaylah*)を通してしている。

3-1-2 「二夜月」 *ibn laylatayn*

第一サラス「一夜月~三夜月」の二夜目は「二夜月」。その夜の「月の宿(*manzil*)」は何処か。月はこの夜、太陽の宮(*burj*)である黄道十二宮の一つ(例えば牡羊座を基点とする)の中、その始点から20度前後の位置にある。月の宿は同じ宮には必ずしも止まらず次の宮に跨る場合もある。十二宮を分割した月の宿二十八宿の、一夜目の次に続く(牡羊座ならば第二宿アル・ブタイン「羊の小腹」*al-Buṭayn*)がその「月の宿」(*manzil*)である。太陽にまだまだ近くにいるが、その西没に伴って黄昏時に西空にある程度距離を置いて細めの月面を見せる。「二夜月」は太陽から東に大分離れるため、月はそのヴェールをもう少し外して白い顔を覗かせる。

図表2の第一スプウの¼天球図では第七宿のうち、上から二番目に描かれている。第二宿は黒いヴェールに被われた月の丸顔の中に向って左の明るい月光が二日月顔を見せている。休むマンジル(宿)は「羊の小腹」であり、羊の腹部にある三つ星である。下の牡羊座全体¾の中に在って、その宮の¾から¾と真中を占める。外枠の象徴的人物像は幼児らしき子どもが片膝立てて右手を前方上に差し出し、何かを乞うか祈る姿で描かれている。以下の「二夜月」の俚謡での乳母へのおねだりであろうか。

Sijの著した『夜と昼の書』の歳時記によれば、二夜月は以下のように言われている：

- | | |
|---------------------------------|---------------------------|
| ① (二夜月) それは二夜目の月 | <i>ibn laylatayn</i> |
| ② 乳母 ^{ばあや} 二人にお話しさせましょ | <i>ḥadiithu amatayn</i> |
| ③ 作り話でもお伽噺でもね | <i>bi-kidhbin wa-mayn</i> |

(文末の語は *-ayn* で統一された押韻)

新月が確実になった二日目、その月は西にあつて出現と入りは長くても三時間ほどの僅かなあいだ。何をして楽しみましょう？まだ月光も明るくなく心許ないわ、すぐ沈んで真つ暗になってしまいうし、誰か頼りにならないかしら。そう、話の上手なあお乳母が良いわ。さあ乳母に来てもらって今宵を楽しみましょうよ。あお乳母の二人は本当の話も作り話も語り上手で、思わず耳を傾けさせられるわ。

Masでは③は *dhawaatay ifki wa-mayn*、即ち「作り話とお伽話の女所有者二人(=が入ったもの)でも」となる。*ifk* は *kidhb* と同義の「嘘=作り話」。Qalでは「作り話でも本当の話でも」と主格にして *kadhibun wa-mayn* と読ませている。一方 Farの方では、③が *bi-kidhbi dumayn* となっている。

dumayn とは damn (糞、肥料) の指少辞である。「糞だらけの嘘」ということになり、意味が通らない。ここでは bi-kidhbin と読ませて、後接語は非限定形容詞を持ってこななければならない Sij の方が良いでしょう。それにしても何故後世の引用者 al-Suyūṭī (以下 Suy と略す) は何の注もしないのであるのか。誤植としておくべきか。bi-kidhbi dumayn の du の箇所は wa- とすれば、Sij のと同一となり問題ない。いずれも「二夜月」を枕としてできており、押韻を語自体の形態に応じた (ibn) laylatayn の /-ayn/ に合わせている。

3-1-3 「三夜月」 ibn thalaath

「三夜月」、より親しくは、わが国の「三日月」。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮 (burj) である黄道十二宮の一つ (例えば牡羊座) に同じく宿るが、僅か $\frac{1}{4}$ の期間である。「月の宿」は太陽の十二宮を分割した二十八宿の一つであるから、一宮は $2\frac{1}{3}$ 宿の割合になり、第三宿目は宮を跨ることになる。牡羊座の $\frac{7}{8}$ から牡牛座の $\frac{2}{8}$ に跨る $\frac{3}{8}$ が第三宿スラッヤー「牡牛座の背中・昴 (スバル)」al-Thurayyaa) であり、その「月の宿」(manzil) である。太陽からは30度以上離れるため、その黄昏時から夜間になっても西空に見事な月面を見せる。ヴェールから顔を大分見せて下界を見下ろす。

三日月の形はきれいな湾曲した形。イスラム教のシンボルともなっており、モスクのドームの上のヒラルは荘厳と威厳を誘うものとなっている。月信仰のあるアラブでは三日月には呪力があり、その三日月形は邪視や悪例を切り返す護符とも武器の弓矢や刀ともなっており、まさに「破邪の剣」であり、それも兼ねて首飾りや装飾に多用されている。その一例を資料から示そう：

事例：

私はクーファの地でサマル (夜の閑談) にふけたことがあった。その夜は (明暗の) 「二つの色」を表情に持つ (即ち、月が出ている時は明るく、月が没した後は暗い) 夜であって、その月の方はしろがね製の護符のよう (な三日月形) であった。(このサマルに集まった) 仲間達もまた、「雄弁 (バーン)」の「乳 (ルバーン)」を滋養としてきた人達であったし、(雄弁家として有名な) あのサフバーンすらも「忘却 (ニスヤーン)」の淵に引き摺り込む程 (に言葉巧み) であった。一座の者で誰一人として見知らぬ者はなく、用心をかくべつせねばならない人もいるわけではなかった。その誰もがうさんくさがられることもなく、頼み頼まれる仲間内であった。

(Har. 第5話 平凡社版 I 170)

引用中の「しろがね製の護符」は幼児用護符の一種で (同書第2話訳注1を参照)、三日月形をしたもの。月の色が銀色と考えられているので金よりも実物に似せた銀の方が一層威力を増すとされた。この護符は女性や子供が、邪悪なジンや邪視の持主およびあらゆる危害から守られるよう、その首にかけられる。更に一層その効力を増したい場合には、その三日月形を囲む中に掌 (ファァーティマの手) を造形したり、また三日月形本体の中に『コーラン』の聖句を書き込むとさらに良いとされている。

図表2の第一スプウの $\frac{1}{4}$ 天球図では上から第三番目、牡羊座と牡牛座に跨って描かれている。第三宿は「スラッヤー・富裕者」即ちスバルである。六つ星か七つ星で斗と柄のように星取られる。黒いヴェールで被れた月の丸顔の中に向かって左側、既に三日月の明るい月光を見せている。その月が休む宿、第三宿は図を觀れば分かる如く、牡羊座 ($\frac{7}{8}$) から牡牛座 ($\frac{2}{8}$) にかけての $\frac{3}{8}$ を占める。

普通の星座図では雄牛の巨大な上半身像でその背中ないし尻の部分であるが、本図では牡牛全体が描かれているため、頭部がその位置になっている。図の円の大外の第三宿の象徴図では、王冠をかぶり双頭の人物の上半身であり、両手にはサソリをぶら下げている。恐らく180度の真反対にあるラキーブ(見守り星、対星)であるサソリを注意深く見守っている様子を表していよう。

完全な「三日月」の夜。月は、その形も光度も整ってきて、テントの外や砂丘に、娘たちだけで出て行っても心配はいらない。月と星たちを見上げながら、誰言うともなく話が始まる。出任せのまま話が進行する。すると他の娘がちょっかいを入れ尾ひれ端ひれを付けて、話の展開があらぬ方に向かってしまう。筋を戻したり、付加したりして、たわいない果て無し話が続く。それでも夜空の下、こうした娘たちのサマル(夜の閑談)が、テント前の大人たちの焚き火を囲んでのサマルの話題とは異なった子供たちの語りの座の風習を伝えている。

「三夜月」に関して、以下のような俚謡が伝わっている：

- | | |
|--------------------|----------------------------|
| ① (三日夜 それは) 三夜月の息子 | ibn thalaath |
| ② (月の出の) 躊躇うこと少なく | qaliilu l-labaath |
| ③ 娘たちのたわいない話 | hadiithu fatayaat |
| ④ 筋をまじめに考えた訳でもなく | ghayru jiddi mu' talafaat |
| ⑤ あらゆる由無し話を集めたりして | yajtami" uuna min shattaat |
| ⑥ 根拠ある話の何と少なきこと | qaliilu th-thabaat |

Qal では①、②のみで、押韻も -aath で合致させている。他は①から③以降に飛び、文末の語は -aat で統一された押韻を構成している。Sij も、Far の方も全く同一の記述であって、以下の③、④まで。Mas の方では、三行目から異なり、三行目は上記の四行目に当たり次の行に続いている。②と⑥とは伝承異文によるもので、どちらかであろう。

十二宮の各々の宮(burj)にも、また二十八宿の各々の宿(manzil)にも、東のインド、中国圏の宿曜道と同様に、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものが存在する。決して科学的なものではなく、夢判断や占い同様多様な俗信が習合されたものである。多説ある中で、その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮)を7/4とすると、その細分であるマンジル(宿)は3/4を分け合い、両者の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的な、あるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っていよう。この種の領域には付きものであるが…。家畜のこと、奴隷に関するもの、狩猟のこと、捕虜になった場合のことなど、時代状況や他の文化圏との関心事にも相違する特徴が観察出来よう。

月が第一星座牡羊座・白羊宮のブルジュ(塔)に在る間、即ち第一マンジル(宿)、第二マンジルすべてと、第三マンジルの3/4に宿る間の指針・吉凶・運勢は：

- 新調着おろすに良し
- 流血事、狩猟、遊興、戦争には良し
- 結婚、薬利用は慎むべし
- 軍関係者と席を共にして歓喜の盃を飲むが良い

月が第一マンジル(宿)にある時の運勢は：家畜やペットを買い入れるに良い。旅行、特に海旅

に良い。器具や武器の製作に良い。植樹に好適。散髪・爪切りに良い。新調衣を下ろすに良い。婚約には不向きである。契約や協約を結ぶのも良くない。奴隷を買うにも不向きで、このマンジルの間に購入した奴隷は性質が悪く、従順で無く、逃亡の恐れもある。捕虜にされた場合は牢獄は堅固であって非道い状態のものとなろう。(日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観は秋分から始まるので、第十六番目宿「婁」宿に当たる。以下図表1を参照。「平穏な吉日とされる」その婁宿の独自の運勢判断と比較してみても面白かろう。大きな日捲り^{ひめく}などには、日々の宿曜道の運勢も書き込まれている)

月が第二マンジル(宿)にある時の運勢は：この第二マンジルはあまり縁起の良いものではない。結婚は慎むべし。奴隷の購入は捕虜も含めて遠慮すべし。船舶の購入も避けるべし。捕虜となった場合は第一宿と同様となる。(東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では第十七番目の「胃」宿に当たり、運勢判断も別にある)

月が第三マンジル(宿)にある時の運勢は：家畜購入もまた狩猟用動物(チーター、サルキー犬、大鷹や隼など)の購入にも良い。遊興やスポーツ、格闘技また戦争もこの時が好機。慈善や喜捨が勧められる。結婚や契約事には不向き。植樹や播種は避けるべし。新調衣を下ろすのも良くない。船旅も恐怖と危険がつきまとうことになる。もし捕虜になったら、過酷となりその状態が長引くことになる。(東アジア文化圏の二十八宿観では第十八番目の宿「昂」宿に当たり、運勢判断も別に説かれる)

3-2 「第二サラーズ」第四～六夜月

ヌファル Nufal (余月)、サマル Samar (閑談月)、
カマル Qamar (月)、シュフブ Shuhb (銀月)

一か月のラジャル(前半月・白月)はサラーズに五等分されて、日にちの指標とされていた。その第二サラーズの「三夜間」は新月から数えて「四～六夜月」。月の宿は十二宮の中を動き(例えば牡羊座を基点とするならば)、その宮(burj 塔)の、東の次の宮に移行してゆく。即ち太陽の位置から四日月以降の位相は、第一サラーズの東にさらに移動しており、太陽からは東に大よそ60度近くまでの後位置にある宮(burj)と宿(manzil)とを「月の宿」とする。夜空となる以前にも明らかな月面を夕方、西の天空に覗かせている。

第二サラーズ「四～六日月」の三夜間の用語、これがヌファル(Nufal)またはサマル(Samar)である。上弦の月へと向かう四～六日月。五日月を中心とするその前後の三夜月のことをヌファル(Nufal)と言っている。この語も複数を表示する語で単数はヌフラ(nufrah)と言う。ヌフラとは「余分、残余」の意味であるが、ヒラール「三日月」の強烈なイメージがあって、それがそのまま引きずられ・引き継がれて、余韻として残ることから、このような名称になったのであろう。前日の三日月が西に没した翌晩の今夜はその残存さらに宜しく、また一層大きくなって膨らんでゆく、これが〈余る〉と捕らえられるヌフラ(余月)であろう。他の説はヌフラ nufrah の語根√n/f/l 自体が「襲撃」とか「戦闘」とかを基本概念としており、nufrah は「戦利品」とか「誓い」というのがその義である、とする。恐らく一か月の間でもヌフラの時期が、戦さや襲撃の時期に選ばれたことと関連があるろうかと推察できる。ヌフラの月は日没の頃には既に西に傾いているが、明瞭に大地に明らかな光を投げ掛ける。我が国では「傾月」とか、香の名前で名高い「斜月」とか言われているが、そう呼

ばれる異称もこの頃の月を指して言っている。和名の後者は月の西の山の端に近づくほのかな情景が香りのイメージとして適用されたものであろう。「斜月」とか「傾月」とかの表意からも推察できるように、ヌファラの月は「二更」の頃、即ち夜空が美しく観察できるようになる時期に没してしまうために、月と向かい合ったり、月を鑑賞しようとする人間の感じとしては「没するのが想像以上に早い」と思われている。そのため「傾いて」おり、「斜」になっていると意識されるわけである。アラブには「ヌファルの時期の月よりも早い」という諺があり、予期に反して早く動いたり、働いたり、また推移して(消えて)しまうものの喩えに口をつく言葉となっている「早々立ち退き月」「^{いさはや}諫早の月」といったところか。この言い回しはアル・ハリーリー作のアラブ説語集『マカーマート』の中の第38話の中にも出てくる。

また一説にはヌファルではなく、第二子音がヌクタ(子音点)をもう一つ付した文字 q (qaaf) であり、アラビア文字ではよくある一文字違いの類語であるとする説である。即ち文字 f (ファー) に、子音点(ヌクタ)をもう一つ付加したものである。紛らわしいが、ヌカル(Nuqal)との用語であり、それが「四〜六夜月」を意味するわけである。ヌカルと上述したヌファルとは一文字違いで語形態は同一の言葉である。ヌカルはヌクラ(nuqlah)の複数であり、矢張りその前後を含めての三日間を含めた概念である。こちらの語根は、「移す」、「運ぶ」が原義であるから時間や自然現象の推移を表示しているから、より実感が込められての用語と言えよう。何故ならばヌカル(推移・移行)自体、その三日間は、黄道二十八宿の四〜六宿に当たり、「月がお渡り」となる黄道十二宮の一宮(牡牛座)から一宮(双子座)への「推行・移行」の具体相を示しており、しかも一宮の平均した運行日時は「二日と八時間」とされており、大よそながら月の「三日月の夜々」を一単位とする概念とも合致していることになる。眠りに就く前、誰でも顔を上げていやが上にもその推移が目立つ頃合いの月なのであるから。なおヌカルに関しては第六サラーズの名称ともされる説がある(3-6を参照)。

Mas の方では四〜六日月のことをサマル Samar と言う、とある。サマルは「夜の閑談」として知られているアラブの風習の用語である。この語には〈時刻〉を表示する意味合いを持たない。宵から夜間にかけてテントの前やヴェランダで繰り広げられるサマル。恐らく四〜六日月のころは月が没するのは深夜には及ばない。それ故サマル「夜の閑談」の最も適した時間帯であることからの流用となったものと思われる。

また Qal では「月」の総称であるカマル qamar を当てている。カマルは時制用語としては「中旬」が最も知られているが、さらにこの語を「四〜六日月」に当てている。狭義の用語としての扱いであろう(II 360)、しかし後で述べる「十二〜十五夜」としての呼称ともされており、月の総称としての兼ね合いから、こちらの方が妥当であろう。Qal はまた別説としてシュフブ Shuhb (銀月)ともしている。この語は「灰色」shahab から派生しており、「光沢ある灰色」であって、この満ちてゆく銀月の勢いが灰色の輝かしさと表わされるのであろう。

3-2-1 「四夜月」 ibn arba"

「四夜月」ibn arba"、その夜の「月の宿」は何処か。月は太陽から40度以上東の空に離れて宿をとる。この夜、初夜から四番目の二十八宿の一つ(基点の牡羊座からならば第四宿アル・ダバラーン al-Dabaraan「牡牛座・昴の後追い」)がその「月の宿」(manzil)となる。三日月の細い月面は膨

らみを見せ、のぞき見からさらに美しい頬を見せ始める。

図表2の第一スブウの $\frac{1}{4}$ 天球図では上から四番目に描かれている。第四夜月の宿は「(スバルの)後追う者」であり、牡牛座の中心に在ってその $\frac{3}{4}$ から $\frac{9}{10}$ にかけての $\frac{3}{4}$ を占める。本来の星座図では雄牛の頭部を構成している α 星と伸びる二本角の五つ星か六つ星に星取られる。しかし本図では牛が全体像で描かれているため胴体部の位置付けとなっている。月相では黒いヴェールを覆う月の丸顔の中に向かって左側に明るい顔の輝きを見せている。その月が休む宿、図の円の大外の第四宿の象徴図では、猿か人か、尾を持ち上に上げているので、獣身であろう、人面獣身のキメラで描かれる。この第四宿辺りからキメラが多く描かれ、この謎は未だ説かれていないようである。

四夜月は以下のような俚謡が伝わっている：

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| ① 四夜目の月 それは | ibn arba" |
| ② 子ラクダ授乳の宵の頃 | "atamatu ruba" |
| ③ 繋いでおく要も面倒見も要らず | ghayru hablii wa-laa marda" |
| ④ 腹空かす者も無く面倒見の要もなし | laa jaa`i"un wa-laa murda" |
| ⑤ 羊たち自由に草をはむ | ghanamatun ruta" |

(文末の語は -a" で統一された押韻)

①の枕の arba" が導韻の役をして後続に繋げている。Sij では③まで、Far の方では③が異なり、④として続けて記した。従って全体では「面倒見の要もなし」が重なる体裁になっている。また Mas の方も③は同様であり、さらに続けており、それを⑤として続けた。Qal では①、②、④の構成で、②では両語の間に ummi を加えて「子ラクダ母から授乳の宵の頃」としている。

四夜月の頃は、月が出ている限りが少しは明かりともなって夜間放牧もされていたことが窺われる。月が出ると、全くの暗闇ではなく明るさも頼りにできるので、夜間放牧のみでなく、夜間活動も少しはできるようになる。なので、必然的に放牧からの帰りもついつい遅くなる。月の出ない晩や新月の頃とは異なり、少し活動が夜間にずれ込む。夕暮れにキャンプ地に戻ってきても、家畜の乳児だとて、すぐに母乳にありつけるわけではない。母ラクダは水飼いが先ずなされて、次に人間用に搾乳がなされる。その後に子ラクダへの授乳となる。家畜の仔たちの授乳とて、順番があるのは例外ではない。上述の俚謡に描かれる「仔ラクダ」はルバウ ruba" と言っている。乳児ラクダでも出産期の期間に生まれた「春仔」とそれを外れて遅く生まれた「遅仔」とがおり、その「春仔」のほうである。孕みラクダの殆どが産み終え、こうした「春仔」の出産終了期後、あるいはその時期が終わる頃、漸く出産にこぎつける晩生もある。こうした遅生まれの仔ラクダのことをフジャウ(遅仔 huja") と言っている。フジャウの原義は「うっかり者、怠慢者」であって、親も子も出産すべき時期にその自覚無く「うっかり微睡んでいたりして精を出さなかった者」の意味で、人にも例えられる。「遅生まれの仔」フジャウは成長もその分遅く、手間がかけられることになる。授乳においても優先される。こうしたことから「授乳」において春の早い時期に生まれて成長が早いラクダの春仔ルバウは、後回しにされて授乳にこぎ着けるのはさらに遅くなる。アタマ(宵)の頃、四夜月の傾く月光の下、その明かりが照らしてくれている間に、と言うわけである。

「宵」を昔はアタマ "atamah と言ったが、現在ではイシャー "ishaa" と呼ばれるのが普通である。往時は結構アタマの方が「宵」の意味で用いられていた。というのも「夜の礼拝」の用語もサラート・イシャーウ salaat "ishaa" が現在では一般であるが、古くはサラート・アタマ salaat "atamah の

方が用いられていたからである。「宵」を意味する語 'ishaa' および "atamah 他については前稿「夜の分割概念」を参照。

3-2-2 「五夜月」 ibn khams

「五夜月」 ibn khams、その夜の「月の宿」は何か。月は太陽から60度以上東の空に離れて宿をとる。この夜、「一夜月」から五番目の黄道二十八宿の一つ(牡羊座からならば第五宿アル・ハクア al-Haq'ah 「牡牛座・オリオン座 馬の白徴」)がその「月の宿」(manzil)となる。三日月の頃細かった月面は太くなった五日月として明るい月光を見せている。

図表2の第一スブウ¼天球図では上から第五番目に描かれている。第五宿は本来の星座図では「馬の白徴」で、牡牛の角の先端とオリオンの頭部とを結ぶ三つ星に星取られる。天球図では黒いヴェールに隠れた丸顔の中に左側に膨らみを見せ、のぞき見からさらに美しい頬を見せ始める。その月が休む宿は宮の変り目であり、第五宿は牡牛座(¾)から双子座(¾)にかけての¾を占める。図の円の大外の第五宿の象徴図では、山羊頭人身のキメラが座って右手を上げ左手を腰にしているさま。恐らく天空の反対にあるラキーブ(守護星、対星)である山羊(座)が気遣っている様子を表していよう。

「五夜月」については、Sij および Far の歳時的言い回しの俚謡によれば、以下のように記されている：

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| ① 「五夜月」、それは五日目 | ibn khams |
| ② だべりながら仲良くしましょ | hadiithun wa-uns |
| ③ お腹膨らんだ孕みラクダの宵 | "ishaa'u khalifaatin qu"s |
- (文末の語は -s で統一された押韻)

Shi および Mas には②のみで③は欠如。③の方は Far 及び Qal の資料に記載されている。Taaj al-"Aruus などにもこちらが採用されている。

五日月ともなれば、暮れてから夜間(ishaa')になって大分経っても程よい時間帯まで明るくなった月光を投げかけてくれる。「五夜月」は大地を照らして、集まった娘たちの表情までも読み取れるほどだ。「五夜月」が昇っている間は、お話をして寛ぎましょう。ゆっくりとした寛げるサマル(夜の閑談)は、言いたい放題を主張しまくるのではなく、相手の意見や話にも耳を傾ける時間の余裕も生まれる。お互いの親しさを増してくれる。

「四夜月」よりはさらに月の照らす時間も光度も上がったので、たとえルバウ(春仔)の授乳に時間がかかろうが、その後はハリファ(khalifah 孕みラクダ pl.khalifaat)の具合、お腹の膨らみなど吟味が出来る。それほど五夜月は遅くまで面倒見をさせてくれる。お腹の膨らみ状態、これをアクアス aq'as と言う。雌ならばカスアーウ qas'aa'、そしてその複数形はクウス qu"s といって、五夜月の余裕あればなすべき仕事となっていることが分かる。人間の場合、「お腹の膨れた妊婦」のことはファズラーウ fazraa' とかジャンアーウ jan'aa' とか言っている。カスアーウ(腹の膨らんだ孕みラクダ)の妊娠状態、腹の膨らみはいつも通りかしら。どの部分がどのように張っていたり、膨らんでいたたりすれば正常なのかしら。あたしのとこの雌ラクダね、わき腹のここがこんな風になっているのよ、異常かしら」などと話題を向けたりする。孕みラクダは最も注意深く日ごとに見守られることが子供の話題にまで上る文化層が読み取れる。さらには「月のもの」として妊娠ラクダ

に特徴的なことがおきることをいったものか。一般には腹の膨れたことによるハリファ（孕みラクダ）の身体は、お腹の張り（qa" as）に引っ張られる結果、頭と首、即ち前半身が後ろに引っ張られてお腹が膨れるほど仰け反る様になることが知られる。

さてこの第五宿をもって第二宮を去ることになる。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ（宮）とその細分であるマンジル（宿）の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っていよう。この種のものには付き物である。

月は五夜月で牡牛座を去る。十二宮の第二星座牡牛座・金牛宮のブルジュ（塔） $\frac{7}{8}$ に在る間、即ち第三マンジル宿の $\frac{7}{8}$ と続く第四マンジルすべてである $\frac{3}{4}$ 、それに第五マンジルの $\frac{7}{8}$ に宿る間の指針・吉凶・運勢は：

交友関係はうまくゆく
女性・結婚相手探しに良し
契約、約束を結ぶに良し
結婚式に日柄良し
客を呼んで持て成すことを進める

月が第三マンジル(宿)に在るときはすでに3-1-3の最後に述べてある。次に第四マンジル(宿)にある時の運勢は：新築に良し、堅固で立派なものとなろう。掘削や掘割に良し。召使いや奴隷購入に良し、忠実で正直者となろう。家畜を仕入れるも良し。王や領主など支配者と良好な関係を結ぶに良し、権力と栄誉を受けることになろう。婚約には悪い、その相手は他の男を好きになるであろうから。契約や協約を結ぶのは悪い、特に自分より強大な相手に対しては。船旅も悪い、大波に巻き込まれることになろう。捕虜となった場合、長引くことになる。但し賢く立ち回れば、善意で解放されるであろう。（日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏では宿曜道二十八宿は秋分から始まるため、その第十九番目「畢」に当たり、運勢もまた別の解釈がなされている）

月が第五マンジル（宿）にある時の運勢は：奴隷を購入するのに良い、善良で忠実なものとなるであろう。建築に良し。海旅に好適。全身浴、洗髪、爪切りに良し。交友関係、契約には向かない。捕虜になった場合は長引くことになろう。しかしうまく立ち回れば、脱出できるであろう。（宮と宿との運勢が矛盾の多い相である。また東アジア文化圏では第二十番目の「觜」に当たり、大悪日に当たっている）

3-2-3「六夜月」 ibn sitt

「六夜月」 ibn sitt、その夜の「月の宿」は何処か。月は太陽から70度前後東の空に離れて、闇を領することになる。この夜、初夜から六番目の二十八宿の一つ（牡羊座からならば）第六宿アル・ハンア「双子座・ラクダの烙印」 al-Han"ah) がその「月の宿」(manzil) となる。六夜月の月面はほぼ半月、上弦の月に近い。日暮れの頃には中天近く、月光の輝きも増して見える。夜間の $\frac{1}{3}$ ほどの晩遅くまでの間、闇を払いのけてくれる。そしてその月明かりを利用して、夜なべ仕事、夜旅や夜間放牧が最大限に有効利用される。ラクダ放牧する牧者、あるいは旅にある者、あるいは野外

での夜なべ仕事にいそしむ者は、その月明かりを頼りに難儀せずに済むから仕事を続行する。月のある間は夜の仕事を。そして六夜月の月が没したならば、夜間の仕事をしている者は中断して休息に入る。

図表2の第1スプウ¹⁴天球図では上から第六番目に描かれている。第六夜月の宿は「ラクダの烙印」で、双子座の足元にある五つ星である。天球図では黒いヴェールに覆われた丸顔の中の向かって左側半分近くが月面となって六夜月の明るい月光を見せている。その月が休む宿、第六宿は双子座の中心に在ってその $\frac{3}{4}$ から $\frac{5}{4}$ にかけての $\frac{3}{4}$ を占める。図の円の大外の第六宿の象徴図では、半人半魚または半人半蛇のキメラ像で、上半身は第二宿の人物とほぼ同じであるが、帽子がこちらの方が長めの中折れになっている。下半身はくねっており、魚身か蛇身か、反り返り方をみると後者が近い。また天球の向かいにあってラキープ(見守り星、対星)となる射手座像の下半身とも類似している。

こうした六夜月の日常対応の特徴が次のようなものがあり、歳時記的言い回し、俚謡によれば、アラブの「六夜月」は以下のように言われる：

- | | |
|----------------------|------------|
| ① 「六夜月」、(その夜は) | ibn sit |
| ② 夜旅をして、それから寝て過ごしましょ | sir wa-bit |

(sit, bit は押韻)

この夜の俚謡は簡便で僅か二句である。夜間行動・夜なべ仕事・夜勤をサイル sayr(旅)で代表させている。sir という語は saara < sayara(旅をする)の命令形で「旅をなさい」である。旅の場合、夕方から動き出し上弦の月近くの六夜月の没する夜半近くまで月明かりを頼りに旅を続け、月が没したら旅を中断して野営に入る慣行が伝えられている。bit とは baata < bayata(夜を過ごす)の命令形であり「夜を寝て過ごせ」の意味となる。お馴染みの「家」bayt もこれから派生しており、基本的には「家=テント=夜を過ごす所、休息し寝るところ」の意味であった。上の言い回しは Sij も、Far、Mas、Qal の資料すべて全く同一である。「六」は正式な原綴は sitt であるが、押韻の関係で sit となっている。Qal は子音をダブルさせるシャッダ記号を付しているの、①の脚韻語を sitt と、②の脚韻語を bitt と読ませている。押韻による破格である。

3-3 「第三サラーズ」第七～九夜月

トゥサウ Tusa" (九夜月)、アフラーウ "Afraa' (灰月) ブフル Buhr (輝月)

第三サラーズ「七～九夜月」は一か月のラジャル(前半月・白月)の五等分のうち、その第三の、中間の、そして上弦に当たる「七～九夜月」目までの「三夜月」間である。月は太陽の宿る宮 burj(例えば牡羊座)から東に90度以上に移行している。「七～九夜月」の「月の宿」は太陽の宿に対して直角からさらに東に移る。日没の頃、天頂に在って夜半に至るまで地上の闇を照らし続ける。その月面を半分以上見せて輝きを増す。そして夜半に西に没し、真夜中の指標となる。

上弦の月を中心とする七～九日月。月はその覆っていたヴェールを半分以上出して輝かしさを地上に投げ掛ける。月面の形が丁度半月になり、さらに丸みを帯びて来る「七～九夜月」の頃、これをアラブはトゥサウ(tusa")とっている。トゥサウとは数詞の「九」ティスア tis"ahを表わす動詞タサア(tasaa")の派生名詞であり、この語根は数の「九」に関連した語彙体系を形造っており、その他の語義の含みは一切持っていない。トゥサウとは「陰暦の七、八、九の三夜、または三夜間

の月」がその義である。「七〜九夜月」を代表させるに、通常採用される真中の「八」の数ではなく「九」の数が選ばれていること自体、その背景を調べて観る興味を注がれる。少し述べれば真中の数「八」のサマーニヤ *thamaaniyah* の数詞の、このタイプの形スマン (*thuman*) を採らず、「九」のトゥサウとした背景には「言葉の恣意性」と云う問題だけでは片付けられない文化的面がある。それは一つには、アラブは偶数よりも奇数を好む性向が反映していよう。また満月に近づけば近づく程、月は丸みと明るさを増し、それが同時に人々の気持を楽しく慰めてくれることになる。こうした期待感をもこめて上弦の月である「七日夜月」などは未だ半月に過ぎない感があり、膨らみを持った半月の方を好んだ。それ故に、「九夜月」という呼称法を採ったとも考えられる。

またもっと根拠のある説としては、「九」という数の持つ威力の信仰との関連で捕えられよう。これは民間信仰、邪視信仰とも関連する。奇数を尊ぶことと合わせて、「九」、「九十九」とは、威力ある数であり、アスマーウ・フスナー (*al-Asmaa' al-Husnaa*) として知られる「アッラーの美称」も属性として九十九あるとされているし、「腕輪」、「首飾り」、「数珠」等呪具や飾り具に好んで用いられるが、単に装飾だけに留まらず、護符や魔除けの信仰も兼ねられているわけである。そしてその「九」、「九十九」を例えば、数珠玉の連続した形にしたりした場合、丸型のものより、三角形、半月形を主体としたものが好まれている。三日月の呪力と共に、上のトゥサウが「七〜九夜月」の総称として採られた背景に在ると考えられる。

さらに興味を引くのは上弦の月の頃ならば、「七夜月」こそが厳密には「上弦の月」となる。それゆえ数「七」サブア *sab"ah* が指標となってサブウ *suba* が三夜月を代表して然るべきである。しかしウスブーウ *usbuu* (週) を意味する類語、また一か月の四分スブウ *sub* の用語の存在もからんで忌避したことも考えられよう。この辺り探ると民族観にも通ずる特徴が浮き出て来よう、単に「言葉の恣意性」ということで処理するのではなく。

「七夜月〜九夜月」の三夜はアフラーウ ("Afraa' 灰色月) と呼ばれる。「ほこり色・灰色したもの」がその意味であり、この時期までの前半夜までは月光のある「白夜」、後半夜は月が没して闇となり「黑夜」、この両者が一晚を作るので、その夜のトータルな色は白・黒の入り混じった「ほこり色・灰色」となる。これを称してアフラーウ ("Afraa') と言うわけである。なお同族語ヤウフル (*ya"fuur*) が夜間の分割語、五更のうちの「四更」の用語とされている。前稿第8節「三更および四更」の項を参照されたい。

トゥサウあるいはアフラーウ、即ち「七〜九夜月」は、夜明けまでは残らないとしても、夜半過ぎまではその輝きを地表に投げかける。この頃の明るさは、夜警の者が見はるかす程遠くまでは見えないものの、ある程度の距離、それも敵や盗賊の侵入を察知し、防備体制が整えるくらいの視野の広がりにはなる。このことは逆の立場の者についても言え、攻撃しようとする側では、何か物陰に隠れて相当近づかなければ相手に有利な立場に立てない。また攻撃される側では、目標となる敵の情勢を遠くからでもさとらることが出来る。その意味で油断も生まれてしまう。わが国にも「月夜に釜 (を抜かれる)」があるが、まさに油断大敵とされる刻限なのである。

Mas、Qal、および Ham では「七〜九日月」の名称を異にしている点、時代観、地域観を映して面白。Mas ではズフル *Zuhr* (またはズハル *Zuhar*) としている。ズフルは「一夜月〜三夜月」の一つとして既に述べている。しかしズフルの意味「華やかさ、輝かしさ」を考えると、また同族語に「花」*zahrah* (*pl.azhaar*)、「金星」*Zuharah* があることから、月光の輝きが増すこの時期を捉え

た用語のほうが相応しかろう。さらに Qal および Ham ではこのズフルを次の「十～十二月夜」に充てているのも納得ができる。そして Qal、Ham では「七～九日月」のことをズフル（Buhr 輝月）としている。ズフルとは「明るさが増しまばゆく感ずる」ほどの月「輝月」のことを言う。zuhr と buhr とは語形態は同じで語頭文字が異なるだけであるから、Mas の誤記、ないしは写本の誤写、印刷などのミスプリであろうことが考えられる。

3-3-1 「七夜月」 ibn sab"

「七夜月」イブン・サブウ ibn sab"、その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮（burj）から東に直角となる 90 度ほど離れて、二十八宿の一つ（牡羊座からならば第七宿アル・ジラーウ「双子座・獅子の前肢」al-Dhiraa"）がその「月の宿」（manzil）である。

「七夜月」と言えば「上弦の月」。この月が没すれば夜半・後半夜（duljah）の始まりの時の刻み、一か月の四半が終わる目安の月。即ち第一スブウ（第一四半期、第一～七夜）わが国では一晝、一坐で「七日節会」が行われた伝統を持つ。アラブでは「七夜月」の頃は近隣の親しい者が集まり、サマル（夜の閑談）の座が組まれ、最も楽しみとなる。夜間の涼風に誘われて、近所や近親者が寄り集まっては、閑話・余談を楽しむ寛ぎの一時の余裕を持つ。その半月の光明が導くように、人々は家族ごと何人か組になって、子供たちは嬉しそうにみんなスファール（sufaar 口笛）を吹きながら、少し離れた集会所や客用テントで催される寄合に出かけて楽しむ。夜半頃まで燈明となって、サマル（夜の閑談）には最適な月夜。また俚語にも「七夜月、それは伴侶ある（旅）人の導き」がある。夜旅がし易くなり、同じ方向へ赴く者が集まり、七夜月のもとに旅の同行者・連れとなって出かけることを言い当てたものである。

図表2の第一スブウ¼天球図では上から最後の七番目に描かれている。第七夜月の宿は「獅子の前肢」で、双子座の頭部にある主星の二つ星である。天球図では黒いヴェールに覆われた丸顔の中の左側半分が月面となって七日月、即ち上弦の月の明るい月光を見せている。その月が休む宿、第七宿は双子座の中に在ってその⅓から⅔にかけての⅓を占める。図の円の大外の第七宿の象徴図では、人面獣身のキメラ像で、四角い頭をした人面で、前肢は手にも見え上半身は人間とも思える。下半身は獅子のそれであろうか。

上弦の月が没するのが「夜半」であり、アラビア語では「後半夜」はドウルジャduljah と言う。この「後半夜」はドウルジャに関しては、前稿「夜の表象」の第3章第6節「夜の最後の⅓」の概念の中で触れたように、夜半過ぎてから夜明けに至る夜間の「後半夜」の意味である。そしてこの「後半夜」ドウルジャを迎える頃、折りしも「七夜月」が没する。逆に言えば、duljah の概念は「七夜月」が没する頃を指標としたわけである。夜半は確かな目安がないため、この「七夜月」はその意味でも指標としての役目も担った。

しかし「七夜月」が沈んだ暗闇の夜半は、ハイエナなどの夜行の動物たちの世界になる。夜が更けて月が没し闇が支配するようになると、月明かりを避けていた夜行性動物どもがにわかに活動を盛んにする。中でもハイエナは、その動きや鳴き声が目立つ。家畜類、特にガナム（羊・ヤギ）などが襲われないよう警戒せねばならない。なおハイエナは、アラブの概念では「無情なもの、無慈悲なもの」或いは「愚かなもの」の代表とみなされ、嫌われている。しかしその闇目の良さからかアラブの民間信仰では、ハイエナの胆のうを焼いて灰にし、アイシャドーとして塗ると視力が増し、

鋭くなる、とも信じられている。

「七夜月」については上のような夜景を踏まえて、次のようなアラブの俚謡が伝えられている：

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| ① 七夜月、それは | ibn sab" |
| ② 集まり持つに最適ね | hudan li-unsin dhii l-jam" |
| ③ 二人で連れだち口笛吹いて出かけましょ | tusaffir fi l-shaf" |
| ④ でもハイエナ徘徊するのが後半夜 | duljah al-dab" |
- (末尾子音 + " ("ayn) の押韻)

②は Sij、Far の双方に記されている。しかし③は Mas にのみである。④は Sij には欠如する。Qal では①、④、②の順であり、②も *hadiithun wa-jam* "「お話にお集まりね」となっている。

第七宿をもって月は第三ブルジュ（宮）を通り過ぎる。さて第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ（宮）とその細分であるマンジル（宿）の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っていよう。この種のものには付き物である。

月が第三星座双子座・双子宮のブルジュ（塔） $\frac{7}{8}$ に在る間、即ち第五マンジル（宿）の $\frac{1}{4}$ 及び第六マンジル $\frac{3}{4}$ 、第七マンジル $\frac{3}{4}$ のすべてに宿間の指針・吉凶・運勢は：

パートナーシップ選びに良く、結婚も良し
 旅もまた勧められる
 宝石の探索・採掘にも吉である
 服地の裁断にも良し
 文人に頼み事を委嘱するも良し
 薬の服用は控えるように
 出血もしないように心掛けよ

月が第五マンジルにある時については第二ブルジュの方で述べた。次の第六マンジル（宿）にある時の運勢は：交友関係、契約には好適。旅行、狩猟、冒険、戦争にも好条件となる。仲間・戦友も協調的で正直、忠実な者であろう。船旅は遅れも出ようが向いている。傷病や服薬には不向き。新調衣はおろすとすぐに破れてしまうことになろう。捕虜になった場合は、三日以内に解放されなければ長引くことになり、牢獄に繋がれることになろう。（日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏では秋分から始まるため、宿曜道二十八宿の第二十一番目「参」宿に当たり、運勢もまた別な判断がなされる。旅行が吉であるところなどは共通している）

月が第七マンジル（宿）にある時の運勢は：交友関係、契約には好適。相手も善良で協調的で忠実な者であろう。洗髪、整髪、切断することに良し。新調衣を仕立てるに向く。奴隷や家畜を買い入れるに良し。敵と和解するに向く。また船旅に遅れも出ようが向いている。土地の獲得や購入には悪い。服薬の中断は悪い。捕虜になった場合は、三日以内に解放されなければ、牢獄に繋がれて死ぬことになろう。同様になにか恐怖の対象があれば、それに再び遭遇することになろう。（東アジア文化圏では二十八宿のうち第二十二番目の「井」宿に当たり、〈断つ、切る〉ことには凶日と解されているようである）



図表3 一か月天球図 第二スブウ (第八夜～第十四夜とその宿)

図表2の一か月天球図の第一スブウに続き、第二スブウ(第八夜～第十四夜)について部分拡大したものである。月の位相は円周の90度から180度に至る。上弦の月が過ぎ満月に至るまでである。毎夜の月の宿マンジルを提供するのも、黄道十二宮の三ブルジュ(宮、蟹座、獅子座、乙女座)であり、それを細分する「月の二十八宿」(manaazil al-qamar)のうち第八宿～第十四宿(マンジル)である。十二宮の中、乙女座の図像に注目。二十八宿の興味深い大外の象徴図の説明は個々の何夜月の中で、不十分ではあるが説明してある。

3-3-2 「八夜月」 ibn thamaan

「八夜月」イブン・サマーン ibn Thamaan。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮(burj)である黄道十二宮の基点(例えば牡羊座)から東はるかに去っている。十二宮を分割した二十八宿の一つ(牡羊座からならば蟹座第八宿アル・ナスラ「獅子の鼻」al-Nathrah)がその「月の宿」(manzil)である。第七宿が上弦、即ち太陽から90度を超えていたから、「八夜月」のお宿は100度を超えた後半夜ドウルジャに没する第二宿目に当たる。また第二「四半期」スブウの始まる宿でもある。

図表3の一か月天球図第二スブウでは右上に八夜月が第八宿として描かれている。第八宿は月の黒いヴェールに包まれた丸顔は左の半分以上が黄金の面となり明るい輝きを放出する八夜月を見えている。下の十二宮の蟹座の中に在って、その宮の1/4から3/4を占める。第八宿は「獅子の鼻」である。蟹の甲羅にあるγ、δ星を挟んで多くの星々を獅子の鼻と見立てている星取りになる。本図では内向きの蟹の右の脚部に当たる。図の円の大外が各宿の象徴図である。シャム双生児の如く双頭四臂の形態であるから、極めて特異であり、図表2の直前のブルジュ(宮)双子座との関連も窺われる。双頭図はブルジュでは双子座、マンジルでは第三宿で描かれている。大きく開いた股間に意味を持たせているのであろうか。

「八夜月」と言えば、上弦の月の膨らみが一層増す。即ち目にも一層月光の輝かしさが増すことが実感される。この頃の月の「輝かしさ」は俚謡でも謳われているように、原語ではアドゥヒヤーン adhiyaan と言っている。月光でも「雲にさえぎられることもない輝かしさ」なのである。特に「夜」とか「月」に関して用いられる語とされる。しかしさらに原義を辿ると、動物の体毛色の感覚が先行しているようだ。即ち、ガナム(羊や山羊)、ラクダなどに多く見られるが、「白・黒」を主毛色とする動物のうち、白色の方が多くを占めるもの、これをアドゥハー adhaa とかアドゥヒヤーン adhiyaan といったわけである。この原義の色の感覚を「夜」にあてはめ、月のある時間帯を「白」、月の没した後の闇を「黒」と設定すると「八夜月」は物体としての月ばかりではなく、明らかに夜

半過ぎまで月が空にあり、従って〈時空〉においても「白」が黒より量的にもまさる。この動物の体毛色のイメージもまた「夜」、「月」への転喩の例であることが分る。単に「輝かしき」と訳した言葉の中にもこのような複合的意義が含まれて意識されているわけである。

サマル（夜の閑談）も興ずると夜半に及び、話好きの遊牧民であるだけに、時も忘れる。早起きの彼らには、空き^も腹を抱えることになる。そのため空腹を埋め合わすべく、有り合わせのパン（raghiif）をホストのテント主が提供する。まず自分がほんの少し千切っては、すぐに隣に回す。隣の者もその量に合わせて、手にして一千切りしては、座の次の人に回す。隣り合わせても右回りに回すのが原則である。また「パンの契り」と言う風習もあった。同一のパンを割って食べ合う。それは共食をして縁を結ぶ意味を持つ、我が国の同じ「釜の飯」を食べた者は義兄弟である、との観念である。この「パンの契り」はさらに形式を踏んで重要な意味合いを持った。他人と契約や約束を結ぶとき、月・星に向かって当事者双方が誓い合った風があった。当事者双方は、持参したパンをお互いに千切って、月星に向かって誓いを立て、その同一のパンを食べ合う。これが最も厳かな「パンの誓い・契り」であって、「共食」以上の意味合いが籠められていた。そして星辰信仰の中でもこの「八夜月」が誓いや約束事をするのに最も適していたことである。即ち上弦を節目とし、その頃・それを過ぎた直後の月の頃、その月に向かって、お互いに誓いを立てるのである。「誓い」としての威力の在り方も、光も形も減じて行く下弦の月に対してではなく、光も形も大きくなり昇って行く月なので、勢いがある。それだけ一か月の中でも、この頃の誓いや約束、願い事がもっとも効力があるとされる。

「八夜月」については、上に記したような状況を踏まえて次のようなアラブの古謡が伝えられている：

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| ① 八夜月、それは | ibn thamaan |
| ② 輝かしき月 | qamar adhiyaan |
| ③ ^{きょうだい} 同胞たちパンを分け合う | raghiifun iqtasama-hu akhwaan |
- (句末の -aan が押韻)

Sij および Qal の方では③が欠如する。Mas の方では②が asbahaan（朝のような輝かしき）となっている。Far の方では「八夜月」に関しての言い回しは欠如している。

3-3-3 「九夜月」 Ibn tis"

「九夜月」イブン・ティスウ Ibn tis"。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮（burj）である黄道十二宮の一つ（例えば牡羊座）の東110度前後に宿る。十二宮を分割した二十八宿の一つ（牡羊座からならば蟹座 第九宿アル・タルフ「獅子の眼」）がその「月の宿」（manzil）である。月面も明るい丸形に近く、輝かしきも増す。そしてこの明月が西没するまで地上には明るさを投げ掛ける。

図表3の一か月天球図の第二スプウを見ると右上二番目に描かれている。第九宿は月の黒いヴェールの丸い輪郭の中であって、ヴェールで隠す部分も少なくなり、左側の明るい輝かしきが膨張しており、九日月の顔相を見せている。「獅子の眼 al-Tarf」であり、蟹座と獅子座の境界に在って、巨大の獅子の頭部の眼に当たり、二つ星である。蟹座の $\frac{4}{5}$ から $\frac{5}{6}$ を占める。外枠の人物像は一人物が左手を上げ、右手の掌に返して下げ、両足も手と同じ動きを見せる。俚謡でも「一飲みにはあり付けるも」とあるように、「甘茶でカップレ」踊りをしているような、楽しげさが伝わって来よう。

「九夜月」は夜半を超えても、まだ頼りとなる月明かりがある。昼の暑熱に対して、冷涼な夜間は快適で、アラブは「九夜月」になる頃、その明るさも手伝って活動もますます盛んであった。月明かりを利用しての夜なべ作業、夜勤においても、ラクダ放牧においても、また夜旅においても。夜旅を例に採ると、月明かりのある間無理をして先を急ぎたくなるもの、勢い履いているサンダルの皮紐を切らしてまで急ごうとすることになる。それほどに夜間に月明かりがあることは夜旅には適していたことを言っている。この場合、足となるラクダに乗っての表現ではないことが注意をひく。乗用ラクダがあるのに、わざわざそのラクダを引いて旅人自身が歩くことも多い。わざわざそうするのは、鈍^{なま}った下半身の自身の運動にもなり、愛用ラクダへの負担を減らしてやる思いやりにも繋がる。もっとも一般には、旅人は長旅を敢行する場合、ラクダの体をいたわって、時折は自らの足でも歩くことはごく普通のことであった。長旅で積荷が重すぎたり、地形的に平坦でなく、岩だらけや傾斜地などを踏破するような折には、歩きたくなくともこのようにするのであった。特に坂を下る場合は難儀となる。そして増々輝きを増し、夜半まで旅路を照らす「九夜月」が天空にある間、サンダル na'l の皮紐がすりきれるまで旅を急ぐのである。革製のサンダル、その「革紐」をわが国では下駄や草履の「鼻緒」に相当するのだがシスウ shis" (pl.ashsaa",shusuu")と言っている。日本の鼻緒もそうように、結構擦り切れることも多い。擦り切れたて鼻緒も簡単には捨てられない。Taaj al-"Aruus には、キャラバンを歌で導いてゆくために、こんな「擦り切れた革紐」をタクトに用いた詩句がある：

我ラクダ達を歌で導けり サンダルの擦り切れし革紐振り回して

Ihduu bi-haa munqati"an shis"annii

同じく Taaj al-"Aruus に：

彼己のサンダルの向き変えたり 足跡を読み取られぬため

その両の革紐取りて 鼻緒を反対の方に向け(地に押し付けたり)

Yuriidu na"lay-hi li-"allaa tu"rafaa

Yaj"alu ashsaa"a-huma l-qafaa

この後者の引用例は恐らく戦闘に出かけたり、その帰りの場面で、足跡が地面のはっきり残るような、要警戒の場所での処置であろう。

また九夜月の頃から月は丸みを増し見頃となる。宿営する者にとっては、見晴らしの良い砂漠地の街道に沿って、遊牧民は好んでキャンプを張る。この野営地で、観月と閑談をしながら、夜旅の者をも「歓待の火」naar al-qiraa を焚いて喜んで迎えてくれる。そこへ行きずりの者、旅人が寄れば一杯は確約されよう。「一杯・一飲み」はイスラム以前では「酒」、以降では「ラクダの乳」であることに要注意。野営地はジズウ jiz" (pl.ajzaa")と言っている。「渡る所、横切る所、切れ目となる所」の意味である。多くの場合砂丘の傾斜地とかワジ(涸れ川)の曲がる角の分かり易い部分がジズウに設定される場合が多い。

上のような状況を踏まえて「九夜月」イブン・ティスウについては、次のようなわい謡が伝えられている：

- | | |
|-----------------|--------------------|
| ① 九夜月(その夜は) | ibn tis" |
| ② サンダルの皮紐を切らすもの | munqati"u al-shis" |
| ③ ラクダの腹帯千切れさせ | mahdhuwwu n-nis" |

④ 部族の野営地には行き当たり

multaqitu l -jiz"

⑤ 一飲みにはあり付けるもの

taltaqit fi l-jir"

(末尾子音+ " ("ayn) の押韻)

Sij および Far の方は全く同一であって、①、②、④までである。Mas は①と⑤とのみ。Qal は①と③のみ。②と③、および④と⑤は同源のものと思われる。

3-4 「第四サラース」第十～十二夜月

ウシャル "Ushar (十夜月)、ドゥラル Durar (真珠月)

第四サラース、十日から十二日の間の月、「十～十二夜月」。一か月のラジャル（前半月・白月）を五等分した四番目の「三夜月」である。月は太陽の宿る塔＝宮（burj）からはるか東にある。月初め太陽が十二宮の一つの宮（例えば牡羊座）の中にあつたとすると、この「十～十二夜月」は、その宮の東110度から140度辺りに移行している。満月に向かって勢いのよい、十日から十二日の間の月のことはウシャル（"Ushar）と言っている。日没の頃、すでに天頂より東の方に明らかに丸みを帯びて煌々と輝く月である。従って日没時には中天から東に傾いて、宵闇を迎える。そして十分大地を明るくして夜半遅く西に没することになる。

「十～十二夜月」の用語ウシャル（"Ushar）とは数詞の「十」を表示するアシャラ（"ashrah）から採った用語である。日齢の呼称が三夜ずつを一単位として命名されていることを考えると、この前段階が「九」を指示し、今度が「十」でその段階を指示しているのは、数のバランスからいっても合理的ではないわけであるが、こう命名されてそれが名称として通ったについては筆者は次のように推断する。

一つには「何夜月」の言い表わし方に十段階ある中で、分り易い数詞を用いて、それを用語としているのは先の「七～九夜月」のトゥサウとこのウシャルだけに限られることである。

ウシャルが指示する「十～十二夜月」の真中の語の「十一夜月」の数詞を代表させて用語とすると、不都合になってしまう。と言うのもアラビア語の数の語形は、「十一」以上は「一と十」というように二語の複合語となってしまう。こうした三夜ごとを単位として時制を表示していた語形態ファル fu / "a / l /、平たく言えば CuCaC（C は子音）と言う単独語での定型表現が不可能になることに起因しているものと思える。即ち、数詞を用いない表現こそアラブの語彙形成の豊かさを示す基本的概念がある中で、日齢の順列において前段階に数詞の派生形で特称を作ってしまったために、それに引き続いて数詞で代弁させてしまおうとの意識が働いたこと。これと関連して、二つには十一以上の数は複合語となってしまうため、日齢表示の基本語形ファル fu"al がとれなくなってしまうことである。

この二点から「十～十二夜月」のなかで数詞一語で用語化が容易な「十」を意味する語のパターンを採ったのではないかと思える。「七～九夜月」を「九」で代表させ、「十～十二夜月」を「十」で代表させているところが、語彙の恣意性というか、どの文化圏にも共通する合理では割り切れない^{なま}生^{なま}の人間性を物語っているわけである。十の数と日齢とが結びつくウシャルは、我が国の「十日夜^{とうかんや}」を想い起こさせる。これについては、次節「今日は何夜月？」のところで触れる。ウシャルは、夕方には既に空にかかっており、闇の訪れと共に一層輝きを増して、大地を照らすことになる。月はその光の恩恵を可能な限り及ぼす。この頃になると、遊牧民は夜の警戒心をますますゆ

るめることになる。敵部族の襲撃や略奪、盗賊の侵入などには、その月の明るさ故に対処するのが容易である。トゥサウの段階までは、財産でもあり、名誉の象徴でもある家畜、とりわけラクダを奪われたり、盗まれたりしないよう、一か所に集めて動けないようにしていたのであるが、ウシャルになるとその心配もなくなり、足枷をつけて余りに遠くに歩けないようにしながらも、近くの草は食べることができるようテントの回りに放しておくようになる。夜間放牧もそう警戒せずと行うことができる。月が大きくなり、輝きを増すと、遊牧民の心も大きくなり、寛大さが増す。この頃には遠慮なくナール・キラ（もてなしの火）が焚かれ、テントを頼ってくる者、夜旅の者が快く迎えられ、歓待されるようになる。「天に銀 地に赤」を頼りに、即ち青白き「銀月」を天空に、薄暗き地の中に赤く暖かく迎える「もてなしの火」を頼りに。

Mas では「十～十二夜月」のことをドゥラル Durar と言う、とある。「真珠たち」である。銀月がその形といい、輝かしさといい、膨らみと輝きを増してゆく三夜の月、それぞれが「真珠」と喩えられる。ドゥラル durar とはドゥッラ durrah（真珠）の複数形なのである。十日月は歪な丸みを帯びた真珠（ドゥッラ）、十一日月はやや丸くなった真珠（ドゥッラ）、さらに十二日月は涙の粒型、水滴型の真珠（ドゥッラ）と、これらが真珠たち（ドゥラル）と言うことになる。Qal および Ham では既に述べた如く、七～九日月で記したズフル Zuhr を「十～十二夜月」に当てている。

3-4-1 「十夜月」 ibn "ashr

「十夜月」イブン・アシュル ibn "ashr、その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮 (burj) である黄道十二宮の一つ（例えば牡羊座）に対して、東に130度以上離れて十二宮を分割した二十八宿の一つ（牡羊座からならば第十宿アル・ジャブハ「獅子座 獅子の額」al-Jabhah）がその「月の宿」(manzil) である。月はそのヴェールから顔を丸く見せるように大きく覗かせる。

「十夜月」イブン・アシュル ibn "ashr、わが国では「^{とうかんや}十日夜」と言って、田舎では特別な行事をしていたものである。といっても我が国の場合、毎月の十日の夜のことでなく、重日である「十月十日」の夜のみ、及びその夜の祭の行事を指している。この夜は田の神の代りとされるカカシを田から抜いて持帰り、家に大根と共に飾り、餅を供える。そして収穫を感謝し、稲作に悪さをするモグラを追う、虫追い行事を行う。藁を束ねて棒状にし、定句を唱えながら地面をたたき回るものであった。その音は鉄砲の発砲音に似ているため、その藁棒は「藁鉄砲」とも呼ばれている。

こうした日本の「十日夜」の風習と異なり、アラブでは決してハレの日でもなく、日常生活と密着した指標とされている。月の出の時刻と満ち欠けを指標として、「十夜月」は位置づけられている。夕方には既に東の空にかかっており、闇の進行と共に一層輝きを増し中天して、大地を照らすことになる。

図表3の第二スブウ一か月^{のぞ}1/4天球図を覗くと右上三番目に描かれている。第十宿は「獅子の額・鬣」^{たてがみ}である。古代の巨大な獅子の前頭部に当たる。四つ星か五つ星で星取られる。月の黒いヴェールはもはや殆んどが取り払われ、左側が既に丸みを帯びて来て、十日月の明るい顔を輝かせている。いわゆる「^{とおかんや}十日夜」らしき態。「旬」としてヒラール「上旬」とカマル「中旬」を区切る立場にあるからか。またその月が休む宿は、蟹座の^{のぞ}1/4から獅子座の^{のぞ}3/4に跨がっての^{のぞ}3/4を占める。天球図の円の外の第十宿の象徴図では、第一宿の頭部を拡大したような、王冠をかぶる人物像である。但し王冠が大きく、また両端に垂れが付いている立派なものである。獅子の頭部でもあり、そ

の王者振りと威厳を示すものか。

この「十夜月」について、アラブの俚語は以下のように採録されている：

- | | |
|----------------|------------------|
| ① 十夜月（その日が） | ibn "ashr |
| ② 一か月の三分の一（過ぎ） | thulth al-shahr |
| ③ 夜明けを恨むもの | muhniq li-l-fajr |
- （句末の子音 + r が押韻）

Far の方は①、②まで、Mas では③が muhiqqun（恐れるもの）となっている。Qal では②と③の順が逆になっている。

「十日夜」であるから切れ目、節分の目安ともなっている。一か月三十日の中の $\frac{1}{3}$ 、即ち第一句日（Hilaal）が過ぎたこと、第二句日（Qamar）に入ったこと、それを確認させる「月」でもあった。当たり前のことであるが、月星を頼りに時節を過ごす社会では大事な生活指針となる節目でもあったのである。一か月のうちの「 $\frac{1}{3}$ 」が経過したこと、謂わば上旬が終わって中旬に入ることの確認が行われるわけである。

わが国では分数の言い方は、用語としての単独語がないため接続語で言わねばならない。「～分の一」のような面倒くさい長たらしい言い方しか出来ない。一方、アラビア語には CuCC（C は子音文字）と言う語形を取ると、分数表示になるのだ。三を表すサラーサ thalaathah の語根 $\sqrt{\text{th} / \text{l} / \text{th}}$ の子音に CuCC を当てはめスルス thulth とするとそれで三の分数「 $\frac{1}{3}$ 」を表すことになる。それゆえ容易に用語や雅語の使用もできる構造になっている。

十夜月ともなれば、明るさも大きさも一段と増して真珠の輝きのように天空を支配している。だがこの月も夜明け近くの時間帯サハル（sahar）が来ると、西に没する。十夜月は明け方前の、その暗黒に勝てず西に没して輝きを失ってしまう。サハルの時間帯はまだ夜間であるが、次に来るファジュールは太陽の先導者、露払いのように明るさを伴ってやって来る。そのため十夜月の夜を楽しんでいた者、頼りにしていた者には、没する刻限には恨みを伴うものとなる。一方月明かりを頼りとしていた者のうち、旅人は、十夜月が沈んでしまうと闇の世界ではそれまで明るかっただけに極めて前進がしにくくなる。それでもなお、もっと旅を続けたいのに、と恨む気持ちが、十夜月を性急に追い立てにやって来るであろうファジュール fajr「夜明け」に向けられる。ファジュール以降の明るさと暑さを伴う太陽によって、明け方に対しての感情は一段と強くなる。「夜明け」への恨みはひとしおといったところを言い当てた表現である。fajr「夜明け」および sahar（夜明け前）、これらの文化的意義については拙稿『アッサラーム』誌22号71頁の〔図Ⅲ〕参照。

さて第十宿をもって、月は第四宮蟹座を通過し終る。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体 $\frac{7}{8}$ のブルジュ（宮）とその細分 $\frac{3}{8}$ であるマンジル（宿）の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っている。この種のものには付き物であるが…。

月が第四宮蟹座・巨蟹宮のブルジュ（塔）に在る間、即ち第八マンジル（宿）、第九マンジルのすべて、及び第十マンジルの $\frac{1}{8}$ に宿る間の指針・吉凶・運勢は：

月、蟹座にある時布地の裁断に適する

また下剤用いれば効力多大なり
 宝石売るべし
 旅は良し、水上の船旅がさらに良し
 必要とする人にはできるだけ手紙出すべし

月が第八マンジル（宿）にある時の運勢は：陸上も水上も旅行に好適、行きも帰りも快適に早めに安着できるであろう。婚約はスムーズに進むが最後に^{こじ}れる場合がある。奴隷購入及び契約締結には不向き。購入した奴隷は騙すし、主人を非難し逃亡を図ろう。契約・協約はお互いに欺瞞が含まれていよう。捕虜になった場合は、牢獄生活が長くなろう。（日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏では宿曜道二十八宿は秋分から始まるため第二十三番目「鬼」宿に当たり、よろずに良く、二十八宿中最大の吉運日とされている）

月が第九マンジル（宿）にある時の運勢は：旅行に好適となろう、行きも帰りも。家の改修（扉、錠鍵、寝台、カーテンなど）に好適。小麦の移植に良い。契約・協約は不向きであって、お互いに騙し合うことになろう。散髪や爪切りには不向き。新調衣を下ろすのも良くない、着物に引きずられてひどい目にあうことになる。捕虜になった場合は、長い収監となろう。（東アジア文化圏では二十八宿中、第二十四番目「柳」宿に当たり、「旅に吉」など共通するところもある）

月が第十マンジル（宿）にある時の運勢は：建築するのに良い、長持ちがしよう。契約・協約に良く、お互いに益すること大となろう。捕虜になった場合は、大変である、敵将次第なのだが長く辛い牢獄生活を送ることになろう。（東アジア文化圏では第二十五番目の「星」宿に当たり、交渉事は争いを生じやすい凶日など正反対な解釈も下されている）

3-4-2 「十一夜月」 ibn ihdaa "ashrah

「十一夜月」イブン・イフダー・アシュラ ibn ihdaa "ashrah、その夜の「月の宿」は何処か。月は「十夜月」からさらに東に13度ほど移動している。従って太陽から140度ほど東の空に離れて宿をとる。この夜、第一夜から十一番目の二十八宿の一つ（牡羊座からならば第十一宿アル・ズブラ「獅子座・獅子の鬣」^{たてがみ} al-Zubrah）がその「月の宿」（manzil）となる。獅子の背中に当たり δ 、 θ の二つ星に星取られる。

十一夜月は日没後の闇が支配する頃には中天よりやや東の空の方であるが高く上っており、この意味では擬人化していえば、夜空となるころには太って煌々とした月となっている。そして空の高みから西の方の日没の「宵」を見ていることになろうし、深夜遅くには東の方はやがて来る「暁」の頃をも西空低くまた没してからも見守って眺めやることになるであろう。

図表3の第二スブウの一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図を見ると真中、獅子の背上に描かれている。第十一夜月の宿は「獅子の鬣」であり、獅子座の中に在ってその $\frac{3}{4}$ から $\frac{5}{4}$ にかけての $\frac{3}{4}$ を占める。月は覆っていたヴェールをさらに外して、はっきりした円形の顔面を見せる。輝かしさ、まばゆさも加味しながら。その月が休む宿、図の円の大外の第十一夜月の宿の象徴図では、二日月の宿と似て膝まづく一人物である。手の形が異なり両手をあげ掌を上に向けている。この仕草は天に向かって祈り願いを訴えるポーズである。

「十一夜月」以降についてのアラブの俚謡であるが、冒頭で述べた如く数詞自体が接続語となるた

め、言い回し自体が長くなることと、数詞十 ("ashrah) が末尾に来るため、すでに十夜月で用いられているため、押韻を採るのに技術を要する。押韻語が後接語となり、-"ashrah (十～夜)、-"ishriin (二十～夜) が同一語と続くので押韻を採るのに困難が伴う。このため、文体も多少変わり、月に問う体裁となる。「～夜月に対してあなたは如何なの?」、月答えるに「～夜月は…」というふうである。

ここでは「十一夜月」は導入部と押韻と関与しているのでそのまま通せるが、それ以降の月夜の言い回しが多少異なる。しかしサジュウの押韻もあり、連続しているので、以前同様の訳し方を採って同じ体裁で示すことにする。

「十一夜月」について、以下のような俚謡が言い伝えられている：

① 十一夜月、それは

ibn ihdaa "ashrah

② 宵も見れば、暁も見る

araa "ishaa'aan wa-araa bukrāh

(句末の -rah が押韻)

Mas は十一夜以降もそのままのサジュウ形で引き続き述べられるが、シジスターニーはその著の中で伝承者も異ならせ、アブー・ザイド以外の者の伝えるものとしている。Qal も資料として Manaahij ak-Fikr の書より補なって述べてゆくと記す。一方 Far の方は、「十一夜月」以降の記述はない。Mas では②が yuraa "ishaa'an wa-yuraa bukrāh (宵も見られれば、暁も見られる) と受動形で記している。

上で謡われる言い回しには「宵」が記されるが、その原語イシャーウから「夕飯」の意味で我々も親しんでいるアシャーウ "ashaa' が派生している。「宵」イシャーウに関しては、拙稿「夜の表象」の第3章4節の記述を参照されたい。また「暁」の原語 bukrāh とは狭義には「夜明け以降日の出まで」を、広義には夜明けを起点として、日の出以降にも延長して云わば「早朝」の時間帯を指して言われる。

3-4-3 「十二夜月」 ibn ithnatay "ashrah

「十二夜月」イブン・イスナタイ・アシュラ ibn ithnatay "ashrah、その夜の「月の宿」は何処か。月は太陽から東の空150度ほど離れて宿をとる。この夜、一夜月から十二番目の二十八宿の一つ(牡羊座からならば第十二宿アル・サルファ「獅子座・獅子の尻」 al-Sarfah) がその「月の宿」(manzil) となる。

「十二夜」といえば、シェイクスピアが『ロミオとジュリエット』の次に扱った双子の兄妹がくりひろげる喜劇『十二夜』、東方の三博士をモチーフにした諸作品を思い出す。本来キリスト教では、キリスト生誕の「十二夜」後、クリスマス後の一月六日の「公現祭」のことである。東方の三博士はキリストの生誕地ベツレヘムに東方、イラク・イランから十二夜をかけて、ベツレヘムの星に導かれラクダに乗って祝福にやって来たとされる。

図表3の第二スプウの一月 $\frac{1}{4}$ 天球図を見ると、下から三番目に記されている。第十二宿は「獅子の尻」で、獅子座の尻の β 星一つに星取られる。天球図ではさすがに黒い丸の輪郭の中を大きな月面第十二夜の月が煌々と輝く。その宿に在って覆っていた顔のヴェールの一部を残して、ふくよかな膨らみをもった色白なまぶしいほどの美顔を見せる。その月が休む宿、第十二宿は獅子座の $\frac{9}{16}$ から次の乙女座の $\frac{1}{16}$ にかけての $\frac{3}{16}$ を占める。天球図の円の大外の第十二宿の象徴図では、一人物が描かれ、前宿第十一宿と似たポーズであるが、第二宿により近い。右手を上に向けて伸ばし、左手

を腰に下げるのは第二宿と全く同形である。こちらは立ち膝ではなく、かしこまって坐っている。第二宿と第十二宿、数字「二」の関与があるか。(第五宿の山羊頭人身のキメラが座って右手を上げ左手を腰にしているさまも同様であるが)

アラブ世界の十二夜月については、観月が行われた。わが国の十三夜に当たろう。それほどにアラブ世界では「十二夜」の印象が強烈なのである。月を頼りとする、大事にする者にとっては、十二夜月ぐらいに月面が大きくなり明るさが強烈になると、太陽と拮抗するほどの日常体験に基づく観念があるのだ。十二夜の丸い形と煌々と輝く様は、闇が濃くなるほど、その膨らみを増すのが見ているほどに感じられる。そしてその膨らみは口や頬をほころばせた微笑む顔と捕らえられる。夜空ではさながら太陽のそれに似て、そのもとで活動を行う人間にとっては喜ばしく、快適なものとなっている。それほどに華やぎを演出させているのである。十二夜月を見ての喜び、それをムウニク mu'niq と言い表す。ムウニクには「喜ばす」の他にも「鑑賞するほどに」の意味もあるので、わが国の「十三夜」や「十五夜」鑑賞と同様、それらをも待たずに、「十二夜」の太陽ほどに円形に近づき、丸い形と煌々と輝く様を鑑賞する風習をアラブはもっていたのであろう。雲にも邪魔されず澄みきって乾燥した世界の夜空はさらに格別であったから。この十二夜月の喜ばしさは、バダウィー(遊牧民)にとっては勿論のこと、視界が狭く灯火もあるハダリー(都市・定住民)にとっても、遊牧民出のかつての郷愁が共有されているのである。このことは「十二夜月」を以下の俚謡で言われていることからわかるはずであろう：

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| ① 十二夜月、それは | ibn ithnatay "ashrah |
| ② 太陽に拮抗して人々を喜ばすもの | mu'niqun li-l-shamsi |
| ③ 人互いに近づける | murhiqu al-bashar |
| ④ 砂漠にあっても都市定住地にあっても | fi-l-badwi wa-l-hadar |

(サジウウである行末の押韻は③、④の -ar の間に見られる)

Mas は②を「旅するに適すると一致見る」muwfiqun li-s-sayri としており、意味を④につなぐにも、こちらの方がふさわしいように思える。③は Qal のみ。Qal では④の冒頭の前置詞が fi- ではなく、bi- になっている。

さてこの十二夜月をもって第五宮獅子座のブルジュ(宮)を離れることになる。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮) 7/4 とその細分であるマンジル(宿) 3/4 の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っている。より強くはブルジュの方が影響する。

第五宮獅子座・獅子宮のブルジュ(塔)に在る間、即ち第十マンジル(宿)の 3/4 及び第十一マンジルのすべて 3/4、第十二マンジルの 3/4 に宿る間の指針・吉凶・運勢は：

月獅子宮にある時火を用いての仕事に良し
 権威者の前で要求を告げよ
 必要とする人にはできるだけ手紙出すべし
 普請あれば進めよ
 放血に向く

化粧道具作るべし

但し裁縫ごとは避けるが良い

新調の衣服の着用も避けるべし

宝石売るべし

旅は水上の船旅が良し

月が第十マンジルにある時については蟹宮の方で述べている。それでは第十一マンジル（宿）にある時の運勢はどうであろうか。建築や普請に好適、堅固のものとなろう。契約・協約に良く、相手も共に収益を得よう。散髪にも良い。新調衣を下ろすのは避けるべし。捕虜になった場合は、敵將次第なのだが長い牢獄生活を送ることになろう。（日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏では宿曜道二十八宿中、第二十六番目の「張」宿に当たり吉日であるようだ）

月が第十二マンジル（宿）にある時の運勢は：奴隷や家畜を購入するには良い。貸した物は余程努力しないと返らない、返って来ても遅れる。旅行は長く辛く危険なものとなるが、致命的なものとはならないであろう。月が第十一マンジル（宿）に当然あるべきなのに、外れている時は大食に留意すべきである、胃痛、勇敢さ、力強さ、執拗さに問題あり。（東アジア文化圏では二十八宿中、第二十七番目の「翼」に当たり、別の解釈があるようだ）

3-5 「第五サラース」第十三～十五夜月

カマル Qamar（月）、バドウル Badr（満月）、ビード Biyd（明月）

「十三～十五夜月」の第五サラースは、十三夜も満月も入る、月が最も鑑賞に堪える三夜間である。一か月の前半・白月（Rajal, al-Layaalii al-Biyd）は五等分されて、日にちの指標とされる中で、その最後の第五分割目の「三夜間」である。前半月夜の最後「十三～十五夜月」。太陽との距離であるが、太陽の宿る十二宮の宮（burj）から正反対の180度近くの位置に月の宿があることになる。例えば第一宮牡羊座に太陽が宮として宿ると月は第六宮乙女座から第七宮天秤座に「月の宿」（manzil）を移している。

もはや数詞を用語としての「三夜ごと」表示に用いられることはない。なぜなら第四サラースであるウシャルのところで述べた如く、十一以上の数詞は、単独語ではなく接続語になってしまうからである。さすがに観月をするアラブであるから、満月近くになると、複数の言い方がある。カマル（Qamar「月」の総称）、バドウル（Badr 先んずるもの）、ビード（Biyd 白きもの）などである。まず十三～十五夜月をカマル Qamar と言い表すとき、これは「月」全体の総称語であると同時に、一か月の「中旬」にもなるし、またここで述べる狭義には「十三～十五夜月」の三日間のサラース用語ともなっている。カマルについては、前稿「月の表象」で述べてある。次に「十三～十五夜月」をバドウル（Badr）と言うとき、「満月」なのであるが、少し早目の「十四夜月」を表すことが多い。それはこの語義が「早い」と関係しており、日没と争うように太陽と同じ大きさになって東空に急いで早めに出て来て、「早めの満月」を必然的に想定させるからである。そしてこの「満月」Badr の語は、「月」全体の総称語カマル Qamar、「新月・三日月」を意味する ヒラルル Hilaal とともに「月」を表す代表語である。さらに「十三～十五夜月」のことをビード Biyd とも言っている。ビード Biyd とは「白さ：輝かしさ」の意味であるから、文字通りの「白月・明月」ということに

なろう。満月の煌々と光る様、白銀のように輝くさまを言ったものである。太陽が黄金色であるのに対して月が白銀、銀色を象徴するが、その典型がこの語であろう。これ以上には光度を上げられないその月「白」のことから由来していよう。さらにこれらの夜は宵闇を、また夜半以降も夜もすがら闇空を輝く月光で照らし、〈明るくする〉からである、とも言われる。

さて「満月」バドゥル Badr のことをもう少し付言しておきたい。バドゥルは厳密には「十四日月」とされる。「十五夜月」になると満杯で後は減ずるばかりであり、それよりもまだ余裕があるイメージを持たれる。バドゥル badr とは「先へと急ぐもの、先んずるもの」の意味であり、満月と太陽の相関をも言っている。天体の巨大な丸い物体、今や月はその大きさにおいても輝きにおいても太陽に対抗する。即ち太陽が西に沈まんとする時、月が遅れまいとして急いで東に昇る。また太陽が東に昇らんとする時、それに先を越されぬようにと急いで西に没する。この追い比べ・競い合いが話題になるほど、月がその大きさにおいても、その顔と相、光輝、威厳と言ったものが太陽に比較対象され得るわけである。また満月を意味するバドゥル Badr は基本語であるだけに、これを基に派生した語をも持つ。基本動詞形にしたバダラ badara とは「月が満ちる、満月になる」の意味を実現する。アブダラ abdara と派生させると、〈夜旅〉と結びついて「(満月の) 月光のもと夜旅を行う」などの意味を派生させるところが面白い。

満月であるバドゥルは、いろいろに喩えられる。文学作品の中から「満月」の事例をいくつか引いてみよう。以下の引用はアル・ハリリー作拙訳『マカーマート』(平凡社東洋文庫1〜3巻)からのものである。文学作品一書のみにも以下のように十三例ある。「満月」が人間に喩えられる場合、想像されるように1) 女性ならば「美女」、「美女の顔^{かんぼせ}」、「麗しく色白な女性」に喩えられる。2) 男性ならば「絶頂期」、「盛んな時期」、「若者」、「指導者、代表者」の意味にもなる。3) 物体ならば丸い円形のものに喩えられる。それぞれの類例を引いてみよう：

1) 「満月」を女性に喩える：

事例1 立ち居振る舞いの優雅さ無かりせば

我が行く先の手綱の向きをすぐにも変えたはず
 その顔^{かんぼせ}に目を遣り覗けば
 照り輝く彼女満月の光放つとも
 我が意向^{むき}と彼女が意向との間に
 例え行き違いのありとせも
 辛きを甘く変えるぞ我の能力^{わざ}
 彼女命^{いのち}ずれば我喜々として随う

(Har. 第23話 拙訳 平凡社版Ⅱ210)

この引用部分はアラブの詩歌のジャンルのうちのイジャーザ(連歌)であり、ここでは老人と若者が交互に謳い競う場面である。「その顔^{かんぼせ}に目を遣り覗けば 照り輝く彼女満月の光放つとも」色白の美女の顔は照り輝くばかりの満月で、そのオーラは月光の如く放射される。

事例2 我はサルージュ出の者 これなるは我が嫁

満月ほどに美しからずとも太陽ほどには
 彼女の性^{かれ}も我が性も両立し難きには非ず
 彼女の修道院^いも我が修道僧^いからは遠からず

我が水遣りも若枝の地^そ逸れること無かりし
されど嗚呼何とそれは五日前のとなりし

(Har. 第40話 平凡社版Ⅲ 133)

この40話は夫婦の性生活を扱っており、類例を見ない内容となっている。「満月ほどに美しからずとも太陽ほどには」と妻のことを叙しているが、興味深いのは「太陽と満月とを比して後者の方がより美しい」と述べている点である。暑熱が支配する乾燥地帯では、昼夜の違いは、その天空への対象も美化の観念化と関連付けられている。

事例3：太守の配下の者達がわしの許に乱入してきて、その召使たちがわしの周りに雲集してきたのである。そして比類なき真珠に値段をつけるよう求め、太守に対して彼女の価値にわし自身の決断を迫ったのじゃ。わしのほうは悲嘆に沈み込み、さながらファラオとその軍勢が海の中に沈み込んだようになってしまっていた。わしは何とか防ぎ手立てをしようとしたが、その申し開き（difaa"）も益は無かった。

隣人に仲介を頼んでみても、彼の仲介は（もともと）無益であった。それどころか隣人は、私を繰り返して拒絶し、逃げ場を探し求めているのを見て取ると、その度にどやしつけ怒りを顕わにし、わしに対して歯を剥き出しにするのであった。それでもわしの魂は（依然として）我が満月の君（badr）との別離を承服し難く、わしの胸（sadr）から我が心の君を引き裂くことなどとてもできはしなかった。

(Har. 第18話 平凡社版Ⅱ 97)

深窓の麗人として育てた娘が、裏切りの友の讒言によって太守に金で強奪されてしまったところである。最愛の娘、深窓で育てた娘を「我が満月の君」と言い表している。引用文中「さながらファラオ……沈み込んだ」とは、エジプトで奴隷状態になっていたヘブライ人をモーゼが救い出し、脱エジプトを果たした際、追ってきたファラオとその軍勢は、海の中道を追跡中、戻って来た水により混乱したまま海の中に沈められたという事故。旧約の記述であるが、『コーラン』の中にも四か所（10:76、26:9、28、40:24）他に記述されている。

2) 「満月」を男に喩える：

アラブの特徴として「満月」バドゥルは、女性ばかりではなく男性に喩えられる。それは月自体がジェンダーを男性形としているアラブの民俗観をも反映したものでもあったろう。男子の名前バドゥルやバドウルディーンにも反映されている。絶頂期、盛んな時期の〈男性〉を表し、活力に満ちた「若者」の意味にも、また集団の中の「指導者、代表者」の意味にもなる。満月は落ち度のない完全な状態、それゆえ知識においても人格においても完璧な、いかに頼りになる人か、心強くする人の換喩となる：

事例4：私には既にこの初老の男がその成熟した木の実（素養、才能）を实らせる以前から、その木の実体（素姓）が分かっていた。彼が誰だか分かった時点で、私は一座の人々に彼の秀でた才能について報せようとしたのだ。だが私が口を開こうとする刹那、彼は己の満月（蘊蓄）を顕わに輝かせ（内なるものを外に表し）たのであった。彼はその折、私の方に目で合図を送ってきて、彼の剣（素姓）をその鞘から私が抜いて明ら

かにすべきでない旨命じてきたのであった。

(Har. 第6話 平凡社版 I 211)

事例5：と申しますのも、「シウラー（シリウス）」と称すべき月が没してしまったとはいえ、今や「シウル（詩）」という月が上ってきたからです。またたとえ（十二宮の）「ナスラ（獅子座）」の満月が欠けて無くなったとしても、「ナスリ（雄弁の）」満月がその光を明るく照らすことになるからなのです、皆さん！」と。

(Har. 第5話 平凡社版 I 174)

事例6：（残された）我々とは言えば、長老の屈強な雄ラクダが慌ただしく立ち去った後、彼との交際が断たれた後、あたかも胸（＝指導者）のいない集まりの如く、或いは満月（badr）が没した夜の如くの（中心が無い）有り様となっていた。

(Har. 第18話 平凡社版 II 107)

事例7：きらめき輝くかんばせを目にすれば世上の人間なれば好まぬはなし。その鉱石はあたかも世の人の心を魅惑して後溶かし去るが如し。それを己が財布に収めし者誰であれ、その威力に助けられ大胆になるが常…、「また煩悩^{わづらい}持ちし者の如何程多くがその攻撃にあいて逃走せられたことか。満月の顔持ちし者の如何程多くがその巨大な額で敵対者を貶めたことか。そこに恨み持ちし者の如何程多くがその憎悪の炎を熾^{おき}の赤熱と化したことか。されどそれを恨みし者もそが秘密^{ひそや}に語りかくれば瞬時に^{たちまち}して己の怒り治まり^{なごや}柔和にならん。

(Har. 第3話 平凡社版 I 131)

「満月の顔持ちし者」、原語 badr は「満月」の連想から人への比喩にさまざまに適用されている。最も多いのは女性に喩えられる「白く輝かしく美しい顔」である。本文の例は一人前の男性に対してであるので「人々の中でひととき目立つ者、即ち指導者、権威者、責任者」の意味である。また少年に対して用いられた場合、「活力と肉体の若々しくみなぎっている者」の義となる。

事例8：さもなければ、アッラーが私の目蓋を腫らしますよう、私の頬を生気のないものとなりますよう、私の（結った）前髪がほどけてしまいますよう、私の歯（の色）が緑（＝黒ずむよう）になりますよう、私の薔薇（＝ほの赤い頬）がバハール草の花のように（黄色く＝青白く）なりますように、私の麝香（のような吐息）が悪臭となりますよう、私の満月（＝美しく輝かしい顔）が残月（のように消え入るのみ）のようになりますように、私の銀（＝顔の白さ）が錆びつきますよう、私の光線（＝顔から発するすがすがしさ）が闇に隠れてしまいますよう、…」と、（そう誓うことができるかね!）。

(Har. 第10話 平凡社版 I 302)

事例9：そうしたある日のナーディー（集会場）でのこと、いつになく人が多く、そして参加者でごった返していた。そうした中、痩せこけた老人が^{かが}屈みこみながら入って来た。擦り切れた衣を纏っていた。老人は魅力的な声調で、明瞭な言葉つきで一同に挨拶を送ってよこした。それから声を張り上げて、「お集まりの満月たちよ、恵み深き大海たちよ！目の正常な者には既に昼なので目にするものは明らかなはず。証言は二人の証人によって成り立つもの。皆さんの前に見えている者をどう見て（＝判断して）いるのです？名指しされたら助けるお積りか、それとも退き^ひ下がるお積りか？」。

(Har. 第42話 平凡社版Ⅲ163)

事例10：教師は（書き終え詠じ終えた）若者に声をかけた、「よく出来たぞよブダイル（小さな満月）よ、この座の組長よ！」。

(Har. 第46話 平凡社版Ⅲ270)

ブダイル mudayr とは満月 badr の指小辞で、愛称や蔑称として用いられる。「小さな満月」の意味であるが、この場合は可愛らしさを表現しており、教師が生徒に呼びかけている。

3) 満月は物にも喩えられる：

また物に喩えられるが、容器に対して用いられる場合、その形の丸いことから我が国の「盆のような月」同様、「皿、鍋・釜の蓋」の意味になる。ここでは満月が「丸いお足」としての事例を三つ挙げておこう。

事例11：だがもし本当のところを言ってくれないと（銀貨はあげないよ）、小銭だけ受け取って辞去してほしいのだが」。すると老婆は、満月そのものの形をし、大きく明るく輝いている銀貨を覗き込んで、是が非でも手に入れたと思ったのであろう、（即座に）答えて言った

(Har. 第7話 平凡社版Ⅰ231)

事例12：おお人を魅きつけ その不純^{まじりけ}の無さと

きらめく輝きで 愛嬌をふりまくものよ！

ああこの上なき 助け手となり

所有すればする程 魅力増すものよ！

そをもって如何程 多くの為政者が

支配地を完璧に 統治せしめたことか。

驕り高ぶりし者の 如何程多くが

それなき故の悲哀を 味わいしことか。

また煩悩^{わづらい}持ちし者の 如何程多くが

その攻撃にあいて 逃走せられたことか。

満月の顔持ちし者の 如何程多くが

その巨大な額^{がく}で 敵対者を貶めたことか。

そこに恨み持ちし者の 如何程多くが

その憎悪^{おき}の炎を 燠の赤熱と化したことか。

(Har. 第3話 平凡社版Ⅰ131)

事例13：「起きなさい、息子よ、お前の幸運が落ちませんよう！逆境が邪魔をしませんよう！さあ連れてゆきなさい、あの満月の顔をして、真珠の肌をしたのを、血筋純粹にして、痛め付けられた体をしたのを、搗かれたり伸ばされたり、閉じ込められたり開放されたり、水を飲まされたかと思うとそれを断たれたり、散々なぶられた後火の中に投げ込まれたのを。さあそれを待ち侘びる恋人のところにも出かけるように急いでスーク（市場）へ連れて行くのだよ」

(Har. 第29話 平凡社版Ⅱ334)

「満月の顔をして」 dhaa l-wajhi l-badriyyi : 満月の顔はここでは「円形のもの」として喩えられ、以下の製造過程の描写からパンのことだと気づかされる。即ちラギーフ raghiif (丸く白い上等なアラビアパン) を喩えて、作られる過程が述べられる。父子の対話が符牒を用いて語られている。父が子にラギーフパンをスークに買いに行くよう命じられている段である。「血筋純粹にして」(al-'aslu an-naqiyyu) とは、材料が混じりけの無い、純粹の小麦粉でできていることを言っている。

3-5-1 「十三夜月」 ibn thalaatha "ashrah

我が国でもお馴染み「後の月」である「十三夜」。その月をアラブでは「十三夜月」イブン・サラサ・アシュラ ibn thalaatha "ashrah とする。その夜の「月の宿」は何処か。月は太陽から東の方へはるか165度ほど離れて宿をとる。この夜、一夜月から十三番目の二十八宿の一つ(牡羊座からならば第十三宿アル・アッワウ「乙女座・吠え立てるもの」al-"Awwaa') がその「月の宿」(manzil) となる。その宿に在って覆っていた顔のヴェールの殆どを外して、白い銀色のまぶしいほどの美しい月面を露わにする。我が国でもさすがに「十三日月」とは言わない。

わが国では「十三夜」といえば、「十五夜」を祝った後の月の、即ち陰暦九月の「十三夜」を指して言われており、その夜の月を愛でた。「のちの月」と言って、ちょうど収穫祭も兼ねて行われた。宮中で「月見の宴」を催したのは十三夜の方であった。また一葉の作品『十三夜』も想起させる。身分違いの身でありながら見染められ妻となつて一子を生む。しかし夫は子ができると冷酷な対応となり堪えかねた妻は「十三夜」の晩、離婚を決意し実家に戻る。しかし、両親に夫とはそうであっても、子を生きる糧として望みがあるはずと説得され、嫁ぎ先に戻る決心をして車屋を頼む。ところがその車夫が、この女の結婚話を聞いて、自暴自棄になっていたかつての秘かな相思相愛の男であった…。

図表3の第二サラス・一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図の方に目を移すと、下から二番目に描かれている。第十三宿は「吠え立てる者」で、吠え立てる者とは狼ないしハイエナのことである。乙女座の頭部にある β 星他の五つ星である。十三夜であるから、天球図においても、黒い輪の輪郭の中のほとんどが月面となって明るい月光を地上に向けて放っている。その月が休む宿、第十三宿は乙女座ブルジュの中に在ってその $\frac{1}{4}$ から $\frac{3}{4}$ にかけて中心の $\frac{1}{4}$ を占める。図の円の大外の第十三宿の象徴図では、宿名同様の「吠え立てる者」が描かれている。今までは半人のようなキメラが描かれていてこそすれ、何らかの形を取り人間との関連を保っていた。この第十三宿に至って、初めて全身が人間を離れる図像表象になった。思惟性、比喩性などのメタファーが一挙に広がることになる。乙女を護る犬と見立てているとも解しえよう。

「十三夜月」に対してはアラブの俚謡では以下のように謳われている：

- | | |
|---------------|-------------------------|
| ① 十三夜月、それは | ibn thalaath "ashrah |
| ② 月まばゆく 輝き | qamarun baahir |
| ③ 彼を見る者 盲にされる | yu' shii la-hu l-naazir |
| | (baahir と naazir とが押韻) |

Mas は③を「見る者の目は盲にされる」yu' shaa "aynu n-naazir としており、押韻も配慮された同義のものとなっている。Qal では la-hu (彼に対して) が欠如。

アラブ世界の「十三夜月」については、このころの月はバーヒル「まぶしい程の輝き」と言われ

る。その原語 baahir は第三サラースの名称 Buhr (輝月) と同語根語である。この語は美とか善とかにおいて「並ぶものがない」の謂であり、ここでは、〈月の明るさ〉がそれ以上にならないほどのまぶしい輝きを見せる。新月から始まり、この十三夜まで続く月の位相の中で、これほどの明るさ、輝かしさは無かったからである。あまりのまぶしい輝かしさゆえに、ちょうど余りの美人を見ると直視できないようなまばゆさを感じずるものだが、それと同じ程にまぐしさを感じさせる。また太陽程に輝きを増し、見上げて直視し続ける者を盲にする程に強烈であるという訳である。明るい「月光」が人体に悪影響を与えることは前稿で触れておいたが、「見る者を盲にする」というのも、アラブの乾燥地帯の月が如何に輝かしいものであるか、その強烈さを引き立てた表現と言えて、昼めくらに対して「月めくら」のことを如実に語っている。

アラブの中にはまた、月の満ち欠けの中で、もっとも美しいのは「十五夜」では無く、「十三夜」の方だと考える人々がある。〈満ちている〉状態より、そうなる直前が「もっとも均整が取れ平衡した」istawaa 姿が観察できるとして、「十三夜」の別名をサワーウ al-sawaa' (均整に取れたもの) と命名して日常の指標としているのである、と (Mas II 190)。

3-5-2 「十四夜月」 ibn arba" a "ashrah

「十四夜月」イブン・アルバア・アシュラ ibn arba" a "ashrah。その夜の「月の宿」は何処か。月は太陽から正反対近くの東の空175度ほど離れて宿をとる。この夜、一夜月から十四番目の二十八宿の一つ (牡羊座からならば第十四宿アル・シマーク「乙女座・差し出す掌 スピカ」) がその「月の宿」(manzil) となる。その宿に在って東の果てから、覆っていた顔のヴェールをほぼ脱いだ輝かしい顔をみせる、太陽が西に没するのと先を競う (badara) 様に。十四宿目であるから、二十八宿の丁度半ばに当たり、後半部とも重ねられる。

アラブでは、満月がバドウルと言いわせるとき、上に述べたように厳密には「十五夜」ではなく、この「十四夜月」の方だと考える向きも多い。名称自体「先んずる、先を争う」から由来する。文学表現においても、十三夜月でも触れたように、白肌の美人の顔によく例えられる。「満月の如く」が「十四夜月の如く」と記されているのも、『千一夜物語』などでご存知であろう。この両者を比定すると、十五夜は既に月は満ちており、伸びしろは無くただ欠けてゆく、劣ろえてゆくだけなのに対して、十四夜月の方はまだ満ちておらず、伸びしろや勢いがある、これから満ちて最高点に達するということになる。

図表3の第二スプウの一か月の $\frac{1}{4}$ 天球図を見ると、真下に描かれている。「第十四夜月」、それに宿を提供するのは「月の第十四宿」。その宿名はあのスピカ、アラビア名「差し出す掌 al-Simaak」で、乙女が何も持たずに掌を、黄道を越えた南側に伸ばしている一つ星である。天球図では黒い月の輪の輪郭の中の殆どが月面となる第十四月の勢いある様を見せている。その月が休む宿、第十四宿シマーク「差し出す掌」は乙女座の中に在ってその $\frac{5}{7}$ から $\frac{7}{7}$ にかけての締めくくりの $\frac{3}{7}$ を占める。天球図の円の大外の第十四宿の象徴図では、半人半魚のキメラ像で、上半身は第十一宿のそれに似て、若い男性が両手を前に掌を上になっている。下半身は第六宿に似て、それよりも魚の形になっている。天球の反対にあるラキープ (守護星、対星) をみると、魚座の中にある。この関与が反映されてもいよう。

十四夜月が以下の俚謡のように伝わっているが、その中で「十四夜月」は「若さ未だ劣えを知ら

ず」と述べられている。この原文 muqtabal al-shabaab とは「若さを再び始めるもの」というのが直義であり、この表現は人生の後半、折り返し点を迎えた人に対して、またクラフ(後半月夜)の新たな出発を予祝する、この「若さ未だ劣えを知らず」の言い回しは、人生においても後半に入り、まだ老いのかけらも見られない場合、またお世辞としても用いられるものである。月に関して、この表現が使用されているということは、十五夜ではなく十四夜が一か月において既に頂点に達して、「満月」観として後半の折り返しを迎える意識がアラブには働いていることを暗示していて面白い。「二十八」周期と見立てるならば、この表現が当たっていよう。そして十四夜月の明るく輝かしい様は、「雲の重なるひだをも照らす」と表現しており、言い得て妙である。殆んど満月とも言い得る十四夜月の強烈な光線は、雲に遮られたとしても、余程の黒く厚い雲でもない限り、その雲を透かし、その雲の重なりをも、襲となっている部分の様すらも明らかにすることを言っているのである。雲を透かす、雲の重なり、襲などは、「木漏れ月」に関しては第1節末を参照。

十四夜月について、アラブには次のような俚謡が記されている：

- | | | | |
|-----|--------------|-----|-----------------------------|
| ① | 十四夜月 | それは | ibn arba" a "ashrah |
| ②-1 | 未だ若さ劣えを知らず | | muqtabalu sh-shabaabi |
| ②-2 | 若さに向かって突き進み | | muqbilu sh-shabaabi |
| ③-1 | 雲の重なるひだをも照らす | | udiy' madhiyyaata s-sahaabi |
| ③-2 | 雲の影たちも照らし出す | | mudiy'u s-sahaabi |
| ③-3 | 雲間のあいだ照らす | | udiy'u bayna s-sahaabi |
- (shabaabi と sahaabi とが韻を踏んでいる)

シジスターニーの②-1に対して、Qal では②-2になっており、また③-1に対して、③-2と記し、そこでは能動分詞形としている。また③-3は Mas の方であり、前置詞 bayna を挟んでいる。

さて月はこの第十四宿をもって双子宮から外れてゆくことになる。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮) $\frac{7}{8}$ とその細分であるマンジル(宿) $\frac{3}{4}$ の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っていよう。

月が第六宮乙女座・処女宮のブルジュ(塔)に在る間、即ち第十二マンジル(宿)の $\frac{1}{4}$ 及び第十三マンジル、第十四マンジルのすべて(いずれも $\frac{3}{4}$)に宿る間の指針・吉凶・運勢は、吉の宮とされ多くが大吉か小吉の間にある：

月 処女宮にある時
 書くこと教えることに適する
 書物天文計算表をに目を通すべし
 放血、旅出、建築に良し
 結婚に適する
 新調衣着用すべし

月が第十二マンジルにある時の運勢については第五宮蟹座のところで述べた。次の第十三マンジル(宿)にある時の運勢は：奴隷を購入するに良い、善良で忠実、正直者であろう。新築に良い。

快楽や冗談に興ずるが良い。権力者や有力者、富豪を訪ねるが良い。服地の裁断、整髪、全身浴に良い。服薬に好適。零落した・墮落した女を娶るのも悪くない。処女を娶ると長続きはしない。旅行は帰りが遅くなるであろう。捕虜になった場合は、傷害を負って牢獄生活を送ることになるだろうが、最後には上手く帰還できるであろう。(日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では最後の第二十八番目の「軫」宿に当たり、建築や売買などに共通点が観られる)

月が第十四マンジル(宿)にある時の運勢は:旅行および契約・協約は仲間や相手に恵まれ、特に最初は順調である。奴隷を購入するのに良い、善良で正直、礼儀をわきまえたものとなるであろう。結婚については処女を娶ると長続きはしない。零落した・墮落した女を娶るのも悪くない。捕虜になった場合は、直ぐに脱出できるか解放されるであろう。(東アジア文化圏の二十八宿観では最初の「角」宿に当たっており、「進むに吉」など吉相では似たものが観られる)

3-5-3 「十五夜月」 ibn khamisa "ashrah

「十五夜月」イブン・ハムサ・アシュラ ibn khamisa "ashrah。この夜を境に一月を二分する後半月・黒月 Qulah, al-Layaalii al-Suwd に入る。後半夜の始まりである。また一月を四分する第三スプウに入る。図表1および4を参照。十五夜の月、その夜の「月の宿」は何処か。月は太陽から東の空180度過ぎの真逆にある宿をとる。太陽が西に沈むと、ほぼ時を同じくして東に昇って来る、その宿と共に。この夜、一夜月から十五番目の二十八宿の一つ(牡羊座からならば第十五宿アル・ガフル「乙女座・裾隠れ」al-Ghafr)がその「月の宿」(manzil)となる。既に後半部に入る態勢に入っている。その宿に在って顔のヴェールをすべて取り去り、望月の姿をたつぷりと、ないしは既に少しヴェールを覆った円球からの月光を日没から明け方の夜間を通して夜もすがら地上に披露する。

「十五夜月」はわが国でも満月とか望月とか、「団月」や「月の鑑」などとの別称を持っており、親しまれている。アラブ民族でも「十五夜月」イブン・ハムサ・アシュラと言うよりは、バドル (Badr)、即ち「満月」として親しまれている。3-5第五サラス全体のところで述べたように、原語 Badr は「満月」の連想から人への比喩にさまざまに適用されている。上の「十三~十五夜月」のバドルで、最も多いのは女性に喩えられる「白く輝かしく美しい顔」である。男性に例えられる場合、一人前の男性に対しての場合「人々の中でひととき目立つ者、即ち指導者、権威者、責任者」の喩えとされる。また少年に対して用いられた場合、「活力と肉体の若々しくみなぎっている者」の比喩に用いられる。また人間の属性として人体の一部として「顔、眼」、さらに人以外では物に対して用いられる場合その形の丸いことから「銀貨、金貨」、「皿、鍋・釜の蓋、丸パン」の意味になる。

図表4第三スプウの一月月4天球図に目をやれば真下に描かれている。「第十五夜月」満月、それに宿を提供するのは「月の第十五宿」。その宿名は「裾隠れ足」で、乙女の裾に仄かに見え隠れする三つ星である。天球図では「第十五夜月」が「第十四夜月」に対してその満月の様は少し欠けた部分を見せてはいるが絶頂期のままに黒い月の輪郭の中に明るさと勢いある月面が溢れるほどに見せている。そしてその月が休む宿、第十五宿ガフル「裾隠れ足」は宿上では既に乙女座の中に無く、天秤座の中にあると想定され、その1/4から3/4にかけてとされる。天球図の円の太外の第十五宿の象徴図では、乙女座の残像を引きずってか、乙女姿で、長いヴェールで頭部から背上を覆い、座って足を隠す「裾隠れ姿」で、宿名「裾隠れ足 al-Ghafr」を表しているかの如くである。

アラブ世界の「十五夜月」について、伝えられる俚謡では以下のようなようである:



図表4 一か月天球図 第三スブウ(第十五夜~第二十一夜とその宿)

図表3の一か月天球図の第二スブウに続き、第三スブウ(第十五夜~第二十一夜)についての部分拡大図。月の位相は円周の180度から270度に至る。満月から下弦の月に至るまでである。毎夜の宿を提供するのも、黄道十二宮の三ブルジュ(天秤座、蠍座、射手座)であり、それを細分する「月の二十八宿」の宿マンジルのうち第十五夜~第二十一夜の宿である。ブルジュのそれぞれの星図像も西洋のものとは異なっている。

- ① 十五夜月、それは
- ② 月満ちて完成する
- ③ 日々が使い果たされる

ibn khamisa "ashrah

tamma al-timaamu

nafidati al-ayyaamu

(末語 timaamu と ayyaamu とが同韻)

すべての資料に記録されたした「十五夜月」に関する俚謡は全く同じである。「満月」はイムティラーウ imtilaa' とも言い、「月満つる、月陰影を満たす」意味であり、同じ概念から、ここではティマーム「timaam = 満月 badr」という語が、タンマ「tamma 完全となる」と共に同語根語で構成されている。「完成月」、「完月」であってまさにわが国の「望月」の語感のイメージと重なり。また「使い果たされる」とは蓄えていたもの、隠していたものをすべて出しきって、後に何も残らないことを言う。即ち、その姿を黒いマントでスッポリ包んでいた月がそのマントを右肩から次第に脱いでゆき、この十五夜においてそのマントを取り去り、全身を曝け出す(=使い果たされる)ことが想定されているわけである。時にはこの十五夜から欠ける月となる場合もある。従ってこの後の月は、闇の黒マントに少しずつ右肩から身を包んでゆく、あるいは只に日の経過とともに身をすり減らし、減じて行くのみとなる。

3-6 「第六サラーズ」第十六~十八夜月

ドゥラウ Dura" (夜半月)、ヌカル Nuqal (減月)

十五日以降月末までが後半月(qurah, nisf al-shahr al-aakhar)になる。ここで改めて「後半月」全体のことを述べておこう。もっとも大まかには一か月(360度)を二つに分ける前半月と後半月(いずれも180度)とに分けらる。新月から満月に至るまでの十五日間、即ち上半月間(rajat, nisf

al-shahr al-awwal)。これに対して、それ以降の十六日から月末までが「後半月」(qurah, nisf al-shahr al-aakhar)にあたる。満月から新月に至る後半の月のことであるが、これらを総称して我が国では「下弦の月」と称することがある。「下弦の月」は、厳密には二十一日夜の半月のことをいうのであるが、上弦とは逆に遅い月が東に昇って来る頃から夜半まで、その弓に張られる弦が下を向いているから、この名称で呼ばれる。他にも「一か月後半の月」を意味する語に、「白月」に対しての「黒月」がある。満月後は日をおって月の輝かしさ、即ち月本体や月光の白さ・輝かしさの部分が衰えを見せ、光度が劣って行くことが反映されているためであろう。この後半月・黒月はアラブではクラフ Qulah 又はラヤーリー・スード al-Rayaalii al-Suud と言っており、前者は家畜の「頭黒尻白」の毛色であり、後者は「黒き夜々」の意味であることは既に述べた。

さてアラブの伝統では、その後半月(181~360度)もサラース「三夜月ごと」に五分割(各36度)に分けて、日にちの目安とした。後半夜の最初の第六サラース「十六夜月~十八夜月」のことは、わが国の「十六夜、立ち待ち、居待ち」と言われているが、観月の風習もあつてか、いずれも月の昇る時間帯を指標としている。アラブの方では二種の言い方を持ち、ドウラウ dura" とヌカル nuqal である。ドウラウ dura" との意味合いは「後半夜を照らすもの、夜半月、夜半の月」である。満月後の月は太陽が没して完全に闇が支配する刻限に出現する、いわば「黒月」となる。後半月夜は順次、月の出が次第に遅くなり、宵、早晩、深夜と暗闇が多くなる。その代りに月の出が遅くなるほど、後半夜は月光で明るい。まさにドウラウとは「夜半の月」となる。夜が明けた後にも残月が見られることになる。ドウラウ dura" の用語は、クラフ(後半月夜)同様元来は動物の毛色を指して言われた。動物の体毛色の感覚が先行している。即ち、羊やヤギなどに多く見られるが、「白・黒」を主毛色とする動物のうち、体の先端、即ち頭部・頸部が黒く、後ろの胸・胴体以下の大半が白い、「黒頭白体」の個体を指す用語である。この原義の色の感覚を時空の「夜間」全体にあてはめ、月のある時間帯を「白」、まだ昇らぬ頃か沈んでしまった後かの月の無い闇を「黒」と設定しての流用なのである。他にも動物体毛色のこの類比は多様に観られ、既に述べたように「八夜月」はアドヒヤーン adhiyaan と呼ばれている。これについても「白・黒」を主毛色とする動物のうち、白色の方が多くを占めるもの、これを adhaa とか adhiyaan といったわけである。なおカルカシャンディーではドウルウ dur" と読ませている。

Mas では第二サラース「四~六日月」のところで述べたが、彼はその三夜をサマル samar に当て、「十六夜月~十八夜月」の第六サラースの方にはヌカル(nuqal 減月)を当てている。「移行、すり減り」などが原義である。十五夜以降、月は後半に向かって「移行」し、また月の面体や輝かしさの光度が「すり減る」故の命名なのであろう。ヌカルのことは第二サラースの用語ヌファル(nufal)のところでもその関連を記しておいた。

3-6-1 「十六夜月」Ibn sitta "ashrah

「十六夜月」イブン・シッタ・アシュラ Ibn sitta "ashrah。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮(burj)である黄道十二宮の一つ(例えば牡羊座)とは東に200度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、十五番目に続く(牡羊座からならば第十六宿アル・ズバーナー「蠍座 蠍の鉗」al-Zubaanaa)がその「月の宿」(manzil)である。即ち太陽が西に沈んでから、しばらく経って「いざよい」ながら東に昇ってくることになる。

わが国では日没後、少し間をおいてから昇ってくるので、躊躇するように、ためらうように「いぎよって出て来る」如くと喩えられることから「^{いぎよ}十六夜の月」と言われている。

図表4の一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図第三スプウには下から二番目に描かれている。「第十六夜月」いわゆるわが国の、日没後いぎよって出て来る「いぎよの月」、それに宿を提供するのは「月の第十六宿」。その宿名は「サソリの銚」で、蠍の最も前方にある銚となっている天秤座の α 、 β 星の二つ星である。天球図ではいよいよ盈から衰・虚に移り、「第十六夜月」は黒い丸の中に左側をいくらか欠く月面を見せている。そしてその月が休む宿、第十六宿ズバーナー「サソリの銚」は宿上では、まださそり座の中に無く、天秤座の中心にあると想定され、その $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{2}$ にかけてとされる。天球図の円の大外の第十六宿の象徴図では、少年と思しきやせ細った人物の立ち姿であって、両手を両横に広げた様は、蠍の銚を真似たとも、天秤棒を両手で支えているとも捉えられよう。また以下の俚謡に謳われているように、「被造物＝月はやせ細る。西においても東においても」の人物とその仕草を表わしたもののか。

シジスターニー他は「十六夜月」を神の「被造物 khalq」の一つとして換喩して、アラブの俚謡を次のように伝える：

- | | | |
|-----|--------------|------------------------|
| ① | 十六夜月、それは | Ibn sitta "ashrah |
| ②－1 | 被造物（＝月）はやせ細る | naqasa al-khalq |
| ②－2 | | naaqisu l-khalq |
| ③ | 西においても東においても | fi-l-gharbi wa-l-sharq |
- (khalq と sharq とが韻を踏んでいる)

Qal ではシジスターニーと全く同じ。Mas では②－2と、動詞を能動分詞形にしているが意味は変わらない。

アラブ世界では、「十六夜月」は日没から少し遅れて、出現する。ヴェールを少し覆うため歪^{いびつ}な満月、月面が満ちた状態から僅かであるが欠けて減少する形となる。アラビア語ではこのように「減少する、やせ細る」ことをナカサ naqasa^{ナカサ}と言ひ表わす。ナカサとは、本来完全であるもの、満杯であるものがくずれる、欠ける、流出・減少することを言う。それも大きくずれというのではなく、その完ぺきさがいくらか損ずること、崩される、流されることを指して言う。イスラム期以降、ベドウィンの間でも月信仰に代わって、さらにその月をも凌駕して、それを創造したものとして唯一神が位置付けられる。月は神によって人間や他の被造物に対して一日や一か月や歳月を知らせ、光明となるものとして位置づけられる。神が創造したものとして理解されるようになり、月信仰は唯一神に従属する形で信仰は維持された。②に謳われているように、神の創造物 khalq の一つとして「月」が位置付けられる。あるいは抽象的には一か月の後半は「盈衰の衰」、即ち満月が欠けてゆき、光明が減じてゆくので、勢いが衰える。「やせ細る」ことになる。月の後半を「黒月」という東アジアの習慣とも共通しよう。「西においても東においても」は、アラブ諸国の西、即ちマグレブ諸国から見ても、またアラブ諸国の東側マシュリクから見ても、それは変わらず、月の場合「楕円」に近くなるため、歪^{いびつ}になる。このような月面とそれを見上げる地域の人々を言っている。

3－6－2 「十七夜月」 Ibn sab" a "ashrah

「十七夜月」イブン・サブア・アシュラ Ibn sab" a "ashrah. その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、

太陽の宮 (burj) である黄道十二宮の一つ (例えば牡羊座を基点とすると) とは東に210度過ぎにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、十六番目に続く (牡羊座からならば) 第十七宿アル・イクリール蠍座 蠍の冠・頭「al-Ikiliil」がその「月の宿」(manzil) である。即ち太陽が西に沈んでから、大分経って東に昇ってくることになる。わが国では日没後、大分過ぎてから、立って待っている間に昇ってくる。小一時間立って待っていれば出て来るので、「立ち待ち月」と言われている。

図表4の第三スブウの一月 $\frac{1}{4}$ 天球図を見ると下から三番目に描かれている。「第十七夜月」、わが国の「立ち待ち月」、それに宿を提供するのは「月の第十七宿」。その宿名は「サソリの王冠 (= 頭部)」で、蠍の頭部の β 星の並び三つ星ないし六つ星である。天球図では「第十七夜月」が満月から黒いヴェールで端が隠され多少の明るさを減じ、レモンのような歪な丸形の月面を見せている。そしてその月が休む宿、第十七宿イクリール「サソリの王冠」は宿上では、ブルジュ (宮) が跨がることになり、天秤座の中の最後の $\frac{1}{4}$ からさそり座の最初の $\frac{1}{4}$ にかけての $\frac{1}{4}$ とされる。天球図の円の大外の第十七宿の象徴図では、王冠を頂く座像人物で第一宿と同一と思われるが、両手を王冠にあてている。何やら、後半月を仕切るため気を入れ直して、冠に威儀を正している風である。宿名「サソリの王冠」を誇示して両手でそれを差し示しているか。

アラブ世界では、シジスターニーは「十七夜月」に関するアラブの俚謡を次のように伝える：

- | | | |
|-----|--|-------------------------------|
| ① | 十七夜月、それは | Ibn sab" a "ashrah |
| ②-1 | 貧しいひとの窮状を救う日 | amkanta l-muftaqira l-faqrah |
| ②-2 | 貧しいひと 窮状より救出 | rakiba l-faqiiru l-faqrah |
| ②-3 | 荒 ^{すさ} んだ人の荒 ^{すさび} 涼を救う日 | amkannti l-muqtafira l-qafrah |
- (“ashrah、faqrah、qafrah と韻を踏んでいる)

この言い伝えの文体で注目されるのは、「十～夜月」の脚韻語となる “ashrah (数詞 十) は、十日夜以降マトウラウ (序、枕詞) としてのみ用いられていた。「十」および「十一」の二例のみ脚韻語として採り入れられていたが、それ以外の「十～夜月」ではそれを韻として取り込むことはなく枕詞として記されていた。しかしこの「十七夜」になってそれ以降初めてサジュウ (押韻) の技法を生かした一句として取り入れられた。

十七夜月、この日には、わが国の十三夜や十五夜のようにアラブ社会には催事があったのであろう。②の内容から十七日は施しをする習慣があったことが分る。アラブ社会に在っては、祭事は同時に施しをも行う習慣があったから祭事が存在したとも解釈もできる。イスラムがなすべき行為と定めている「喜捨」であるザカート dhakaat や「自由意思での喜捨」であるサダカ sadaqah。この五行の一つも、それ以前の砂漠のアラブのこうした美風がイスラムの教えの中に取り入れられたものであった。アラブの気風である「寛大さ」「気前の良さ」と「助け合い精神」とは遊牧民の倫理観の一つでもあった。十七夜月はサダカ月、サダカの日、サダカの夜、こんな共通理解があったのであろう。

②-2の Mas の原文の直訳は「貧しいひと 窮状 (の馬) に乗る」となっている。rakiba (動物の背に乗る) には〈救難〉〈脱出〉との意味が内包されているものと思われる。②-3は Qal の方の記述。文意は大差ない。

月の巡りが第十五マンジルに入ってから二宿を経てブルジュ (宮) である天秤座を過ぎてゆく。

さて第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるもの

は如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮)とその細分であるマンジル(宿)の間に多少の食い違いがあるのは、この種には付き物である。

第七宮天秤座・天秤宮のブルジュ(塔) 7/8に在る間、即ち第十五マンジル(宿)、第十六マンジルすべて即ち、それぞれ3/4と、第十七マンジルの1/4に宿る間の指針・吉凶・運勢はどうであろうか。

結婚と旅行には適する

女性探し、高貴な召使探しにも向いている

新調着を下ろし、娯楽に興ずる時期である

しかし、約束事をするには不向きである

月が第十五マンジル(宿)にある時の運勢は：家の移転、新築、改築する好機。善意や喜捨を行うのに良い。売買にも向く。奴隷を売るには良いが、家畜を売るのは良くない。というのも天秤座・天秤宮は〈人間〉を計る尺度となるからである。旅行は水陸とも避けるべきである。結婚は仲睦まじい間は長続きせず、短期で終わる。契約・協約は不一致と欺瞞が生まれよう。金銭を貸すと戻ってくることは無い。整髪は避ける。(日本を含めた中国を中心とする東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では、二番目の「亢」宿に当たり、結婚には吉であり、建築や移転それに旅行には凶とあり運勢もまた異なる)

月が第十六マンジル(宿)にある時の運勢は：奴隷を購入するのに良い、善良で忠実、正直なものとなるであろう。結婚は親和関係において長続きはしない。契約・協約は信頼関係が失われ、お互いに疑惑が生じよう。捕虜になった場合は、牢獄生活から早い時期に解放されるであろう、神がお望みになるならば。(東アジア文化圏の二十八宿観では、三番目の「氏」宿に当たり、婚礼は吉とされるなど別な運勢判断を持つ)

月が第十七マンジル(宿)にある時の運勢は：新築に良し、堅固で耐震性あるものとなろう。諍いや口論を仲裁するのに良い。愛を育むのも良い。すでに恋愛中の場合は、固く結ばれ生涯続くことになろう。服薬はすべてに宜しい。旅行は避けた方が良い、当初から不安と哀しみが付き纏うが、無事には帰還するであろう。契約・協約は始まって不調和に終わるであろう。結婚に関しては妻の不純を見出すであろう。奴隷を売るのは差し控えるが良い。整髪もまた良くない。(東アジア文化圏の二十八宿観では第四番目の「房」宿に当たり、多くが大吉に運勢判断されているようである)

3-6-3 「十八夜月」 Ibn thamaaniya "ashrah

「十八夜月」イブン・サマーニヤ・アシュラ Ibn thamaaniya "ashrah. その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宮(burj)である黄道十二宮の一つ(例えば牡羊座が基点)とは東に230度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、十七番目に続く(牡羊座からならば)第十八宿アル・カルブ「蠍座 蠍の心臓 al-Qalb」がその「月の宿」(manzil)である。即ち太陽が西に沈んでから、東に昇ってくるわけだが二時間ほども待たされる。わが国では日没からその昇るのを待っていると、立ち草臥^{くたび}れる。もはや立って待っても居られず、座って腰を落ちつけて迎えることになる。わが国では「居待ち月」と言われている。

図表4第三スプウの一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図ではちょうど真中に描かれている。「第十八夜月」、わが国の「居待ちの月」、それに宿を提供するのは「月の第十八宿」。その宿名は「(サソリの) 心臓」で、蠍の胸の心臓 α 星の前後の三つ星である。月相では「第十八夜月」が黒い輪郭の丸の中の明るさを減じ、 $\frac{1}{3}$ ほどヴェールで覆った月面を見せている。そしてその月が休む宿、第十八宿カルブ「サソリの心臓」はさそり座の中ほど $\frac{3}{4}$ から $\frac{5}{4}$ にかけての中心を占めるマンジル(宿)とされる。天球図の円の大外の第十八宿の象徴図では、若者の座像姿で修行しているのか、安心立命の境地の様子である。「サソリの心臓」部に座を占めており、周囲をサソリに護られているのであろうか。

「十八夜月」についてアラブ世界では、シジスターニーは以下のような俚謡を記している：

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| ① 十八夜月、それは | Ibn thamaaniya "ashrah |
| ② 残留 ^{のこ} ること少なく、 | qaliilu al- baqaa' |
| ③ 消滅 ^{なく} すること速し | sarii" u l-fanaa' |
- (baqaa' と fanaa' とが韻を踏んでいる)

「居待ち月」の出待ち主眼のわが国に対してアラブではあくまでも月面の形状を捉えた言い回しになっている。このころの月の形状は、ヴェールが覆われるのが明らかになって、もはや円形を保つことができず、急速に丸い膨らみを崩して、半円に近づく。その月の形を捉えたもの。したがって満月の膨らみが「残留すること」叶わず、丸味を「消滅すること速し」、失われるのが急速に感じられることになる。

実生活においても月に得る給料は、一か月の後半になると、我々同様アラブもまた、人間の懐具合も、月面と同様に「残ること少なく、消滅すること速し」と、さもしい気分になり、月末までの算段もしなければならない。Mas も Qal の記述も全く変わるところがない。

3-7 「第七サラース」第十九～二十一夜月

ズラム Zulam (暗月)、ブハム Buham (闇月)

「十九夜月～二十一夜月」は、大まかには一か月(360度)を二つの前半月と後半月(いずれも180度)とに分けらるうち、後半月(qarah, nisf al-shahr al-aakhar)、満月から新月に至る後半の月に属する。アラブの伝統では、その後半月(181～360度)もサラース「三夜月ごと」に五分割(各36度)に分けて、日にちの目安とした。第七サラースは後半夜の第二の「三夜月」に当たる。月の宿は、その東に昇る時間帯が夜半以前、二十一夜の下弦の月が昇るまでにある三夜の位置と見做してよい。

第七サラース「十九夜月～二十一夜月」のことをズラム Zulam (暗月)と言う。下弦の月に入る頃である。ズラム Zulam とは「暗黒、闇」を意味する。月が出ていても光度が落ちる。また月の出が遅れて次第に夜半に近づく。日没以降それまでが月光もない暗黒の世界となる。宵から早晩にかけての活動期には〈闇〉が支配している。その「闇夜の三日間」をズラムと言い当てている。逆に夜旅も夜間のこの頃合いを見計らって出かけることも多いが、もっと一般的には、砂漠の遊牧民の敵対部族へのガズワ(襲撃)にはこの時期が選ばれることが多かった。闇に乗じて出撃し敵陣まで迫る。不案内な略奪品や動産である家畜の在り場所を突き止め算段して、月の出を待って行動が迅速にできる時点でガズワを敢行するのである。人を殺めると同害報復されるので、相手所有の略奪品やマール(動産)であるラクダなどの家畜に集中して掠め取るのである。ズラムの時期のガズ

ワについては、Musil pp.38～39などに記述があるので参照されたい。

Masはこの三夜月をブハム Buham (闇月)としている。ブハムは〈月〉との関連でいうと、「夜更けまで闇、真黒である」がその意味である。下弦の月は夜半近くに昇って来る。それまでは月明かりがなく闇である状態を言う。しかしこのブハム buham も実は、生活に欠かせない家畜の個体識別に用いられている用語から応用されたものである。家畜の体毛色の中で、体全体が同一色で覆われている個体、特に「黒毛」の個体はブハム buham とか、バヒーム bahiim とか呼ばれるわけである。

Qalではフフム Fuhm およびドゥフム Duhm としている。いずれも色彩関連語を用語としたもので、いずれも「黒」であるからやや不審が残る。フフム Fuhm は「炭月」とでも訳せようか。ファフム fahm 「木炭、石炭」から派生しており、その色の「黒」を月に当て嵌めたものである。一方ドゥフム Duhm の方も色彩名称「黒」 duhmah から由来しており、「黒月」の意味となろう。しかし「黒」と称するには月の輝きがはまだ明るすぎる。何よりも「黒」 duhmah から派生しているダフマウ Dahmaa' は「二十九夜」の用語とされており、意味的にもこちらのほうが相応しかろう。

3-7-1 「十九夜月」 Ibn tis" a "ashrah

「十九夜月」イブン・ティスア・アシュラ Ibn tis" a "ashrah。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (burj) の定まった一つ (例えば牡羊座) とは東に240度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、十八番目に続く (牡羊座からならば) 第十九宿アル・シャウラ「蠍座 蠍の刺し針 al-Shawlah」がその「月の宿」(manzil) である。即ち太陽が西に沈んでから、まだ闇の天空には居らず、十八夜月の「居待ち月」よりさらに遅い時間帯、そろそろ寢床に着く頃、東に昇ってくることになる。

図表4の第三スブウの一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図では左上から三つ目に描かれている。「第十九夜月」、わが国では日没後大分経ち、寝て待っている頃やがて出て来る「寝て待ち月、寝待ち月」、それに宿を提供するのは「月の第十九宿」。その宿名は「サソリの尾・針」で、蠍の逆立つ尾またはその先の針、入星を中心とした二つ星ないし七つ星である。月相では「第十九夜月」が黒い輪郭の丸の中の明るさをさらに減じた月面を見せている。そしてその月が休む宿、第十九宿シャウラ「サソリの尾・針」は宿上では、ブルジュを跨っており、さそり座の $\frac{1}{4}$ から射手座の $\frac{1}{4}$ にかけてとされる。天球図の円の大外の第十九宿の象徴図では、祖先のバビロニアの「サソリ人間」を思わせるキメラ像である。半人半獣か。人物の方は右手を上げ左手を下げる第二、五、六、九、十二宿像同様である。下半身はサソリか、尻の先端を刺すように下げている。しかし足は鳥を思わせる。

アラブのこの「十九夜月」の頃を言い当てた俚謡が以下のようにある。先ほどのわが国の「十六^{いぎ}夜、居^{よい}待ち、立待ち、寝待ち月」の月待ちの様子に、アラブの言い回しは似ている。待つのは月の出があまりに遅いので、座って待ってももはやいられない。横になって気長に待つしかない。今か今かと月の出を待つ身にはじれったくしょうがない。「十八夜月」ではなく、「十九夜月」にそれを当てはめているわけであるから、アラブの方がこの意味でも〈気長〉といえようか。この「十九夜月」に至って月が動作主となって、「控えめ、謙遜、恥じらい」と捕えている。

このような月見の心境のアラブ世界、シジスターニーは「十九夜月」のアラブの俚謡を次のように伝える：

- | | | |
|-----|-----------------------------|--------------------|
| ① | 十九夜月、それは | Ibn tis" a "ashrah |
| ② | 姿見せるが遅きこと遅きこと | batiy'u t-tuluu" |
| ③-1 | その控えめ振りの目立つこと | bayyinu l-khashuu" |
| ③-2 | その謙遜振りがなせるわざ | mina l-khashuu" |
| ③-3 | その恥じらい振りに急 ^き くこと | sarii"u l-khushuu" |

(tuluu" と khashuu"、khushuu" とが韻を踏んでいる)

トゥルーウ *tuluu*" は、ここでは「姿見せる」と訳しておいたが、本来は「出現」特に太陽や月、星などの天体が東に「昇る」用語として頻用される。人間の側から見るのではなく、月を主体として擬人化している。ハシューウ *khashuu*" とは、恐がる、恐れる、恥じ入って、のろのろしている、動きの遅い、さらに躊躇^{ためら}い、渋々していること、である。人間でいえば「控えめな、謙遜している」と見られることになる。③は三者三様であり、③-2は Mas、③-3は Qal で、*khushuu*" も同義である。

さて月はこの第八ブルジュを十九夜の宿を最後として過ぎてゆく。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ（宮） $\frac{7}{4}$ とその細分であるマンジル（宿） $\frac{3}{4}$ ずつの間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っていよう。この種のものには付き物である。

第八宮星座サソリ座・天蠍宮のブルジュ（塔）に在る間、即ち第十七マンジル（宿）の $\frac{3}{4}$ 、第十八マンジルすべてと、第十九マンジルの $\frac{3}{4}$ に宿る間の指針・吉凶・運勢はどうであろうか。

月が天蠍宮に宿る時、薬の服用には好適である

戦闘には良い時期で、敵に対しては謀略を巡らせなさい

家に留まること。旅行は控えること

新調衣類の着用の控えること

月が第十七マンジル（宿）にある時の運勢については、第七ブルジュのところで述べた。次の第十八マンジル（宿）にある時の運勢は：新築に良い、堅固なものとなろう。植栽に良い。服薬も勧められる。結婚に関しては、このマンジルの中で月と火星が合であれば、新婚妻は処女では無いことになる。船旅は無事船から戻れるであろう。契約・協約はお互いに不調に終わることになる。奴隷を売り払うのには向かない。新調衣を着始めること、爪切りは差し控えること。（日本を含む中国を中心とした東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では、第五番目の「心」宿に当たり、旅行に吉で、結婚や建築・普請などは凶と出る運勢判断がされている）

月が第十九マンジル（宿）にある時の運勢は：結婚する場合は、新妻は処女ではないことが判明するであろう。旅行は差し控える、船旅では難破することになろう。契約・協約は不調に終わろう。奴隷を売り払うことは避ける。捕虜になった場合は、最悪の事態に陥る。（東アジア文化圏の二十八宿観では、第六番目「尾」宿に当たり、訴訟は先制して勝としている点、婚礼や旅行に吉などという相反する運勢判断がなされている）

3-7-2 「二十日夜月」 Ibn "ishriin

「二十日夜月」イブン・イシュリーン Ibn "ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮（burj）の定まった一つ（例えば牡羊座）とは東に255度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、十九番目に続く（牡羊座からならば）第二十宿アル・ナアーイム「射手座（水場の）駝鳥たち al-Na"aa'im」がその「月の宿」（manzil）である。即ち太陽が西に沈んでから、深夜近く東に昇ってくることになる。

アラブ世界では、数詞で「二十」はイシュリーン "ishriin、「二十日夜月」は Ibn "ishriin「二十の息子」と言っている。二十以上の数詞の体系もまた変わり、二十一以上は「一と二十」と言うような接続語表示となる。「二十日夜月」以降も数詞同様、新たな段階に入る。一か月の「旬日」において、中旬 Qamar（大月）も終わり、次夜から下旬 Qumayr（小月）に入ることになる。一か月の $\frac{2}{3}$ が終わり、残りが $\frac{1}{3}$ になったことを示す指標とされている。

図表4第三スプウの一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図では左上から二番目に描かれている。「第二十夜月」、それは日没後ずっと遅く、真夜中に近くその姿を顕す。それに宿を提供するのは「月の第二十宿」。その宿名は「駝鳥たち」で、その位置は射手座の南斗六星も関わる二つの「斗」を形成する射手座の主星たち八つ星ないし九つ星である。月相図では「第二十夜月」が月の黒い丸の輪郭の中の明るさの半分近くを減じた月面を見せている。満月の膨らみもすでに半分近くに減じており、下弦の月に近づき、上って来る刻限も深夜に近い。そしてその月が休む宿、第二十宿ナアーイム「駝鳥たち」は宿上では、射手座の $\frac{2}{3}$ から $\frac{1}{3}$ にかけての中心に位置する。天球図の円の大外の第十七宿の象徴図では、その宿名の通り「駝鳥」が描かれている。しかし「駝鳥たち」であるためか、この一羽の駝鳥、足が四本あり、胸にも何やら足状のものが伸びている。これは首であって頭が下に伸びて欄外に出たものか。駝鳥や鳥類にも慣じみのアラブが一羽の鳥に脚四本を描くわけではなく、二羽の駝鳥が描かれていると採りたい。想像をたくましくできる画像である。動物のみを描いたものとしては、第十三宿の「狼」以来である。

アラブ世界では、「二十夜月」の俚謡伝承をシジスターニーは次のように伝える。サハルは「深夜から夜明け前」までの長い時間帯であり、ブクラは「早朝」の時間帯である：

- | | | |
|-----|------------|----------------------|
| ① | 二十夜月、それは | Ibn "ishriin |
| ② | サハルの刻に昇り | aṭlu" u bi-s-saḥarah |
| ③-1 | 太陽の輝きも見 | wa-araa bi-l-bahrah |
| ③-2 | ブクラもまた見る | wa-araa bukraḥ |
| ③-3 | ブクラの刻には姿隠す | wa-yaghiibu bukraḥ |

（saḥarah と bahrah、bukrah とが韻を踏んでいる）

Mas では③-2のように「ブクラもまた見る」wa-araa bukraḥ となっている。ブクラ bukraḥ は「早朝」の意味で、昼の時間帯に入る用語である。エジプト方言で、ボクラは「明日、あした」の意味である。tomorrow も to the morning から由来しており、「朝」はこれから来るもの、「夕」はこれから去るもの、との概念は多くの民族では共通しているようだ。わが国でも「朝」は「あした」と読ませる場合もある。

「二十夜月」、その出現は深夜近くになるところから、それが西に没する頃には太陽が昇っており、従がって朝方には残月となって西空にある。このようであるから、上の俚謡に謳われるように、東の空が明るくなって太陽が昇るブクラの頃、残月となって昼間の天空に残り「陽の輝きも見」こ

とになる。③-3のようにすぐに日光の強烈さに輝きを失って霞んでしまい「ブクラの刻には姿隠す」、陽光で存在しても消されてしまう。とはいえ、問題は「サハルの刻に昇り」である。夜の時刻を示す「サハル」*saḥar* が述べられていることである。サハルは厳密には「夜明け前」を指す刻限のこと。サハルはここでは原語 *saḥarah* になっており、韻の関係でこの女性形接尾辞 -ah を採ったが、元の語は *saḥar* である。サハルは狭義にはファジュル (*fajr* 夜明け) と境を分け合って、その前の時刻「夜明け前」を表す。しかしサハルが「夜明け前」の刻としてしまうと、「下弦の月」の前でもあるし、二十夜月の出現の刻限があまりに遅くなってしまう。星宿で言うと、二十六夜月か二十七夜月の刻限になってしまう。

サハルが表す時間帯は、狭義には、と言うより焦点的には上に述べた「夜明け前」である。しかしもっと広くは、夜明けを遅い限度として夜半頃から始まる長い時間帯「後半夜」も表していることである。上で「狭義には、と言うより焦点的には」と述べたのであるが、ムスリムの最大の関心事を一例に挙げよう。ラマダーン（断食月）の断食とも関連しており、また風物誌の一つにもなっているが、これがサハルと関連しているのである。ラマダーン月の毎日、昼間の食事不可となるファジュル（夜明け）。飲食の絶たれる断食の一日に備えて、ファジュルの前に、食事をしておかないとその後の昼の活動に差し支える。ファジュルの前の時間帯がサハルである。従ってファジュルを迎える前、サハルの時間帯になると街路にお触れが回って来るのだ。「今のうちに食事を取っておきなさい、そうでないと一日食べ損ないますよ」と深夜触れ回るムサッハル (*musahhar*、*musahharaatii*) の存在が興味深い。ムサッハルは、ファジュルの時間帯直前に触れて回るのではない。食事の仕度と会食があるので、それよりもはるかに早い、深夜の時間帯に触れ回ってくるのが、すでに習慣となっているところが多い。それから分かるようにサハルの夜間の時間帯の範囲は随分と広い。ここでも広くとられて解釈されねばならない。日常時間と祭事時間とのずれがこんなところにも見られているわけである。

「陽の輝き」と訳した③-1のバフラ *bahrah* であるが、「同類のものより一層優れている、一等抜きん出ている」ことを原義にもっている。したがってここでは、その出現ないし輝きによって、他の同類のものの輝きを失なわしめる〈日光・日射し〉を言っている。バフラは太陽の出現ないし輝きは星明かりのみか「二十夜月」の月光をも消え失せさせる。月の出現ないし輝きは、他の星々の星明りや輝星の瞬きすらもその光度を失わしめるのに、その月すらもと言うわけである。そうした天体の関係した「輝き」をバフラと言っている。

3-7-3 「二十一夜月」 *Ibn iḥdaa wa- "ishriin*

「二十一夜月」イブン・イフダー・ワ・イシュリーーン *Ibn iḥdaa wa- "ishriin*。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (*burj*) の定まった一つ（例えば牡羊座）とは東に270度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、二十番目に続く（牡羊座からならば）第二十一宿アル・バルダ（「射手座 空き地、囲い *al-Baldah*」）がその「月の宿」 (*manzil*) である。即ち太陽が西に沈んでから、深夜、まさに真夜中に東に昇ってくることになる。

図表4第三スプウの一月 $\frac{1}{4}$ 天球図では左の一番上に描かれている。「二十一夜月」は下弦の月。その出現は夜半となりその目安となる。それに宿を提供するのは「月の第二十一宿」。その宿名は「空き地・囲い地」で、その位置は射手座の射手のターバンの翻る π 他の小さな星々。月相図では「第

二十一夜月」が黒い丸の輪郭の中の明るさの丁度半分近くを占めた月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十一宿バルダ「空地・囲い地」は宿上では、射手座の $\frac{5}{7}$ から $\frac{7}{7}$ にかけてとされる。天球図の円の大外の第二十一夜月の象徴図では、身分ある人物の〈囲われた〉頭部が描かれる。女性を思わせ、その頭上には大きな王冠か、笠を頂きその御簾が顔を〈囲う〉ように降りている風。第十宿図との関連を匂わせる。また下弦の月の節目の重要性を強調しているとも指摘できよう。

いよいよ「下弦の月」である。一か月を四分したスブウのうち、第三スブウの最終宿としての一か月の節目となる。月面もちょうど半月の形で、しかもその出現は深夜の「夜半」の刻限の「報せ月」となる。シジスターニーは「二十一夜月」のアラブの俚謡を次のように伝える：

- | | |
|----------------|------------------------|
| ① 二十一夜月、それは | Ibn ihdaa wa- "ishriin |
| ② 松明の輝きのよう | ka-l-qabas |
| ③ 夜明け前の暗きうちに昇る | atlu"u fii ghalas |
- (qabas と ghalas とが韻を踏んでいる)

「松明 qabas」は「燠、燃え差し」がより正確な意味で、月光の色も輝かしい白や白銀の色から、光度を落とすため、赤みがかって見えてくる。恰も「松明の輝きのよう」に。その昇ってくる時間帯がガラス ghalas で表される。ガラスとは夜間の刻限の用語で、夜が支配する最後の刻限とされる。さらには夜明けの入り混じった闇、暗黒、夜の白みかけた頃とも言われている。ガラス ghalas から派生した同族語にタグリース taghliis がある。このガラスの頃合いを見計らって旅に出立して昼旅に繋げてゆくことを言う。早朝としてももっと深夜に近い早い時刻であり、「昼旅」とも訳されるのがタグリース taghliis である。時と旅の相関を伝えていよう。この用語も目安とされている。拙著『砂漠の文化』第7章「昼旅の出発＝夜旅の再出発」を参照。また遊牧でも熱いうちは、ガラスの頃には牧地に導いていったものであり、これも「夜間放牧」の一つタグリースと言われた。

Mas では次に述べる「二十二夜月」の言い回しをこの「二十一夜月」の方に充てている。そして上の「二十一夜月」の言い回しを「二十三夜月」の方に回している。「夜半」に上る「二十一夜月」のことを考慮すれば、ガラスの時間帯から考えあわせても、後者の方がより妥当性は高いと思うが。Qal の方では Sij とほぼ同じであるが、③の atlu"u の箇所が yaṭlu"u と一人称(=主体)から三人称(客体)に代わっている。

さて月は第九宮をその下位分類である第二十一宿を最後として通過してゆく。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮) $\frac{7}{7}$ とその細分であるマンジル(宿) $\frac{3}{7}$ の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っている。この種のものには付き物である。

月が第九宮星座、射手座・人馬宮のブルジュ(塔)に在る間、即ち第十九マンジル(宿)の $\frac{1}{3}$ 、第二十、第二十一マンジルすべて(即ち $\frac{3}{7}$ ずつ)とに宿る間の指針・吉凶・運勢は：

- 相談事は法官や学者に頼るのが良い
- 奴隷購入に良い時期
- 結婚するのも日柄が良い
- 風呂に通いなさい



図表5 一か月天球図 第四スブウ（第二十二夜～第二十八夜とその宿）

図表4の一か月天球図の第三スブウに続き、第四スブウ（第二十二夜～第二十八夜）についての拡大図。月の位相は円周の271度から360度に至る。下弦の月から新月に至るまでである。毎夜の「月の宿」マンジルを提供するのも、黄道十二宮の三ブルジュ（山羊座、水瓶座、魚座）であり、それを細分する「月の二十八宿」のうち第二十二宿～第二十八宿である。

但し薬の服用は差し控えるべし

さもないと苦勞で体を弱体化してしまうことになるう

月が第一九マンジルにある時の運勢については第八宮の方で述べた。次の第二十マンジル（宿）にある時の運勢は：家畜・動物を買い入れるには良い。契約・協約はお互いに欺瞞が含まれていよう。捕虜になった場合は、良い期待はできない。（日本を含む中国を中心とした東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では第七番目の「箕」宿に当たり、物品の購入、集金には吉と、類似した運勢判断がなされている場合もある）

月が第二十一マンジル（宿）にある時の運勢は：結婚に関しては、離婚された女、あるいは未亡人は再婚は不可能となろう。奴隷を購入するのに良いとも悪いとも言えない、奴隷は自己中心的で、主人に対して従順とは言えないからである。（東アジア文化圏の二十八宿観では第八番目の「斗」宿に当たり、同様に余り良い運勢判断がされていない）

3-8 「第八サラース」第二十二～二十四夜月

ハナーディス Hanaadis（出の遅き月）、サーフル Saahuur（寝ずの番月）

第八サラース、二十二夜月～二十四夜月はハナーディス Hanaadis（出の遅き月）とかサーフル Saahuur（寝ずの番月）と呼ばれる。一か月（360度）を二つに分けるラジャル（前半月）とクラフ（後半月）との後半夜、それを五分割した三番目、真ん中に当たるのが第八サラースである。また一か月を四分したスブウにおいては最後の第四スブウ al-Subu" al-Raabi" がこの二十二夜月から始まる。第八サラースは厳密には252度から36度を加えた範囲がその領域になる。下弦の月以降の「出の遅き夜半の月」なのである。「二十二夜月～二十四夜月」、その中心は二十三夜。我が国でも「二十三夜講」とか「二十三夜塔」などの関連した行事が行われたものであった。アラブ世界も二十三夜をヒンディス hindis（動き鈍きもの、遅きもの）と言う。その複数形がハナーディス Hanaadis であ

って「二十二～二十四夜」の「三夜月」の用語となっている。今までの〈三夜月〉ずつの名称は、多くは /CuCaC/ の語形 (C は子音) かそれに近い形態で統一されていた。しかしこの第八サラース「二十二夜月～二十四夜月」の用語ハナーディス以降は、これらの用語の定型は採らない。ハナーディス Hanaadis とは「出の遅き月」を意味しており、hindis もその複数の hanaadis も広義には「行動の鈍さ、遅さ」の意味が主体である。月の場合下弦の月以降は、月の出がさらに遅くなり夜半過ぎが目安となる。月光の輝きも次第に鈍くなる。月だけではなく人間にしても同じで、月の出以前は前半夜であるから、まだ宵や早晩が延長されている。夜なべ仕事や夜勤、夜旅する者、夜間放牧を行う者などに精を出す者にとっては、未だ眠りにつくわけにもいかないが、かといって行動を縛り妨げる暗闇が支配し、何かをしようと行動を起こそうにも暗くて儘にならず、「行動の鈍さ、遅さ」に繋がってしまう。ハナーディス Hanaadis はこうした「二十二夜月～二十四夜月」に特化する用語となったわけである。

このハナーディス(出の遅き月)であるが、ほかに単数形ヒンディスには「闇夜、真つ暗な(夜)」の意味として、もっと一般的な語としても用いられる。「彼らは夜のヒンディス(真つ暗闇)の中、旅を敢行した」*saruu fii hindisi l-layl* と言うような用いられ方をする。恐らく昼間や夕方の旅出が夜になっても引き続き敢行されて、前半夜の闇夜に難儀をしながら旅をしている様を言っていよう。

Mas は今までのサラース用語では、別の語彙を扱ってきたが、ここでは同じハナーディス Hanaadis としている。但し、ハナーディスは「〈三〉夜月」とはせず、そのサラース二つ分の「〈六〉夜月」としている。即ち「三夜ごと」の単位を二つ分取って、次の「二十五夜月～二十七夜月」をも含みこんだ用語だとしている。

もう一つの第八サラース「二十二夜月～二十四夜月」の用語はサーフール *Saahuur* (寝ずの番月)と言われる。この語はサハル (*sahar* 不眠、目覚めていること、寝ずの番をすること) から派生した名詞形であり、わが国の「二十三夜講」にも通じて、その晩は眠ることをしないことであり、この三夜のうちのいずれかを神への賛美、ジンや悪霊の祟りの回避をするため念行をしたり、さらには有り合わせの食べ物も持参して一堂に会して世間話や情報交換をして、その晩の月の出を待ちながら寝ずの番をする。そうして過ごす風習があったのであろう。凶日の厄払いの意味合いがあったとも思われる。サーフールは狭義には第八サラース「二十二夜月～二十四夜月」を指示するが、広義には〈月末〉を反映しており「(陰暦の)月末から数えて九夜目、最後の九日間」とされている。対象は〈夜〉であり、〈月〉は直接には言及されない。しかし「前半月夜」とは異なる「後半月夜」の民俗概念の反映が窺えようし、上の「深夜まで、明け方まで眠らずにいる」ことの意義付けが関与していよう。その中には睡眠を怠惰と採る修道、修行的な敬虔者や職能者の介在も見て取れよう。サーフールの同族語にムサーハラ *musaaharah* があり、一晚中眠ることのない夜空の星たちと競い合うように「不眠をお互いに競うこと、眠ったら負け競争」の意味だが、こうしたことも「夜の文化」の諸相を開示してくれる。

3-8-1 「二十二夜月」 *Ibn ithnatayn wa- "ishriin*

「二十二夜月」イブン・イスナタイン・ワ・イシュリーン *Ibn ithnatayn wa- "ishriin*。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (*burj*) の定まった一つ (例えば牡羊座) とは東に 290度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、二十一番目に続く (牡羊座からならば) 第

二十二宿サアド・アル・ザービフ「山羊座 屠殺者の幸運 Sa"d al-Dhaabih」がその「月の宿」(manzil)である。即ち山羊座の α 、 β 星の作る宿に月は落ち着く。

図表5の一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図第四スブウの画像では左最下に、円であるので反対にして描かれている。第二十二夜月は、下弦の月から一夜経った月となる。その出現は夜半過ぎであり、この頃の夜は前半までは月の無い闇が領する。その遅い出の月に宿を提供するのは「月の第二十二宿」。その宿名は「屠殺者の幸運」で、その位置はやぎ座の頭部の主星たちで三つ星か四つ星の位置取りである。天球図では「第二十二夜月」が黒い丸の中の明るさの半分以上に減じた月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十二宿サアド・ザービフ「屠殺者の幸運」は宿上では、山羊座の $\frac{1}{4}$ から $\frac{3}{4}$ にかけてとされる。天球図の円の太外の第二十二夜月の象徴図では、羊を屠殺する幸運は自分の方だとばかり、二人の若者がヤンチャ振りを発揮してとっ組み合いの喧嘩をしている様。一人が首を絞め相手は膝蹴りを見舞っている様子。この宿は縁起の良い、吉兆を表すはずである。天空の反対側のラキーブ（守護星、対星）となる双子座の双子との関連も匂わせる。

下弦の月からしても二日目、半月の形も急速に崩れてくる。しかもその出現も深夜過ぎ、遅すぎて夜なべや夜勤には頼りにならなくなる。アラブ世界では、「第二十二夜月」の俚謡をシジスターニーは次のように伝える：

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| ① 第二十二夜月、それは | Ibn ithnatayn wa- "ishriin |
| ② 夜旅は長引かせましょう | uṭīlu s-suraa |
| ③ 私（月）が見る限りでは無けれど | illaa raythamaa araa |
- (suraa と araa とが韻を踏んでいる)

月が旅人に語り掛ける。夜旅は続けて長旅となることは、刻苦勉励になり立派で、良いことこの上ないですよ、但し私が出るのは深夜遅くですから、見守って上げることは深夜以降であって、それ以前は「私の見る限りではありませんけど」。その時も旅を続けられていたら弱くなってしまいましたけれども、わたしの光を投げ掛けてあげますよ。夜旅をそこまで続けていられるならば、その後は私が明かりを送って進めましょう、と。

俚謡の中で先の下弦の月、二十一夜月が「松明の輝きのよう」ka-l-qabas と叙されていた。下弦の月以降の月は更に光度を落とし、さらにはそれより月の出は小一時間遅くなる。「私（月）が見る限りでは無けれど」と言っているが、すでに光度が弱くなって来て、月明かりを頼りとするには当てにはなりませんけど、とのニュアンスも含意されているのであろう。

al-Mas" uudii では押韻も異なる全く別な俚謡を伝えている：

- | | |
|--------------|----------------------------|
| ① 第二十二夜月、それは | Ibn ithnatayn wa- "ishriin |
| ② 薪のせめぎ合い | musfi" u khaṭab |
| ③ 攻め合いのライオン | wa-laythu ḥarb |
- (khaṭab と ḥarb とが韻を踏んでいる)

ここでの②および③は、〈白月〉期であった月光の光度が強かった白色から、〈黒月〉となって弱い光線の赤色の変化、それを「薪のせめぎ合い」に喩えているのであろう。或いは第二十二夜月の月の出までの夜暗をそれぞれが薪の明かりで処すことを「薪のせめぎ合い」と言っているのであろうか。また「攻め合いのライオン」とは夜半過ぎに活動する野獣たちの活発さを言っている。特にライオンなどは第二十二夜月の月明かりぐらいでは何事も恐れることはない。狼やハイエナなどの他の

野獣などには目もくれず、雄同士の権力闘争の「攻め合い」を行っている。

3-8-2 「二十三夜月」 Ibn thalaath wa- "ishriin

「二十三夜月」イブン・サラース・ワ・イシュリーーン Ibn thalaath wa- "ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮(burj)の定まった一つ(例えば牡羊座)とは東に300度辺りにある。黄道二十八宿の、二十二番目に続く(牡羊座からならば)第二十三宿サアド・アル・ブラウ「水瓶座 大呑の幸運」がその「月の宿」(manzil)である。即ち水瓶座の西端のε星を中心とした二つ星ないし三つ星の宿の中にある。

「二十三夜月」と言えば、わが国でも先にも述べた通り「二十三夜講」や「二十三夜塔」でお馴染みであるが、深夜遅く昇って来る月を待ちながら講を催す習慣があった。

図表5第四スプウの一か月¼天球図では下から二番目に描かれている。第二十三夜には、わが国でも第二十三夜講などの行事が行われる二十三夜月が出る。その出現は夜半過ぎ、およそ丑三つ時であり、その出を待つまで、講を開いて語り合う。アラブでは、その遅い出の月に宿を提供するのは「月の第二十三宿」。その宿名は「大呑の幸運 Sa"d al-Bula"」で、その位置はすでに水瓶座のε星の縦に並ぶ二つ星か三つ星の位置取りである。月球図では「第二十三夜月」が黒い丸の輪郭の中の顔の輝かしさ明るさの半分以下に減じたヴェールで覆われた細面の月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十三宿サアド・ブラウ「大呑の幸運」は宮上では、山羊座の¾から¾にかけてとされる。天球図の円の大外の第二十三夜月の象徴図では、半人半魚のキメラである。第十四宿の図像と殆ど同じである。こちらはやぎ座の図像であるから星座図でよく見かける下半身が魚と化したことと関連があるか。

アラブ世界では、資料によってそれぞれ異なり、内容及び韻も異なる。マスウーディーでは、すでに述べた通り「二十一夜月」の言い回しをこの「二十三夜月」の方に当てている。シジスターニー、カルカシャンディーの順に述べてみよう。シジスターニーは「二十三夜月」のアラブの俚謡を次のように伝える：

- | | |
|------------------|------------------------|
| ① 二十三夜月、それは | thalaath wa- "ishriin |
| ② 灰色時に昇る、かといって | atlu" u fii qatamah |
| ③ 暗闇を明かるくするほどで無し | wa-laa ajlaa z-zalamah |
- (qatamah と zalamah とが韻を踏んでいる)

「灰色時」の原語カタマ qatamah。カタマとは時を表す語ではなく、色を表す語なのである。「灰色、ほこり色」のことで、白と黒の入り混じった色のこと。空が闇から少し明るみを帯びてきたことを言う。月の出が夜間の完全な黒闇から少し白けて来た黒だけでない白の入り混じった夜空を言い表そうとしているのであろう。

カルカシャンディーでは以下の様になっている：

- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| ① 二十三夜月、(その月の夜) | ibn thalaathin wa- "ishriin |
| ② 夜の闇多くなるのを見る | yuraa fii zulmah l-layaa |
| ③ 満月でも無く三日月でも無し | laa qamarun wa-laa hilaal |
- (layaal と hilaal とが脚韻を踏んでいる)

下弦の時より月の出は更に遅れ、夜半過ぎまで闇の空、救われるのはその後の星月夜。明るい満

月 (qamar) の夜空も期待できず、また後半夜の三日月 (hilaal) はこれから。これからだとて、黒月の三日月の光線は、勢いがなく弱々しい。それすらも期待はできない。

3-8-3 「二十四夜月」 Ibn arba" wa- "ishriin

「二十四夜月」イブン・アルバウ・ワ・イシュリーーン Ibn arba" wa- "ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (burj) の定まった一つ (例えば牡羊座ならば) とは東に310度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、二十三番目に続く (牡羊座からならば) 第二十四宿サアド・アル・スウード「山羊座 幸運中の幸運 Sa"d al-Su"uud」がその「月の宿」(manzil) である。即ち水瓶座β星を中心として作る宿に月は身を休めて、地上を眺めやる。

図表5第四スプウの一月¼天球図では下から三番目に描かれている。第二十四夜には、夜も更け深夜のもっとも深いところに二十四夜月が弱々しく出る。その遅い出の月の宿を提供するのは「月の第二十四宿」。その宿名は「幸運中の幸運」で、その位置は水瓶座のβ星を中心とする二つ星ないし三つ星の位置取りである。月の位相図では「二十四夜月」が黒い丸の中の明るさの多くを失い弱い光となった細面の月相を見せている。そしてその月が休む宿、第二十四宿サアド・スウード「幸運中の幸運」は宿上では、ブルジュを跨ぎ山羊座の¾から水瓶座の¾にかけてとされる。天球図の円の大外の第二十四夜月の象徴図では、王冠を頂いた高貴な人物の座像となっている。この図像は第一宿のそれと殆ど同一である。宿名のサアド・スウード「幸運中の幸運」は二十八星宿の中では最も幸福であり、また地上にも慈雨などの幸運をもたす。こうした最高の満ち足りた雰囲気象徴しているのであろうか。

アラブ世界では、シジスターニーは「二十四夜月」のアラブの俚謡を次のように伝える：

- | | |
|-------------|--------------------|
| ① 二十四夜月、それは | Ibn arba" "ishriin |
| ② 満期が近づき | danaa l-ajalu |
| ③ 望み絶たれる | inqata" a l-amalu |
- (ajalu と amalu とが韻を踏んでいる)

②の ajalu とは「定められた期間」の原義から「満期」、「返済期」「死期」などの意味も持つ。月相に関して言えば二十四夜月、そろそろ月末 (=満期) を迎える。また実生活においても月ごとの契約や約束事が、このころまでに果たされるか、見通しがついていないと、その履行や実行も怪しくなる。「望み持つ」のもこの頃が目途か。約束の履行は、ワファールウ wafaa' といって、アラブ遊牧民にとっては、大事な徳義の一つである。それ故これを破ることになるのでこの頃から算段をして対処をせねばならない。

al-Mas" uudii では、この「二十四夜月」の言い回しを「二十六夜月」に持って行っている。そしてすぐ上の「二十三夜月」の言い回しを、この「二十四夜月」方に当てている。但しその場合も②の atlu" u fii qatamah の qatamah が qismah (部分、割り当て) となっている。qismah 自体には「一部」としての関与はあるにせよ、〈夜〉も〈時間〉の意味主体となるわけではない。この方が月末観を漂よわせていて、より相応しいように思える。

Qal は「二十四夜月」の記載が欠如しているのはどうしたことか。上の Sij の俚謡を次の「二十五夜月」の方にもっていつている。

さてこの二十三夜月をもってヤギ座のブルジュを月は通り過ぎることになる。第十二宮および

二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ（宮） $\frac{7}{8}$ とその細分であるマンジル（宿） $\frac{3}{4}$ の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っている。この種のものには付き物である。

月が第十宮星座ヤギ座・磨羯宮のブルジュ（塔）に在る間、即ち第二十二マンジル（宿）、第二十三マンジルすべて（各 $\frac{3}{4}$ ）と、第二十四マンジルの $\frac{1}{4}$ に宿る間の指針・吉凶・運勢は：

磨羯宮に月が宿る時、饗宴を開くに良い

土^{いじ}弄り、灌溉掘削に適する

余裕あれば奴隷や家畜の購入に良い時期

知識、教養の研鑽に努めるべし、無知振りを晒し出してはならない

月が第二十二マンジル（宿）にある時の運勢は：契約・協約を結ぶに最適、有益さと利益がもたらされよう。船旅の船出も良い、但し帰り船には問題を含む。結婚に関しては、婚約したものは破談になろう、結婚しても半年ほどで死亡することになろう。もしそれ以上生存しても関係が陰悪で夫婦仲は酷いものとなろう。奴隷を購入するのは避けるべきである、怠惰で性悪で主人に従わず逃亡の恐れあり。捕虜になった場合は、すぐに開放になり自由となろう。（日本を含む中国を中心とする東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では第九番目の「牛」宿に当たり、多くが吉との運勢判断がされている）

月が第二十三マンジル（宿）にある時の運勢は：契約・協約を結ぶのには良い。結婚に関しては、避けるべきで、新婦は邪険で一緒に住むことをしないでであろう。船旅は、短期間ならば勧められる。奴隷を購入するのに不向き。捕虜になった場合は、直ぐに釈放されるであろう。（東アジア文化圏の二十八宿観では第十番目の「女」宿に当たり、婚礼や訴訟などに逆な運勢判断が見られる）

月が第二十四マンジル（宿）にある時の運勢は：奴隷を購入するのに良い、頑強で善良で忠実なものとなるであろう。契約・協約は不向きであり、結んでも最終的には大損と不仲に結果することになろう。旅行は向かず、船旅は避けるべきである。結婚に関しては、長続きすることは無い。捕虜になった場合は、多くは釈放される。（東アジア文化圏では第十一番目の「虚」宿に当たり、契約や縁談などには悪日など共通の判断がされているところもある）

3-9 「第九サラース」第二十五～二十七夜月

ヌハス Nuḥas（悩み月）、ダアーディー Da' aadii（急^せかれ月）

第四スブウ（四半月）の二番目は第九サラース。「二十五夜月～二十七夜月」に相当し、それはヌハスとかダアーディーとかの用語を持つ。サラースとしては一か月（360度）のクラフ（後半月の180度以降）ないし後半夜を構成し、それを五分割した四番目に当たる。およそ320度から350度の間がその領域になる。深夜も終わりに近づき、明け方が近い。この頃はあまり縁起が良くない刻限とされている。

「二十五夜月～二十七夜月」はヌハス（Nuḥas 悩み月）またはダアーディー（Da' aadii 急^せかれ月）と呼ばれる。ヌハス（Nuḥas）についてであるが、その同族語のナフス nahs の方でよく知られている。サアド（sa'd 吉、幸運）の反意語であって、「不運、凶」の意味でお馴染みである。『クルアー

ン』54章19節の中にもアード族滅亡の厄日の七夜八日を「打ち続く不運な日に」fi yawmin nahsin mustamirrin と記されている。

ヌハス(Nuhas)はその同族語であるから、「困りごと、苦痛、悩みごと」などがその具象を表す「月末(に近い)三夜」の意味である。月光が殆どないため、月明かりを頼りにしての夜間活動があまり期待できない。火急のこと、強いてせねばならないことがあって、それをするには月の不在がまらず困りごとになり、苦痛となる。そうした時をついていないなと見做して「凶」と「不運」とあきらめて敢えて行わなければならない。一方では二十五夜という月末が迫り借金や債務に対しての「苦悩」が日に日に増すことにもなる。さらに敵対部族や野盗の襲撃もある可能性が最も高く、危険性がある三日間なのである。

なおこの時制用語ヌハス(Nuhas)をさらに後ろにもってゆき、月末に当たる第十サラースである「二十八夜月～三十夜月」とする説もある。内容からしても妥当していよう。

第九サラース「二十五夜月～二十七夜月」のもう一つの用語はダアーディーDa' aadiiであり、厳密にはダアーディウDa' aadi' uがそれである。これも複数形であり、単数形はダウダーウda'daa'。「二十五夜月～二十七夜月」の意味合いになった、については二様に理由づけられる。有力なのは、暁語であるから、この場合擬態語で急ぐ様、駆ける様を言う。ダウダウと「早く走る、急ぐ」ことが原義であり、〈ラクダ〉の走行歩態を指示している語にもなっている。動作主が〈月〉に転用された場合、夜空に東から昇るのが遅すぎて、日の出がすぐに迫っている、そのため月自体は急いで昇ろうとするし、太陽の方では早く夜空に昇るよう急かすのである。「早く走る、急ぐ」ことによる命名である、とする。

他の説はダアーディーDa' aadiiの語根動詞ダウダウda'da'には「覆い隠す」意味であり、月光の威力が弱まって闇の暗黒の方が強まって、〈月〉を「覆い隠す」からであるとする。後者としてもっと有力説は月を「覆い隠す」のは太陽である、とする。太陽が昇った後となつては、その老残の身を青空の中に晒されることになる。それどころではない強く鋭い陽光によって「覆い隠され」てしまう。残月の身も、陽射しの光線によって存在自体が拭き消され、「覆い隠される」のである。二十五夜以降残月のやや太めの一つがダウダーウであり、それより遅れて細くなった残月、これが二十六夜月であり、さらに月の出が遅れて太陽に急かされるのが二十七夜月と言うことになる。いずれも月の出を急がされ、少しでもその月面を夜空に維持したいと急かされていることになる。ダウダウda'da'と擬声語を掛けられ「隠すもの、所＝西の地平線」に下って行こうとして「早く走る、急ぐ」ともされる。さもないと後ろから来る強烈な太陽光線によって吹き消されてしまう。

al-Mas" uadiiは前項で述べたように、ハナーディスHanaadis(出の遅き月)として「二十二夜月～二十四夜月」に続けて「二十五夜月～二十七夜月」を合わせた「六日月」としている。またHammuurはここで述べたダアーディーDa' aadiiを次の最後である第十サラースの「二十八夜月～三十夜月」であるとして、「二十五夜月～二十七夜月」の方はミハークMihaaqとしている。一般にはミハークMihaaqは第十サラース「二十八夜月～三十夜月」として受け入れられているので、次項に説明をしよう。

3-9-1 「二十五夜月」Ibn khams wa- "ishriin

「二十五夜月」イブン・ハムス・ワ・イシュリーーンIbn khams wa- "ishriin。その夜の「月の宿」は

何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (burj) (例えば牡羊座からならば) とは東に320度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、二十四番目に続く(牡羊座からならば)第二十五宿サアド・アル・アフビッヤ「水瓶座 天幕の幸運 Sa"d al-Akhbiyyah」がその「月の宿」(manzil)である。即ち水瓶座の α を中心とした四つ星ないし五つ星の作る宿に月は細めの身を休めて、弱い視線で地上を眺めやる。

図表5第四スプウの一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図では丁度真中に描かれている。第二十五夜、その夜には、深夜でも最も遅い時間帯に二十五夜月が弱々しく顔を覗かせる。その遅い出の月を待ち構えて宿を提供するのは「月の第二十五宿」。月の位相図では「第二十五夜月」が黒い丸輪隔の中の明るさが逆の三日月の形となり、その弱い光となった細面の月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十五宿サアド・アフビッヤ「天幕の幸運」は宿上では、水瓶座の $\frac{3}{4}$ から $\frac{5}{4}$ にかけての中心を占める。天球図の円の大外の第二十五夜月の宿の象徴図では、うら若き女性の両手を両脇に据えた座像である。ひときわ目立つのは、頭上から肩先に長く垂れる被衣状の覆いである。宿名が「天幕の幸運」とあるので、あるいは天幕を象ったものか。

「二十五夜月」に関しては、シジスターニーの資料には空白になっており、サジユウでの俚謡も従って伝わっていない。ここではマスウーディーの方で述べておく。そこには以下のように記されている：

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| ① 二十五夜月、それは | Ibn khams wa- "ishriin |
| ② 折り返しの夜々の中にあり | Anaa fii tilka l-layaalii |
| ③ 丸い月でもなければ三日月でもない | Laa qamarin wa-laa hilaalii |
- (layaalii と hilaalii < hilaalin が脚韻を踏む)

ここでは月面の相が叙される。「二十五夜月」と言えば、半月がさらに凹み、逆向きの三日月に近い状態である。それでも③で述べているように「三日月」ヒラールではない、というところにヒラールの二重のコノテーションが窺えて、アラブの日常的機微の観察眼が行き届いている点、興味深い。ヒラールは「三日月」として知られるが、逆向きのヒラールは次の「二十六夜月」辺りからもまた言われるわけである。明け方近く東天に在って、日の出ころにはその光で拭き消されてしまっている。時間帯からして人の目に触れる機会が少ないため、目立たないだけである。ヒラールは「三日月」であると同時に、「新月」も共示していることはすでに述べた。ここで述べたように広義のヒラールは「三日月」であると同時に、月末の三日月、「二十五～七夜月」にも適用されていることになる。カマルがバドウル(満月)と同義であることがここでも適用されている。それと対峙させられるヒラールは「新月」も兼ねた広い用いられ方をする。上に叙されているように、カマル qamar は月全体の総称であると同時に、「十五夜月」「満月」であることはその項で述べた。また旬においては「中旬」の用語ともなっている。この例でもそうであるが、満月を意味しており分かるように、〈月〉型をしていればカマルと言われることが分かる。しかしシンボルとしては、イスラムの象徴でも分かるようにヒラールのほうである。「月と星」という時、「太陽と月」と言う時、そこに描かれる月は「三日月」ヒラールである。旬についてであるが、ヒラールが「上旬」をも意味しているところから、「下旬」はクマイルであって、「上旬」でも「中旬」でもなく「下旬」となっている、との解釈もできよう。

Qal では上述したように、Mas のこの「二十五夜月」の俚謡を多少文言が異なっているが「二十三

夜月」の方に当てている。

「クマイルね 二十五夜月が昇ったのだわ！」 月に向って娘二人が立ち上ってそう囁いたとの2-2で引用したイブン・ラビーアの詩句も想起されたい。

3-9-2 「二十六夜月」 Ibn sittu wa- "ishriin

「二十六夜月」イブン・シット・ワ・イシュリーーン Ibn sittu wa- "ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (burj) (例えば牡羊座) とは東に330度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、二十五番目に続く (牡羊座からならば) 第二十六宿ファルグ・ムカッダム「魚座・ペガサス座 革袋 (水瓶) の前の注ぎ口」al-Fargh al-Muqaddim がその「月の宿」(manzil) である。即ち水瓶座と魚座の境界上にあるペガサス座の四辺形、これをアラブはファルグ (fargh 水用大型革袋) と看立てている。そしてその西側の辺の方を前の注ぎ口 (ペガサス座 $\alpha \cdot \beta$ 星) と看立てている。このファルグ・ムカッダムが作る宿に月は身を休めて、地上を眺めやる。

図表5第四スプウの一月月天球図では上から三番目に描かれる。第二十六夜、その夜には明け方に近くなる、と思われる遅い時間帯に二十六夜月が弱々しく顔を覗かせる。その遅い出の月の宿を提供するのは「月の第二十六宿」。月相図では「第二十六夜月」が黒い丸輪隔の中の明るさは逆の三日月の形を一層狭めて、その弱い光となった細面の月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十六宿ファルグ・ムカッディム「水草袋の前口」は宿上では、水瓶座の%から次の魚座の%にかけてとされる。天球図の円の太外の第二十六夜月の象徴図では、半人半魚のキメラである。上半身は若者が右手に魚らしきものの尾を持ってぶら下げている風である。魚座との関連を匂わすものであろう。あるいは水瓶^{かめ}(=水皮袋)を逆にして中の水を出しきったことを表わすのか。

シジスターニーは「二十六夜月」について次のように記している：

- | | | |
|-----|---------------|--------------------------|
| ① | 二十六夜月、それは | Ibn sittu "ishriin |
| ② | 来たるべきものの近づき、 | danaa maa danaa |
| ③-1 | 織月 輝かしき見えず | wa-laysa yaraa li-sanaa |
| ③-2 | 見えるはただ織月のほの明り | fa-maa yuraa illaa sanaa |
- (danaa と sanaa とは押韻)

②の「来たるべきもの」とは天体の月の形姿ともその月の終わり、月末のことともいずれをも言っている。③の sanaa とは、稲光りや光に反射する剣や槍のそのように細身のキラキラと光る程のきらめき、ないし絹糸などの光沢のある糸などが光を浴びて輝くことを言う。細く薄く三日月の形をした「二十六夜月」ともなれば月自体が逆方の弦を下に向けた「三日月」の形となる。わが国には「糸のように細い月」を「織月」というが、これに当たるものであろう。消滅に向かう方なので光が極端に弱まり、「輝かしさ」が感じられなくなり、「見えるはただの織月のほの明り」と謳われているように、赤くぼんやりした弱い月光であることを言っている。前夜「二十五夜月」の俚謡も参照されたい。

al-Mas" uudii では、すでに述べたことであるが、「二十四夜月」の言い回しをこの「二十六夜月」に持って行っている。上述の② danaa l-ajalu (満期が近づき)、③ inqata" a l-amalu (望み絶たれる) などの内容は、「二十六夜月」の② danaa maa danaa (来たるべきものの近づき) と呼応していて、こちらの方がより相応しかろう。

Qal では③-2の如く、文意は異ならないが韻だけ合わす別な俚謡を持ってきている。

さて月は、第26夜宿をもって第十一宮を通過し終わる。第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮) 7/8とその細分であるマンジル(宿) 3/4の間に多少の相や見方の食い違いがあるのは、この種には付き物である。

月が第十一宮星座水瓶座・宝瓶宮のブルジュ(塔)に在る間、即ち第二十四マンジル(宿)の6/8から、第二十五マンジルすべてと、第二十六マンジルの3/4に宿る間の指針・吉凶・運勢は：

月が宝瓶宮に宿る時、余裕があれば、商品、家具を仕入れなさい

インド人奴隷の購入にも良い

代理人、相談人を探す要あり

出血、狩猟、結婚、旅行は慎むべし

月が第二十五マンジル(宿)にある時の運勢は：奴隷を購入するのに良い、頑強で善良で忠実なものとなるであろう。建築には好適で、耐震性あり、強固なものとなろう。旅行にも良いが多少の遅れは出よう。結婚に関しては、新婦とは合わず長くは続かない。契約・協約を結ぶのにはその時ではない。結んだなら悪く働き被害を蒙ることになる。悪くすれば逃亡奴隷を出すこともある。(日本を含む中国を中心とした東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では、第十二番目「危」宿に当たり、旅行や婚礼などに共通した運勢判断を持つ)

月が第二十六マンジル(宿)にある時の運勢は：建築には好適で、耐震性あり、強固なものとなろう。奴隷を購入するのに良い、頑強で善良で忠実なものとなるであろう。旅行にも良いが、船旅は多少の遅れは出よう。契約・協約を結ぶのには良くない。結婚に関しては、長続きはしない。捕虜になった場合は、長い間牢獄に閉じ込められることになる。 (東アジア文化圏の二十八宿観では第十三番目の「室」宿に当たり、普請に共通点、婚礼には反対の運勢判断が示されているようだ)

3-9-3 「二十七夜月」 Ibn sab" wa- "ishriin

「二十七夜月」イブン・サブウ・ワ・イシュリーーン Ibn sab" wa- "ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮(burj)(例えば牡羊座)とは東に340度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、二十六番目に続く(牡羊座からならば)第二十七宿ファルグ・ムアッハル「魚座・ペガサス座 革袋(水瓶)の後の注ぎ口」al-Fargh al-Mu'akhkharがその「月の宿」(manzil)である。即ちペガサス座の四辺形であるファルグ(fargh 水用大型革袋)の東側の辺の方を後の注ぎ口(ペガサス座γ・アンドロメダ座α星)と看立てている。このファルグ・ムアッハルが作る宿に月はさらに瘦身となって、微かな光を地上に送る。

「二十七夜月」は同じ三日月となりながらも逆向きとなり、アラブでは「死滅^{ほろび}のヒラール(三日月)」とも言われている。十一世紀後半の文人ハマザーニーは「二十七夜月」は「死滅のヒラール」として相手を腐^{くさ}す表現として以下のように記している。これは相手と中傷合戦を行なうムナーファラ munaafarah、あるいは対象をあれこれ腐^{くさ}すマサーウィー-masaawii と呼ばれるアラビア文学の領域に属するものである。：「おお(汝 卑賤なるかな)猿たち馴らす猿回しよ、おお(汝 血筋卑しきは)ユダヤ人のダニ(labuudu al-yahuud アラブは伝統的に「ユダヤ人」は出自、血筋からして akhbath (最

も卑賤な) 民族と看做していたし、それにたかるダニは更に賤しいとされた)、おお(汝 息の臭さたるや) 獅子の口臭か、おお(汝 その存在感^{からつぽ}薄きは) 存在において空虚か、おお(汝 戯れ^{たわむ}好きは) じゃれつき合う犬か、おお(汝 落ち着きの無さは) 絨毯におわす猿か、おお(汝 孤立するは) 豆類に溶け合わせぬ南瓜煮か、おお(汝 その軽薄^{からつけつ}さは) 虚無よりも少なしか、おお(汝 異臭^{わきが}放つは) ナフサ油の煙か、おお(汝 その体臭たるや) 腋臭のそれか! おお(汝 落ちぶれ果てたは) 権力の失墜者か、おお(汝 老いぼれたは) 死滅のヒラール(hilaal ここでは新月に至る前の二十七日月の三日間の三日月)か……。 (Ham『マカーマート』(3) 43話 406)

図表5第四スプー一か月 $\frac{1}{4}$ 天球図では上から二番目に描かれている。第二十七夜、その夜には、明け方に近く夜の最期の遅い時間帯に二十七日月が弱々しく顔を覗かせる。その遅い出の月を迎え入れて宿を提供するのは「月の第二十七宿」である。月の位相図では新月同様の纖月が「第二十七夜月」となって、その弱い光となった細面の月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十七宿ファルグ・ムアッハル「水草袋の後口」は宿上では、魚座の $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{4}$ にかけてとされる。天球図の円の大外の第二十七夜月の象徴図では、同じく半人半鳥のキメラで、既出のいくつかと同様なポーズである。下半身は魚座であるから魚と見做しても良いが、明らかな鳥の足と尾羽を持ち、下半身のその形から鳥と思われる像である。魚のキメラと解すれば魚座の中でもあり、因果関係も考えられようが…。

al-Muzhirの書が伝えるには、シジスターニーは「二十七日月」についての俚謡は次のように記している：

- | | |
|------------------|-------------------|
| ① 二十七日月。それは | Ibn sab" 'ishriin |
| ② ブクラ (早朝) の頃に昇り | atla 'u bukraa |
| ③ ズフル (正午) を見る | wa araa zuhraa |
- (bukraa と zuhraa とは押韻)

俚謡では月面のことには触れていない。月の天球における位置・時刻に言及している。②の箇所、ブクラ (早朝) については「二十夜月」のところですでに述べてあるが、エジプト方言で訛ってボクラ (明日) となった語であるが、原義は「早朝」であり「朝」が「明日」の義にもなる英語の (to) morrow と概念的に通じている。厳密に言えばブクラとは「夜明けと日の出の間の時間帯」である。狭義にはこうであるが、広義には日の出以降であっても「早朝」、「昼の最初の部分」の意味で用いられ、こちらの方が現今での用法である。またここでは「夜明け前」の刻限は明らかなので、ブクラの刻限の範囲の中でも最も早期の段階を指しているのであろう。押韻合わせのためにも。なおブクラの時間概念については、前稿の第3章第1節中の〔図Ⅲ〕を参照されたい。二十七日月のヒラールは、夜明け前の頃太陽に先駆けて昇る。そのため後ろから照りつける太陽のために、ブクラ (早朝、日の出前) のまだ暗さが残る天空に見られるだけになる。形も小さく明るさも弱いため、日の出と共に太陽の明るさにすぐに消されて見えなくなってしまう。「正午 zuhr を見る」というのは、実際我々が見るのではなく、二十七日月がすぐ後ろから来る太陽の正午を見守る、の意味である。なお押韻の関係で bukraa が bukraa に、また zuhr が zuhraa に変形している。

マスウディーでは、先に述べた「二十六夜月」の言い回しをこの「二十七日月」に持って来ている。ただし③ wa-laysa yaraa li-sanaa (纖月 輝かしさ見え) が wa-laysa fii min sanaa (纖月 輝かしさと呼べるに非ず) となっている。

カルカシャンディーの方では、押韻も異なる全く別な伝承を伝えている：

- ① 二十七夜月 それは Ibn sab" "ishriin
 ② やがて太陽を割って迎える yashuqqu sh-shams
 ③ されど何の感興あるわけなし wa-laa yuraa la-hu hass
 (脚語 shams 及び hass に押韻)

②の「割って迎える」の原語 yashuqqu は「半分に分ける、折半する」であり、恐らく二十七夜月のヒラル(三日月)がアラブの「半月刀」と看立てられ、それが出現した後、やがて東の夜空を切り裂き「割って」、露払い的に太陽の出現を迎えることを言ったものか。③の文意は②の内容に感情や感興が湧くほどのことではない、と。太陽の出現はたちまち「二十七夜月」のきらめき鈍くか弱い半月刀であるヒラルを、その存在を拭き消してしまうのだから。

3-10 「第十サラス」第二十八～三十夜月

ミハーク Mihaaq (隠れ月)

第十サラス「二十八夜月～三十夜月」まさに月末の三日間。わが国の晦日、三十日を最後とする三日間。晦日は月が隠れるの「月隠」がいわれとされている。一か月(360度)の後半月(180度から)の一部であり、それを五分割した最後の五番目に当たる。十分割のサラスにおいても最終サラスとなる。およそ350前後から360度の間がその領域になる。二十八宿においては二十八夜月までであり、その後はヴェールに隠れて姿を見せない。それが一日か二日続くことになる。二十八夜月がわずかに明け方東の方に細い姿を弱々しく見せるだけで、すぐに陽光に消されてしまい姿が見えなくなる。

月末に当たる第十サラス「二十八夜月～三十夜月」については、代表語にミハーク Mihaaq (隠れ月)を挙げておいた。が、他に多くの別な用語がある。というのも二十八宿の関連でのサラス、及び小の月(二十九日)、大の月(三十日)との関連からの用語が混入しているからである。小の月は二十九日で終わり二夜しかないため、サラス「三夜月」の構成が取り得ず、従って用語も存在しない、二十八夜以降は各夜の個々の言い方しか採っていないとしている学者もいる。下記ミハークは、Qal (II 360)などは「二十八夜月」のみを指し、「二十九夜月」の方はサラーラ saraar と別している説もある。

とは言え、まずミハーク Mihaaq の用語説明をしておこう。ミハークは、月末の月面を捉えた言い方で「消されるもの、消滅せられるもの」の義で、月本体のみか月光をも言い表しており、せいぜい二十八日の夜に、それも夜明けの東空に糸ほどの細く赤い月が東に見えるか見えないかぐらいである。すぐに消されて見えず「隠れ月」となってしまう。太陽のすぐ西にあり、合となり、東に通過することになるわけであるが、この間の二十九日(小の月)、三十日(大の月)には、太陽光線によって見えないのである。それをアラブは、月が主体的に「ヴェールを覆う」という能動表現を採る。わが国の「晦日」と同じ発想である。もう一つは夜の闇によって、もっと強烈な太陽光線によって「消されるもの、消滅せられるもの」と受動表現がなされる。従ってミハーク Mihaaq はもっと一般的に、「月や月光の見えない月末」の意味で「二十八夜月～三十夜月」を具象することになる。ミハーク Mihaaq は、またムハーク Muhaaq ともマハーク Mahaq とも言われる。これを動詞化したアムハカ amhaqa は〈月〉が「見えなくなる、隠れる」→「月末になる」との派生形を

作る。

「二十八夜月～三十夜月」第十サラーズは二十八夜月を除いては月本体が二日ほど無い訳である。それ故〈三夜月〉のサラーズの用語を採らず、と言うより採り得ず、個々で一夜ずつ言い表す言い方と、二夜と一夜に分ける言い方とがある。Mas などでは「二十八夜月～三十夜月」と「三夜月」を一つに括らず、二十八～二十九月夜と三十夜月と「二夜」と「一夜」の二つに分けた形にしている。ここで述べたミハーク *Mihaaq* を大の月の「三十夜月」として、前者「二夜」をダーリヤターニ (*Daariyataani* 二人の身を隠す、紛らわす、惑わす者) と双数表記している。二十八夜月の一つのダーリヤ (*Daariyah*) として、見えない月は自らが「身を隠す者、紛らわす者」であり、それを探す者には「惑わす者」になってしまうからである。二十九夜月は二つ目のダーリヤであり、この両方を合わせてダーリヤターニ (*Daariyataani*) と呼ぶわけである。

Hamuur の方は、再述することになるが、ここで述べたミハーク *Mihaaq* (隠れ月) は「二十五夜月～二十七夜月」の方としており、ダアーディー *Da' aadii* (急かれ月) を最後である「二十八夜月～三十夜月」であるとしている。またこれに続けて「二十八夜月～三十夜月」のみ「一夜月」ずつ別名を記している。この点では *Qal* を踏襲したものであろう。いずれも「闇月」と称してよく、夜闇の黒さを強調した用語にしている。「二十八月夜」はダウジャーウ *Da'jaa'* (漆黒の、真っ黒な、黒い瞳のような) と、「二十九月夜」はダフマーウ *Dahmaa'* (黒鹿毛のように黒い) と、「三十夜月」はライラーウ *Laylaa'* (最も夜らしい＝真っ暗闇) とに分けた形にしている。

この Mas や *Qal*、*Hamuur* の「二十八夜月～三十夜月」の分類の事例でも分かるように、月初め同様、月末は日常生活のけじめ、節目や風俗習慣的関心が払われるため、いくつかの特別用語が存在する。わが国でも三十日とか晦日の他にも、月尾、月尽とか習俗にもまつわる言い方があるように、アラブも実は上に挙げた月末用語の他にもいくつか持っており、それを少し紹介しておこう。それらの存在は夜空、月、星をアラブが如何に頼った日常であったことがこうした事例でも明らかであろう。「小の月」の月末となる「二十九月夜」は、上で述べたダフマーウ *Dahmaa'* 「黒鹿毛」のほかにも、色ではなく奥にこもっているとしてサラー *Saraa'* (臍＝*surrah* のように奥まって隠される、秘される) との用語もある。「大の月」の月末の用語「三十夜月」は、「小の月」のものも含めてさらに多様である。ダルマーウ *Dalmaa'* とは「月の最後の夜」の意味であるが、元は色の用語で〈斑の無い滑らかな〉「真っ黒、漆黒」から由来する。他にガンマーウ *Ghammaa'* がある。「雲」*ghaym*、*ghamaamah* から派生しており、「雲の多い、雲行き」が原義であり〈月が〉「雲で覆われている、先が見えない、雲行きが怪しい」→「黒さ、暗さ、闇が雲のごとく覆っており、月が杳として知れない、存在が確認できない」として「三十夜月」としての用語になった。さらにシャイバーウ *Shaybaa'* がある。「白髪の老女、白髪交じりの女性」の意味で、他の部分が黒く頭が白いところから既に月初めの連想からの名称であろうか。シャイバーウ *shaybaa'* はアシュヤブ *ashyab* (灰色の) の女性形であり、白黒入り混じったの「灰色」が原義にある。あるいは「老婆」の「老」に「月末」の意味をもたせているとも受け取れよう。最後に紹介するファルタ *Faltah* は「不意打ち」であって、同じ「三十夜月」でも「月末」に意味を持たせている。普通の「三十夜月」の意味の他に「不意打ち」の語義が連想させるように「神聖月の月末」の特称でもある。プレイスラム期は宗教儀礼もからむ「神聖月」が七月、十一、十二、一月である。この間は戦闘行為、流血沙汰を犯してはならなかった。十一、十二、一月は十二月のハッジ (メッカ巡礼) のため「神聖月」となっており、ラジャブ (七月) は年度の途中に置かれ

「孤立した神聖月」であった。敵対部族との戦闘、復讐戦、襲撃などが急に中止される。血気にはやる戦闘員は「神聖月」が終わるのを、今か今かと待って、月末を迎える。我慢できない若者などは、戦闘行動に出たくて手ぐすねをひいている。月が明けたか明けないうちにファルタ *faltah* 「不意打ち」を喰らわせるのである。このため、「月末」の一般義のほかに、特に神聖月の七月と一月との最後の夜はファルタ「不意打ち」を狙われる恐れがあった、そんな状況語なのである。

「晦日」「月末」を表す代表語はサルフ *Salkh* (脱皮) である。この語は語根からして〈節目の終わりと新たな節目の準備〉の意味を実現する。「(月が) 終りになる」動詞は *salakha* という。「古い皮を脱ぐ・剥ぐ、脱皮する」などが意味の中心をなしており、新旧の節目になることが月の場合、物体の「月の面」と時の「一か月」が同時にとらえられている。「月が末を迎える、終わりにになる」*salakha al-shahru* とは、動物が古い羽毛を換えるように、蛇が脱皮するように、月が古い一か月の装いを脱ぎ捨てて新鮮な明るい装いで現れるその期間の意味である。「(一か) 月が我々を一脱皮(=一皮)、一脱皮と脱がし去る、われわれに時が過ぎゆくとともに) *salakha-naa al-shahru salkhan wa-salkhan idhaa maḍaa "annaa* (Tha.353)。同族語に *mislaakh* (剥がされた皮) があり、有名な「彼は人間の皮をかぶった動物だ」との言い回しがアラブにはある。例えば「彼は人間の皮をかぶった驢馬だ」*huwa ḥimaarun fii mislaakhi insaanin* とは一見利口そうに見えて実は愚か者であったり、ひ弱そうに見えて実は頑強者であったり、した場合に言われる。なお *salakha* は対象が同じ「時」ではあるが、月ではなく昼夜 (*nahaar, layl*) の交代の場合にも用いられる。

同じく「晦日」「月末」を表わす用語にナーヒラがある。ナーヒラ (*naaḥirah, pl.nawaahir, naaḥiraat*) とは、「月の最初の、または最後の日あるいは夜」と言う語である。ナーヒラ (*naḥiirah, pl.nahaa'ir*) とも言う。いずれも *nahr* (胸の上部、のど元→日の初め、月の初め) から由来しており、月末と同時に月始めも意味している。

そして新月 (*hilaal*) が装いを新たに顕われたのが確認されると「新月我らが上に昇り来たり」*ahlalnaa hilaala al-shahri al-jadiidi* などと新月出現イフラール *Ihlaal* が喜びをもって迎えられる。

なお以上のサラース (三夜月)、ないし「～夜月」の用語に共通性のあることをお気づきであろうか。グラル *ghurar*、ヌファル *nufal*、トゥサウ *tusa'*、ウシャル *'ushar*、ビード *buyad > biyd*、ドウラウ *dura'*、ヌカル *nuqal*、ズラム *zulam*、ブハム *buham*、これらの用語のすべては、/CuCaC(un)/ の語形態を採っている。この /CuCaC(un)/ は、不規則複数形の形態であり、改めて「三夜月」ごとが複数であることを想起させている。そして個々の単数を例に採ると「二十八夜月」はダウジャーウ *da"jaa'* (漆黒の、真っ黒な、黒い瞳のような)、「二十九夜月」はダフマーウ *dahmaa'* (黒鹿毛のように黒い)、ダルマーウ *dalmaa'*、「三十夜月」はライラーウ *laylaa'* (最も夜らしい=真っ暗闇)、シャイバーウ *shaybaa'* のように、月は男性なのにも関わらず /CaCCaa'/ の女性形容詞語形を採っていることを注記しておきたい。ジェンダーは男性ながらバドル (満月) の表象を見れば明らかなように、そのかもし出す形象や属性が女性的であることは否定できないほどにアラブの月観にも表われている。

3-10-1 「二十八夜月」 *ibn thamaani wa- "ishriin*

「二十八夜月」以降は上に述べたように、もはやサラース「三夜月ごと」のくくりができないこともあり、一夜ごと個々に用語を当てはめているケースもある。「二十八夜月」イブン・サマーニ・

ワ・イシュリーーン ibn thamaani wa- "ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜、太陽の宿る宮 (burj) (例えば牡羊座) とは東に330度辺りにある。黄道十二宮を分割した二十八宿の、最後の二十八番目に在って一か月の円を締めくくる。牡羊座からならば第二十八宿バトゥン・フート「魚座 魚の腹」 Baṭn al-Huut がその「月の宿」(manzil) である。即ち魚座のδ星を中心にした宿、または同経度にあるアンドロメダ座のβ星、これが作る宿に月はほんのりとした見えるか見えないかの身となって、光も弱々しく微かな光を地上に送る。

図表5第四スプウの一か月¼天球図では真上に描かれている。第二十八夜、その夜には、明け方に太陽とほぼ同時か直前に昇って来るために、それに拭き消されるように見えない。見えたとしても、纖月であって余程目の良い人でなければ見えない。その見え隠れする月であっても、それを迎え入れて宿を提供するのは「月の第二十八宿」。月相図ではほぼ闇に包まれ明るさが全く見られない「第二十八夜月」の月面を見せている。そしてその月が休む宿、第二十八宿バトゥン・フウト「魚の腹」は宿上では、魚座の最後¼から¼までと締めくくられる。天球図の円の大外の第二十八夜月の宿の象徴図では、第二十七夜月と同様な仕草であり、半人のキメラかは定かではない。前夜の人物は髭を生やした一人前の男であったのに対してこちらは若者であり、また下半身が定かではない。飛翔脱皮して新月へ移行してゆく姿なのか、また何か怪獣に飲み込まれているようにも見えるが…。ひょっとしてその怪獣が分点の隙間に潜むドラゴンヘッドやドラゴンテールであって、牡羊へのバトンタッチとしての天球の、二十八宿の循環(を乱すの)を象徴しているのかも。

シジスターニーは「二十八夜月」について、以下のような俚謡を伝えている：

- | | |
|--------------|---------------------------|
| ① 二十八夜月、それは | ibn thamaani wa- "ishriin |
| ② 太陽の光線と競い合う | asbiqu shu" a" a al-shams |
| ③ 寄合も長引くこと無し | laa uṭīlu l-jals |
| | (shams と jals とが押韻) |

二十八夜月は太陽よりもほんの直前に昇ってくるため、〈太陽の光線〉と asbiqu (競い合う、ないしはそれに先んずる) ことになる。二十八夜月が夜明けと日の出の間に昇って来る。アラブの観測眼の鋭さが表出されていて面白い。ところでこの場合の光線 (shu" aa") とは、現今では太陽でも月でもそこから発する「光」のことを指して用いられるが、本来的には太陽のみの光線を指して用いられたのであり、しかもギラギラするような強烈な光線ではなく、日の出や夕陽に見られる、どちらかと云えば弱々しい赤味を帯びた光線を指して用いられたことに留意されたい。夜明けが来ても闇の黒さの中にすぐに太陽光線が反射するわけではない。周知のように夜明けは夜が白んできて、それが白く広がるのである。その白んできた空にやがて直接太陽光線が射して赤味を帯びる。これがここでいう shu"aa" なのであって、この時期に「二十八夜月」が昇るとアラブは信じているのである。この月が昇る頃になると、多くのテントの民は起きだして、朝仕事の準備を始めている。一日の仕事始めて忙しいため、何か相談事があって寄合 (jals) があっても、時間をかけて長居することは誰も出来ない。月本体からすれば太陽と寄り合うことも、接近が長引くことも忌避することになる。

シジスターニーでは②までであり、③はマスウーディーの方(「二十九夜月」)で補った。押韻関係からここが相応しいからである。後者では、この前夜の「二十七夜月」の言い回しをこの「二十八夜月」にそのまま持って行っている。またカルカシャンディーではアラブの俚謡はこの

「二十八夜月」までであり、「二十九夜月」「三十夜月」は記載されていない。カルカシャンディーの「二十八夜月」の記されたアラブの俚謡はシジスターニーの方では「三十夜」に記されているので、後述する。

さて月は十二宮の最後「魚座」はこの二十八夜月の宿を通過すると同時に、脱皮して新たな第一宮牧羊座の宮に入ってゆく。実はこの間の闇空間が相当あることになるのであるが、第十二宮および二十八宿についての、占星術がらみで運勢や吉凶観あるいは指針となるものは如何であろうか。その一端をここで示しておく。十二宮を先に、二十八宿をその直後に記す。全体のブルジュ(宮) $\frac{1}{4}$ とその細分であるマンジル(宿) $\frac{3}{4}$ の間に多少の食い違いがあるのは、マンジルの方がブルジュを跨ったり、また部分的なあるいは一時的な解釈がそこに投影されて調整的な役割も担っている。この種のものには付き物である。

月が第十二宮星座魚座・双魚宮のブルジュ(塔)に在る間、即ち第二十六マンジル(宿)の $\frac{1}{4}$ 、第二十七マンジル、第二十八宿すべて(いずれも $\frac{3}{4}$)、とに宿る間の指針・吉凶・運勢は：

月が双魚宮に宿る時、学問、神学を学ぶべし

諮問すべきことは相談役や法官に意見を求めよ

新調衣類の着用するが良い

出血は差し控えるべし

月が第二十六マンジル(宿)にある時の運勢は第十一宮水瓶座^{がめ}のところで述べた。次の第二十七マンジルにある時の運勢は：契約・協約を結ぶのには、最初はうまくゆくが最後は被害を受け揉め事で終わることになる。旅行は差し控えた方がよい、船旅では危険と労苦が伴うことになる。奴隷を購入するのもよくない、性悪な者となる。捕虜になった場合は、牢獄からは解放されることはない。(日本を含む中国を中心とする東アジア文化圏の宿曜道二十八宿観では第十四番目の「壁」宿に当たり、独自の「旅行や行動で南に行くは凶」などの運勢判断がなされている)

月が第二十八マンジル(宿)にある時の運勢は：契約・協約を結ぶのには、最初はうまくゆくが最後は失敗に終わることになる。奴隷を購入するのに不向きで、性悪で短気、奢り高ぶるの者となるであろう。捕虜になった場合は、牢獄からは解放されることはない。(東アジア文化圏では第十五番目の「奎」宿に当たり、「万事が吉」と吉日と判断されているようである。アラブ・イスラム圏の二十八宿観の運勢判断として全体を観ると、奴隷や捕虜になった場合など、近代以前の関心がうかがい知れよう)

3-10-2 「二十九夜月」 ibn tis" wa-"ishriin

「二十九夜月」の別称ダーリヤ Daariyah (隠れ月)、ダフマーウ Dahmaa' (黒鹿毛月)、サラール Saraar (秘月)については3-10節第十サラースのところで述べた。

「二十九夜月」イブン・ティスウ・ワ・イシュリーーン ibn tis" wa-"ishriin。その夜の「月の宿」は何処か。月はこの夜は、太陽と「合」となって、身を全て覆い尽くしたまま、宿も定かでなく姿も現さない。しかし時には東に在る太陽との距離が少し空いていたり、その間に雲があつて暗さがある場合、糸のような二十九夜月が見えることもある、特に遠視の効く者には。

シジスターニーは「二十九夜月」については以下のような俚謡を記している：

- ① 二十九夜月、それは ibn tis" wa- "ishriin
 ② 痩せ細りて縮こまり da' iilun saghiirun
 ③ 視力良い者以外 観る能わず wa-lā yarā-ni illa al-baṣiirun
(saghiirun と baṣiirun に押韻あり)

「痩せ細りて」の原語 *da' iil* は、当然「月の身体」を形容しての語句なのだが、「太陽」を忌み嫌う「月」のこと、具体的には本来あるべき身体のサイズを小さく、縮こませている状態を言うのであり、従って「見つからないように隠れようとする」及び「目立たないように」という心的状態がモチーフになっている語である。それ故にこそ、この月を探そうとする *baṣiir* 即ち「目の良い者」だけにわずかなチャンスがあることになる。すっぱり覆った月の身体でもちょっとした仕草が時には見えることもあろう。実際は多くの場合太陽に隠れて見えない。この隠れ月の状態は、小の月は二十九夜月だけになるが、大の月の場合は翌三十日まで続くことになる。

マスウーディーでは、すでに述べた如くこの「二十八夜月」の言い回しとして記している。

3-10-3 「三十夜月」 *ibn thalaathiin*

三十夜月、三十日月の別名ライラーウ *Laylaa'* (最も夜らしい夜)、ダルマーウ *Dalmaa'* (漆黒月)、シャイバーウ *Shaybaa'* (灰月)、ファルタ *Faltah* (不意打ち月) については3-10節第十サラーズのところで述べた。

「三十夜月」イブン・サラーシーン *ibn thalaathiin*。三十^{みそ}日月、その夜の「月の宿」は何処か。「二十九夜月」から既に月は「宿」を持たず、ヴェールで覆われたまま、或いは脱皮して翌日を待つ。二十九夜月と新月の朔月とを埋める太陽と同経度の天球空間を指す。従って小の月では無いことになる。従って大の月となり、これ以上月が隠れ、隠されることがなくなる。

「三十夜月」に関して、シジスターニーの「夜や昼の書」に記される里謡には：

- ① 三十夜月、それは ibn thalaathiin
 ② 新月が待たれる hilaalun mustaqbal
 ③ 星没するのが速いこと sarii" u l-uffal
(mustaqbal と uffal とが押韻)

「新月 *hilaal* が待たれる」と記されている。新月が現れない場合、その時点のその夜から「三十夜月」を迎えることになる。即ち翌朝は「三十日」の「大の月」が続くことになる。太陽と全くの同時に、あるいはいくらか遅くに昇るため、月はまったく姿を見せない。夜間は従って闇夜であり、星月夜が微妙な明かりながらも冴えることになる。見上げて、対話するはずの月は、その影も形も見せない。そのため、見上げる夜空は、月との出会いではなく、月光がないためその分はるかに光度を増した星月夜の方に関心が奪われている。月日の目安としても、改めての星への認識が更新される。星を見つめていると、星々の位置取り、星座の星取りなど、それらと関係した逸話を思い出しながら、仰いでいると闇夜であるためその移動の速いこと、没するのが速いこと。我々も日没時や月の運行でよく感じることである。

上の俚謡で「星没する」は原語ウッフアル *uffal* が用いられている。ウッフアル *uffal* とは *aafil* (西没するもの) の複数形で、押韻の関係上用いられた。動詞 *afala* は「〈月・星〉が没する」を意味しており、アーフィル *aafil* はその能動分詞形である。複数形であるのは個々の星の西没がアーフィ

ルであり、同経度にある複数の星、特に星座の西没がウッフアル uffal に当たるからである。まさに「星月夜」なので全天の星が良く見え、その移りも速く感じられる。なおこの語ウッフアルは語根から動作主が〈天体〉であるところも興味深い。二十八宿などで専門用語となっているナウ naw' ですら動作主は〈人間〉であり、(重い荷などで堪えられず)「崩れ落ちる、沈み込む」であって、それが外延されているに過ぎない。なおシジスターニーには②までだけで、③は al-Mas" uudii の記述より補ったものである。

4 雨 一か月内の雨

一か月の中でも特に雨の期待が出来る、信じられる夜がある。それは二十八宿のナウ（日の出時に西没する宿）に当たる日であり、各宿は十三日ごとに順次回って来るので、一か月のうちには少なくとも二回、多くて三回のナウが見られる。ナウは一日で終わる場合もあれば、数日続く場合もある。あるナウになると、空の気配が変わるのである。宿となる星ないし星々は、重荷を背負ったように西の地平線に消えてゆく。遊牧アラブはそれを湿気や雨を寄せ集めてくれるものと思い、その行方を、その空の気配を祈るように見守る。祈りの姿は、そのナウの星々への誓いともなったし、余りの乾期の時には、雨乞いも兼ねて何らかの行事を伴った。イスラム期以降、異教信仰の排除に伴って、公にはされなくなったが、メッカ・メディナ間にあったマナート神 (al-Manaat) は竜神よろしく水神でもあったらしく、その神域での雨乞いが行われていたようだ。マナート神は三女神の中の主たる神体であって、ナウの時期には威力が増すものと信じられた。一説では名称マナート manaat そのものもナウ naw' から由来しているとの説があるくらいである。メディナのアウス族やハジュラジュ族ほか半島西岸の諸部族により信仰されており、両部族もメッカ巡礼の際、その最後の儀礼である剃髪はメッカでは行わず、このマナート神の前で行って巡礼の完了としたことが伝えられている。しかしムハンマドのメッカ征服と前後して、その偶像神も神域も破壊されてしまった。その使命をおびたのがアリーであり、その神殿の宝剣の一つが預言者からアリーに渡されたあの有名なズー・ファカール (Dhuu al-Faqaar) の二股剣であった。マナート神の威力やナウの観念だけは根強く残り、ナウの折はそのナウの宿を構成する星々を眺めやり、祈りや雨乞いを念ずる風習は続いた。山羊座、水瓶座、魚座の中にある宿のナウはその宿名がサアド（幸運）と続くのは、その雨のお蔭を言っており、雨季にも当たり、期待を外れることはあまりなかった。むしろ第三宿のスラッヤー（昴）と第四宿のアルデバラーン（後追う者）のナウの頃は、四月から五月、最後の降雨の期待がかかり、その頃の雨こそその後の乾期に牧草と農作物を約束してくれるものとの期待感が満ちるものであった。第四宿のアルデバラーンは赤星であるため、縁起の良い宿とは見做されていないが、御目出たくあり、豊饒性のある第三宿のスラッヤー（昴）のダバラーン（後追う者）であるため水や降雨に関しては好感を持って迎えられた。月もまた湿り気を帯びたものとして解釈されており、月がこれらの宿に体を休める時、一層の水や降雨の期待がかかるものであった。

ナウ自体がその時期の降雨をも表すこともあり、「何夜月の雨」との特称は持たないが、矢張り「時」の変わり目は、上に述べたように特別な「気」、「風」感ぜられるようだ、月替わりの前後には「何夜月の雨」の言い方が残っている。「月始め」と「月末」とにである。

一か月を二分して、既に述べたようにその前半月の夜をラジャル Rajal と言っていた。そしてこのラジャルの用語は〈雨〉の関与もある。双子座の日没後の出現 (matla") は冬の時期に向かう最

初であるが、その折の雨をラジャルと言って、農牧民は喜んで迎えるものであった (Qut.181)。

降雨の吉凶で言うと、ひと月の後半、即ち満月過ぎの後半月・カラフの日の雨は、喜ばれない。(Qut.182) しかし三十日夜雨、晦日雨は別である。この雨をマタル・サラール *maṭar al-saraar* といっている。陰暦での話であるが、アラブ世界にはひと月の中、3-10及び3-10-2で述べた「最後の夜」を指示する語サラール (*saraar*) があり、その夜の雨は御目出度いもの、祝福されるもの (*maḥmuud*) として古くから喜ばれたものである。もっとも借金や負債のある者は上で述べたように別であるが。わが国でもひと月の最後の〈日〉を指示する語を持っており、みそか (三十日) とかつごもり (晦日) とか言っている。しかしその〈夜〉を表わす語は無い。アラブに何故独立した「三十日夜、晦日夜」の語サラールが存在するかと言えば、彼らの夜の文化の比重が影響していようし、矢張り一日が何時から始まるかに関与していよう。日没から一日が始まることを考えれば、我々の言う「二十九日の夜」は「三十日夜、晦日夜」にあたるわけになるのだから。サラールの夜は真つ暗闇である。面白いことにこの夜・サラールに降る雨 *maṭar al-saraar* は、降雨後の土地の豊饒さと牧草の潤沢さを約束してくれる、とアラブは信じて疑わない。農業に携わる者には土地の豊饒さ (*ghazaarah*) から農作物の豊作を、そして牧畜の関係者には牧草の潤沢さ (*kathrah al-kala'*) から家畜の肥育と多産の繁殖を期待できるとして。

更にその「三十日夜、晦日夜」サラールが「月の宿」の星没ナウと重なれば、喜びが倍加される。というも上に述べたように、ナウの日もまた「降雨」の期待が大きいからである。二夜連続する雨を期待してか、祈りか：

それらのナウ 月の晦夜と交わる

talaqqaa naw'u-hunna saraara sh-shahr

ナウの何と良きかな 秘儀 (の喜び) また倍加されん

wa-khayru n-naw'i maa laqiya s-saraaraa

(Qut.180)

上の詩句はウマイヤ朝砂漠派詩人ラーイー-al-Raa" ii (714年歿)の作とされている。詩中冒頭の「それら」とは *manaazil* (二十八宿) のこと。いずれの宿のナウにせよ、ナウはその時降る雨をも意味する。それがサラールと重なれば、ただでさえ月は隠れて暗いうえに、雨雲に覆われている。雨の暗闇に隠された秘儀が、何層倍にも重なって、嬉しいことこの上無い、と。

【引用・参考文献】

-
- Al-"Aklii M.M. : Ibn Seeriin's Dictionary of Dreams, Pennsylvania (USA), 1992
 Allen R.H. : Star Names Their Lore and Meaning, New York, 1963
 "Askarii A.H." : Jamharat al-Amthaal, 2vols, Beirut, 1988. 本稿略号 Ask.
 "Awdu Illah A.S. : Tafsir al-Ahlaam, Cairo (Daar al-Tiba'a al-Hadiithah), n.d.
 Ph. Bammorrough : Treasures of Islam, Blandford Press (G.B.), 1976
 バートン、タムシン著 豊田彰訳『古代占星術—その歴史と社会的機能』、法政大学出版局、2004
 Baydaawii : Anwaar al-Tanziil, Cairo, 1968, 2vols.
 ビールーニー著 山本啓示・矢野道雄訳『占星術教程の書』(1)『イスラーム世界研究』第3巻2号 (2010年3月) pp.303-371
 ボッテロ、ステーブ著 矢島文夫訳『メソポタミア文明』創元社、1994
 J.L.Burckhardt : Notes on the Bedouins and Wahabys, London, 1967.
 R.F.Burton : Personal Narrative of a Pilgrimage to al-Madina and Mecca, New York, 2vols. 1964

- Pierre Cachia : Popular Narrative Ballads of Modern Egyptian, Oxford Press, 1989.
- M.Ibn Muusaa al-Damiirri : Hayaat al-Hayawaan, Cairo (Daar al-Tahriir), 2vols. 1965. 本稿略号 Dam または『動物誌』
- C.M.Doughty : Travels in Arabia Deserta, New York (Dover ed.), 1979
- グタス、デミトリ著 山本啓二訳『ギリシャ思想とアラビア文化—初期アッバース朝の翻訳運動』勁草書房、2002
- al-Hamadhaanii, Ahmad Ibn Husayn : al-Maqaamaat (Muhammad Abduh 改訂), Beirut, 1889. 堀内勝訳。本稿略号「Ham」
- 『マカーマート』(1)『イスラーム世界研究』第5巻1-2号(2012年2月)216-298頁。
- 『マカーマート』(2)、同上誌第6巻(2013年3月)305-427頁。
- 『マカーマート』(3)、同上誌第7巻(2014年3月)369-492頁。
- Charles Hamilton : The Hedaya, Commentary on the Islamic Laws, New Delhi, 1979.
- "Arafaan Hammuur : Mawaasim al-"Arab al-Kubraa, 2vols, Beirut, 1999
- al-Qaasim al-Hariiri : al-Maqaamaat, Beirut, 1965.
- 和訳 堀内勝、『マカーマート』平凡社東洋文庫、2008-09、3vols. 本稿略号「Har」
- "Abbaas Hasan : al-Nahw al-Waafii, Cairo, n.d.4vols.
- J.G.Hava : al- Faraa'id al-Durriyyah, Catholic Press, Beirut, 1951
- 田村秀治他訳『詳解アラビア語—日本語辞典』ユニテッド・パブリッシャーズ 1980
- Ibn Hazm : Jamharah Ansaab al-"Arab, Cairo (Daar al-Ma'aarif), 1971. 本稿略号『アラブ系譜集』
- Ibn Hishaam : al-Siirat al-Nabawiyyah, Cairo, 1955
- 英訳 A.Guillaum : The Life of Muhammad, Oxford Univ.Press, 1968
- 堀内勝：『砂漠の文化』教育社新書 1979
- ：『ラクダの文化誌』リプロポート 1986
- ：『星と動物 獣帯(黄道12宮)—アラブ・イスラーム世界のフォークロア—(1)雄羊・雄牛・双子、(2)蟹・獅子・乙女、(3)天秤・蠍・射手、(4)山羊・水瓶・魚』『アリーナ』第10、12、14、15号2010年12月～2013年5月
- ：『アラブ遊牧民のカレンダー、星の歳時記』『アリーナ』第16号460～525、2013年12月
- T.P.Hughes: Dictionary of Islam, Clifton, New Jersey, 1965
- S.H.Huuke : Middle Eastern Mythology, Pelican Book, 1963
- Abu l-Faraj al-Isfahaanii : Kitaab al-Aghaanii , Cairo, n.d. , 24vols.
- al-Jaahiz : Kitaab al-Hayawaan, Cairo (Daar al-Tahriir), 7vols. 1965. 本稿略号 Jah または『動物の書』
- al-Jalaalayn, al-Mahlii & al-Suyuti : Tafsiir al-Jalaalayn, Cairo (Maktabah al-Jumhuuriyyah al-"Arabiyyah) n.d.
- al-Jamal I.M. : Tafsiir al-Ahram, Cairo (Maktabah al-Qur'aan), 1980
- M.H.Jurdaak : al-Qaamiis al-Falakii (Astronomical Dictionary), Beirut, 1947
- W. Lane : Manners and Customs of the Modern Egyptians, London, 1954.
- 部分邦訳 大場正史『エジプト風俗誌』桃源社、昭和39年。
- W. Lane : Arabic-English Lexicon, New York, 1995年版、1863、初出版、8vols.
- Lunde and White : A Dictionary of Arabic and Islamic Proverbs, London, 1984.
- マッコール、ヘンリッタ著 青木薫訳『メソポタミアの神話』丸善ブックス、1994
- 前嶋信次：『イスラームの陰に』、河出書房新社、1975
- 前嶋信次・池田修訳：『アラビアン・ナイト』平凡社東洋文庫、全18巻。
- al-Maktabah al-Thaqafiyyah 編、Abuu Ma'shar al-Falakii al-Kabiir li-r-Rijaal wa-n-Nisaa', Beyrut, n.d.
- Ibn Manzoor : Lisaan al-"Arab, Beirut (Daar Saadir), 1990, 15vols.
- al-Mas'uudii, Abu al-Hasan : Muruuj al-Dhahab, Beirut, 1965, 4vols.
- 中山茂『占星術』紀伊國屋新書、1964
- A. al-Maydaanii : Majma' al-Amthaal, 2vols, Cairo, 1955. 本稿略号 May.
- Alois Musil : The Manners And Customs Of The Ruala Bedouins, New Yourk, 1928
- al-Nasafii, "Abdullaah ibn Ahmad : Tafsiir al-Nasafii, Cairo, n. d. 4vols.
- ニザーミー著 岡田恵美子訳：『ライラとマジュヌーン』平凡社東洋文庫、1981
- Abuu Nuwaas : al-Diiwaan Abii Nuwaas, Beirut, 1953
- al-Qazwiinii Zakariyaa; "Ajaa'ib al-Makhluuqaat, Cairo, 1401/1981. 本稿略号 Qaz.
- al-Qurtubii, M. A : al-Jaami' al-Ahkaam al-Qur'aan, Cairo, n. d. 8vols.
- Ibn Qutaybah : Kitaab al-Anwaa' fii Mawaasim al-"Arab, Cairo, 1956 本稿略号 Qut. または『アンワウ』
- al-Ma'aarif, Cairo (Daar al-Ma'aarif) 1969.
- ：Uyuun al-Akhbaar, Cairo, 4vols, 1963

- M.A. Qutb : Daliil al-Hayraan fii Tafsiiir al-Aḥlaam, Cairo (Daar al-Tibaa' al-Hadiithah), n.d.
 al-Saraqustii 著 J.T.Monroe 英訳 : al-Maqamaat al-Luzuumiyyah, Brill, 2002
 佐藤次高・柴田三千雄 : 『生活の技術 生産の技術』、岩波書店、1989
 Y.A.al-Shiiraawii : Taqwiim al-Shiiraawii, Baḥrayn , 1994
 M.ibn Siiriin : Asraar al-Manaam fi Tafsiiir al-Aḥlaam, Cairo (Daar al-Tibaa'a al-Hadiithah), n.d.
 F.Steingass : A Learnaer's Arabic-English Dictionary, Beirut, 1972
 al-Su"dii, Muḥammad ibn Amiir : Maṭaali" u al-Saadaat, Paris, Bibliotheque national de France 所蔵。
 J.al-Suyuutii : al-Muzhir fii "Uluum al-Lughah wa-Anwaa"i-haa, Cairo (al-Ḥalabii), n.d. 本稿略号 Suy.
 : Ta'riikh al-Khulafaa', Cairo, 1964.
 Swietochowski & Carboni : Illustrated Poetry and Epic Images, The Metropolitan Museum of Art, NewYork, 1994
 Ibn al-Jariir al-Ṭabarii : Ta'riikh al-Rusul wa al-Muluuk Cairo (Dar al-Ma"arif), 1977~90, 11 vols
 Aḥmad Taymur : al-Amṭhaal al-"Aammiyyah, Cairo (Markaz al-Aḥraam), 1949
 R.C.Thompson : Semitic Magic, London, 1908.
 Al-"Usfuur M.M. : Fii Ta"biir al-Ru'yaa wa-l-Manaam, Kuwait, 1406/1986
 al-Ṭuukhii "A.S. : Aḥkaam al-Ḥakiim fii "Ilm al-Tanjiim, Cairo (Maktabah al-Qaahirah), n. d. 6vols.
 W.Wright : A Grammar of the Arabic Language, Cambridge Univ.1962 2vols.
 山本啓示「初期アッパース朝と歴史占星術—アブー・マアシャルの『宗教と王朝の書』について」『オリエント』第44
 巻第2号(2002年3月)
 「アッスーフィーにおけるギリシャ星座の伝承と変容」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第7回第2号
 (1986年3月)
 I."U. al-Zamakhshari : al-Mustaqsa, 2vols, Hayderabad, 1962 本稿略号 Zam.
 : al-Kashshaaf, Cairo, 1966, 4vols.
 ポングラチェ・ザントナー著(種村季弘他訳)『夢の王国』、河出書房新社、1987